
chronos

天月 琉架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

chronos

【Nコード】

N4343G

【作者名】

天月 琉架

【あらすじ】

大学2年の宮沢斗真には仮で付き合っている恋人がいる。そのひとは友達で、憧れで——。彼に押し切られるように付き合い始めたけど、自分の気持ちが分からない…。甘めの王道BL小説です。

諸事情により3/31をもって削除させていただきます。詳細は活動報告を参照願います。ご愛読ありがとうございます！m(____)m

プロローグ（前書き）

この小説はR15です！

BL小説になりますので、苦手な方はご遠慮ください！

ブローグ

お前が、好きだ。

誰にも渡したくないくらい、好きなんだ。

その声も、その身体も——その笑顔も。

今すぐ俺を好きになって欲しいなんて言わない。

だけど、お前が欲しい。

自分でもどうしようもないくらい、お前を欲しがって仕方がないんだ。

だから、今より少しだけでいい。

俺をお前の特別にしてくれ——

第一話

「……と……う……斗真」

どこかで僕を呼ぶ声がする。

いつも聞いている、少し低くて安心する声。

それが余計に心地良くて、もう少しまどろんでいようと斗真てまつまは胸元のシーツを引っ張った。

「ん……」

ぽかぽかする日差しが気持ち良い。もともと居心地の良いポイントを探した。

うん、今日は絶対二度寝しよう。

っていうかする。だって起きられないし。

「斗真？いい加減に起きないと、遅刻するぞ」

ゆさゆさと優しく揺えられるけど、生憎とそんな可愛い攻撃では起きる気配がない。

「うー……もお……ちよつと……」

まだおふとんの温もりと優しい声に浸っていたい気分だった僕は、声の主に許しを乞うと

そのままパタリと眠る体勢に入る。

あ、この位置が一番イイかも……。

「さっきもそう言った。二度寝は許しても、三度寝はダメだ」

今度はちよつと強気な声が返ってきたけど、どうせこのまま寝てれば諦めてくれるだろう。

そう思つて、傍らの抱き枕を引き寄せて惰眠を貪り始めた。

「んー……」

ぬくぬくのおふとん。

心地良い声。

柔らかい朝日。

ダメだ、何を言われても起きる気が全くしない。

「おやすみ……」

だから諦めてくれ。僕はもう起きないから。

「ふーん……俺がせつかく起こしているというのに、そういう態度に出るのか。ならば、俺

に何されても構わないということだな」

う……何する気か知らないけど、そんな脅しなんかじゃ起きないからな。

どうせ夢なんだからと、斗真は悪態をついた。

何故夢かつて？

だって僕は独り暮らしだ。

だから僕が起きようとしなければ、誰にも邪魔されずに好きなだけ寝てられるってわけ。

偉そうな態度にはちょっとびっくりしたけど。

「ん……」

そんなことをぼんやり考えていると、ふいに柔らかいものが顔に押し当てられる。

少し濡れていて、それでいてどこか熱い…そう、唇みたいな。

「…っ？」

ちゅくつと今度は軽く唇を吸われる。僕は一瞬、何が起こったのかわからなくて混乱した。

重たい瞼を少しだけ開けて、彼のいる方に視線をやった。

「斗真…」

僕の顔を大きな両手で包み込んで、もう一度キスをしてきた。

「んう…」

先ほどよりも深く唇が重なる。熱っぱい瞳で見つめられて恥ずかしさを感じた僕は、開いた瞳をぎゅっとキツく閉じた。

（早く終わって。もう起きるから）

何度も何度も求められる口づけにいたたまれなくなる。

これは夢なのに。

どうしてこんなに切なくなるんだろう。

胸にチクリと痛みが走る。けれどそれ以上に高鳴る鼓動が煩くて、知らないフリをした。

今すぐ起きなくちゃ。認めたくない自分を知ってしまわないように。

「も…起きる…から」

だから、お願い。

そう想いを込めて彼を見る。すると、名残惜しそうにぺろりと濡れた唇を舐めて解放してくれた。

「仕方ないな。早く着替えて、顔を洗っておいで」
耳元で優しく囁くと、リビングの方へと向かっていった。

（た、助かった…）

はぁっと深く吐息を漏らす。何度か深呼吸を繰り返して、ドキドキしすぎてどうになつてしまっ
てしまいそうな心臓を落ち着かせようとした。

「おはよう、蓮^{れん}」

大学の講堂内に入ると、いつも見慣れたクールな男がいた。

「ん？ああ、斗真か。珍しいな、お前が間に合うなんて」

読んでいた本から顔を上げて、こちらへと微笑んでくる。彼はクールな顔と雰囲気醸し

出しているのに、笑うと少し柔らかくなって不覚にも可愛いと思ってしまうのだ。

「なっ…失礼なヤツだな。僕だって、やれば1限くらいちゃんと来るさ」

どきつとする気持ちを誤魔化すようにつんと答えた。

僕は朝がすごく弱い。

暇さえあればひたすら眠っていられるくらい寝るのが好きだ。
そのため、朝9時から始まる1限目にはいつも遅刻するか代返を頼んでいる。

最近、夢のせいできちんと間に合うように起きれているのだが、でもそれを蓮には言えなかった。

その…夢に出てくる、彼が、目の前いる北条蓮ほうじょうれんそのひとだからだ。

（まさか蓮にキスされる夢を見て早起きしてるなんて…っ）

恥ずかしくてそんなこと誰にも言えるわけがなかった。

さらに言えないことに、僕と蓮は…その、世間一般で言う恋人同士だ。

サークルで知り合った友人から紹介されて、蓮に言われるまま付き合うようになった。

女の子とだってあまり付き合ったことがないのに、彼と付き合うなんてどうすればいいのか未だによくわからない。

しかもこの男、異常に格好良い。さらさらの黒髪、透き通った鼻筋、切れ長の眼。普段滅多に笑わないことから、寡黙でクールな男だとキャンパス内の女子が言っていた。

（なんで僕なんだか…）

時折男として虚しさを感じるものの、なるようにしかならないと楽

観的な考えの斗真はそれ以上深く考えることは無かった。

「今日はライ部^ヴに行くのか？」

「いや、今月は響先輩が担当だから行かない。蓮はバイト？」

ライ部とは、僕と蓮が入っているサークルのこと。ライブ好きな響先輩の趣味が興じて出来たお祭り部だ。

アーティストのライブから始まり、絵画やプラモの展示会、シーズン毎のお祭りなど、イベントと称されるものに興味があれば何でも行く。

しかし、如何せん学生なのでお金がない。

なので響先輩がどこから貰ってくる無料チケットか部費でまかっているのだが、チケット代や旅費は意外に高い。だから無料チケットのない時は、2人1組のローテーション形式で出掛けるのだ。

担当外の部員も多くいるが、そういったメンバーはイベントに向けてダンスや振り付けを

覚えたり、果ては楽器を練習するものもいる。

僕は運動神経にはあまり自信がないのでそういった練習はあまりしない。

「ああ。マスターがお前にまた来いつていつてたぜ」

「ホントに？今日の講義は午前だけだから、久しぶりに食べに行こうかなあ」

蓮のバイト先はイタリアンレストランなのだ。僕はそのパスタが大のお気に入りで、よく食べに行く。

リストランテ「Fontana di Trevi」は大学から少し行ったところの閑静な住宅街の外れにある。上品な感じを損なわず、それでいて敷居の高い雰囲気はまったくない。

僕のような学生でも気軽に行けるのは、ひとえにマスターの人柄だと思っている。
優しい雰囲気とそれでいて男らしい紳士的なマスターが僕は大好きだ。

早くマスターに逢いたくて、いつの間にか始まった講義をそっちのけでわくわくとしていて、突然不穏な空気を感じた。

「な…なに？」

「斗真…お前、俺の恋人だってわかってる？」

「んなっ…！」

耳元で低く囁かれた言葉に驚愕した。だってここは他にもたくさんの学生がいる講堂なのだ。

いつ、誰に聞かれるかわからないのに。

「ちよっ…蓮、な…に急に」

ぞくりと響く耳元を押さえて、小さく抗議する。普段、彼はあまり

こういったことをしないので、僕には刺激が強すぎた。どうして急にそんなことを言ったのかもわからない。

「いや、わかってるんなら別にいい」

頬を赤らめた僕に満足したのか、ニヤリと悪戯っぽく笑うと視線を前に戻し、講義を聞いている。

なんなんだ、一体。

講義の間中ずっとその理由を考えていた僕は、授業の内容なんてまったく入っていなかった。

「はあ」

真っ白なままのノートを恨めし気に見る。隣で淡々と話を聞いている蓮が気になって何も出来なかったのだ。

まあ、いいや。考えてもわかんないし。

「斗真、授業終わったらいつもとこな。出来れば悠も連れて来い」
「悠？分かったー。あいつが素直に来るとは思えないけど、声だけは掛けとくよ」

ノートは後で蓮に見せてもらうことにして、次の講義へと向かうことにした。

第二話

閑静な住宅街の外れに佇む、お洒落なレストラン。周囲は瑞々しく緑が広がっていて、とても落ち着いた雰囲気をしている。

レストラン「Fontana di Trevi」は、都内でも知る人ぞ知る隠れた名店だ。

庶民派大学生の斗真は、いつもこの店に来る時少しだけ緊張する。

けれど、エントランスの向こう側から暖かく迎えてくれるマスターの笑顔を見るとすっかりと我が家のように寛げるのだ。

「いらっしやいませ」

「マスター、こんにちは。また来ちゃいました」

扉を開けて店内に入ると、マスターがいつものように出迎えてくれた。斗真は久しぶりに

訪れた店の雰囲気が変わらず暖かくて、柔らかに微笑んだ。

「ようこそ、お二方。お待ちしております。こちらへどうぞ」

「はい」

マスターは恭しく一礼すると、斗真と悠を見晴らしの良い窓際の席へと案内した。

「ねえ、斗真。今の誰？」

席に着くと早々に悠が聞いてくる。蓮に言われたからではなく、普段からよく一緒にいる

悠は斗真のクラスメイトだ。少し自己主張が強い印象があるが、可愛らしい顔立ちなのに男らしさを持つている悠を斗真は気に入っている。

「この店のマスター。崎^{さき}さんって言って、蓮が昔からお世話になっている人だよ。たしか

歳はまだ若かったと思ったけど…」

「ふーん」

流れるような所作で接客をする様は、まるでワルツでも踊っているかのように美しい。本物の紳士っていうのは、ああいうことが出来る人だと思っている。

「何か気になるの？」

普段あまり自分から興味を示すことの少ない友の様子に声を掛ける。先ほどこらずとマ

スターを目で追っている悠の視線が厳しい。

「いや、なあんか裏がありそうだな、ってね」

「はあ？マスターは優しいよ。あんま失礼なこと言わないでよ」

「はいはい、斗真はすぐ人を信じるんだから…」

「…」

まともに取り合ってくれない悠にむうつとする。あんなに優しそうな人なのに、何言ってるんだ？

納得がいけないといった表情でメニューを開く。どうせ口では悠に勝てないのだから、知らないふりをして忘れるのが一番だ。

面倒なことはしない斗真は、何を食べようかと考え始めた。

「ものわかりが良くて助かるよ」

「うっさい。何にするか決めた？」

メニュー越しに口を尖らせて上目遣いをしてくる斗真は、歳の割りに子供っぽく見える。

本人は気付いていないけど、すこしクセのある焦げ茶の髪は少年っぽくハネていて、同じ

焦げ茶色の大きな瞳をより魅力的に見せている。

肌理の細かいぷにぷにの白い肌、幼さを残した無邪気な笑顔。思わずほっこりとしてしま

うような素直さに、老若男女魅了しているのにあまりにも無防備だ。そんな斗真がついつい心配で、悠は余計な気を常に張らなければならなかった。

（なんでこんなんで北条と付き合ってるんだが不思議でしょうがないよ）

はあっとため息を吐くと、注文をするべくメニューを手に取った。

「ご注文はお決まりですか？」

ちょうど今まさにオーダーしようと思っていると、オーナーが声を掛けてくれる。ランチ

の時間帯で決して暇ではないのに、いつもこのタイミング。さすが

は接客のプロだ。

「僕はカルボナーラ。牡蠣抜きでお願いしますっ」

「は…？牡蠣のカルボなのに牡蠣抜き！？」

「いーのっ。オーナーは優しいからいつもやってくれるんだよ。ですよね？」

牡蠣が嫌いな斗真は、もはや裏メニューどころか斗真専用メニューになっている料理を注

文した。初めてこのお店に来た時に、どうしてもカルボナーラが食べたくて『牡蠣抜き出
来ますか？』と頼んでみたら、オーナーが笑顔であっさり承諾してくれたのだ。

以来、冬から春先の時期にこのお店に来ると、決まって牡蠣抜きのカルボナーラを頼むのだった。

「はい。かしこまりました」

子供のような無邪気さで注文する斗真を、眩しそうに見つめながらオーダーを取る。

30歳前後だろうか。整った顔立ちは一見すると鋭く切れそうで近寄りたがいが、柔らかい笑みがそれを緩和している。

それでいて侮れない大人の雰囲気纏っている崎を見ると、只者ではないなと悠は思う。

「そちらのお客様はいかが致しますか？」

ふいに話しかけられた瞬間、はっとした。

まさか自分が話しかけられるとは思ったが、客なので当然の質問をされただけなのだと言っことに気付く。

何を呆けていたのだろうか、僕は。

斗真じゃあるまいし、自分がぼーっとするのは珍しかった。

急いで適当にメニューを選ぶと、崎は足音をまったく立てずに厨房へと下がっていった。

蓮という男自体、得体が知れない部分が多いが、あの男はさらにその上に行く。お店のオ

ーナーともなるとやはり一筋縄ではいかないのだろうか。

そんなことをぼんやり考えていると、斗真が不思議そうにこちらを見ていた。

「なあに？僕の顔が綺麗だからって、あんまり見るとお金取るよ」ニヤリと悪戯っ子のように笑ってからかう。すると純情な彼はすぐに照れるくれるのだ。

「んなつ。悠は綺麗っていうより可愛い系だろ。確かに美人だけどさ。っつか自分で言うなよ、んなこと！」

この自意識過剰！とぷりぷり怒りながらも、自分が見つめてしまっていたことを指摘されて恥ずかしかったのか、頬が少し赤くなっていた。

「可愛いな、斗真は。ホントに大学生？」

ふふつと妖艶な笑みを浮かべると、つんつとほつぺたを突く。

「うーっ。子供扱いするなあっ。それと可愛いとか言うなーっ。僕は男だっ」

ぺいつと悠の手を払うと、ふいと横を向いてしまった。

（そういうところが男心をくすぐってるって分かってるのかな、斗真くん…？）

悠は内心呆れながら斗真を眺めていると、ふいに視線の先に気が付いた。

（ふうん…いくらお子様とはいえ、気になる存在ではあるのかな）

斗真と悠は大学に入学してからすぐに友達になった。なんか面白そうな子がいるなと思っ

て悠から声を掛けたのが始まりだった。

最初は大人しそうな子だなと思っていたが、打ち解けてみると意外にも我が強い。どうや

ら好きなものは好きという自己主張だけははっきりしている性格のようだった。

しかも、同じライ部に所属していたこともあってすぐに仲良くなったのだ。

以来、今ではすっかり一番の親友となっている。

だからこそ、斗真が蓮と仮で付き合うことになったと聞いたときは驚いた。

蓮のほうはどう見ても斗真に執心していたので別になんとも思わなかったが、斗真が蓮を好きなようには全く見えなかったからだ。

よくよく聞いてみると、どうやら考える隙もなく強引に押し切られた、といったようだ。

それから少しずつではあるが、時折蓮を気にする仕種をするようになったのだから、この

まま行けば蓮の粘り勝ちといったところだろう。

それはそれで面白くない…と若干捻くれた性格の悠は、斗真をからかって遊ぶことにしたのだった。

第三話

流れるように動く指先。

忙しくとも少しも乱れた様子のない所作。

コックコートを着ていてもハッキリとわかるくらい鍛えられた身体は、大人の男を感じさせる。

いつになく真剣な面差しで次々と美味しそうな料理が生み出されていった。

いつも飄々としていて、何を考えているのか分からない彼からは全く想像出来ないような表情をしている。

射抜くような強い視線。
額には薄っすらと汗を浮かべている。

厨房の中には、彼の他に料理長らしき貫禄のある男性と、ゴールドに近い明るい髪を一つに括っている男性がいた。

全員、蓮と同じくらいガタイが良い。料理人はやはり体力勝負だからだろうか。

蓮は店のメンバーの中でも一番年下だけれど、勤続年数は長い。前に少しだけ聞いたことがある。確か、中学の頃から手伝いを始め

て、高校に入ってから
厨房に立たせてくれるようになったと言っていた。

現在大学2年になるので、もう8年目だ。

（あ、やったじゃん）

蓮がフライパンから白い平皿へとパスタを盛った。以前お皿に上手く盛り付けられないと
零していたが、盛った瞬間に少し満足そうな顔をしていたので、今日は納得がいったのだ
ろうと思った。

（盛り付けなんて、食べ始めたら関係ないのに）

お腹に入ってしまったえばみんな一緒、なんて蓮が激怒しそうなくらい
斗真は大雑把なのだ。
けれど、納得がいかなかった時に蓮が少し悔しそうにするので、彼
が納得がいったのなら
斗真も単純に嬉しいと思った。

（料理、好きなんだろうなあ）

厨房に立っている時の彼は、普段では滅多に見ることの出来ない真剣な表情をしている。
斗真は、いつもクールそうにしている彼のその顔を見るのが好きだった。

それは、憧れにも似た想い。

何かに必死になれることが、単純に凄いと感じていた。
自分には、ないものだから。

「ま！斗真ってば！」

「へ？」

「ったく、見惚れるのなら一人で来てよね。僕はあつたかいうちに
食べたいんだけど？」

斗真が考え事をしている間に、オーナーが悠の料理を運んできてく
れたようだった。オー

ナーは斗真に声を掛けることなく、気を使ってすぐに下がったよう
だ。『お連れ様は大変

ですね』と珍しく苦笑を洩らしたことも斗真は知らない。

「はあ、斗真がそんなに好きだったなんて知らなかったよ」

「はっ！？何言ってるんだよ、そんなことないって！！」

ガタン、と音を立てて派手に立ち上がる。ビーフシチューを口に運
んでいた悠は斗真の

慌て振りに内心にやりとしながら呆れたような顔をした。

「何をそんなに怒ってるんだ？」

「だっ…悠が変なこと言うからっ」

「変なことって？」

「それはっ…」

問われた質問に斗真は頬を赤く染めて、立ったまま俯いてしまった。

（あゝあ、ダメだな、これは）

思っていたよりも彼にやられて恋する表情をしている友人を見ながら悠は思う。

少し前までは面倒くさがりで、何に対してもさほど興味を示さなかったのに。

そんな斗真の隣に立っているのが自分だけであることが、必要とされているようで嬉しかった。

けれど、今はもう違うのだろう。

そのことに気付くと、少し寂しいような気持ちがした。

「何で立っているんだ、斗真。行儀が悪いだろ。大人しく座ってる」

「げ。」

「れ、蓮!？」

蓮は白い平皿を片腕に乗せてテーブルの前に立っていた。

何で厨房に居るはずの蓮がここに。

今しがた頭の中を占領していた人物を目の前にして固まる。

呆然と立ち尽くす斗真は、仮だけれど一応恋人の蓮が突然現れてパニックに陥っていた。

（い、今の聞いてた!?! いやいや、それよりも何で蓮がホールにいるんだよ!?!）

もはや蓮の言葉は脳に到達していなかった。何で、何故、どうして、という言葉だけが頭

の中を駆け巡り、ぐるぐると無限ループを繰り返す。

そんな斗真の様子を見ていた蓮は、ふう、とため息を零した。

「斗真」

「…っ!？」

耳元に少し顔を寄せて、愛しい恋人の名を幾度か呼ぶ。

呼ばれていることによつやく気が付いたのか、ぴくりと慌てる様子が可愛かった。

けれど、そんな表情を他の客になど見せたくはない。

混雑する時間帯とはいえ、ただ立っているだけでもやはり目立ってしまうものなのだ。

「斗真。考え事してもいいからとりあえず座れ」

着席を促すによつやく座った斗真を確認した蓮は、持っていた平皿を斗真の目の前に置いた。

「お待ちせいたしました。カルボナーラでございます」

コトリ、と静かに置かれた平皿の上には黄金色をしたパスタが美しく盛られていた。
こがねいろ

「うわぁ、美味しそう」

斗真は嬉しそうに料理を見つめる。香ばしく炒められた厚切りのベ
ーコン、程よく散ら

ばっているブラックペッパーの香りが食欲を引き立て、滑らかな生
クリームと卵のホワ

イトソースがたっぷりとパスタに絡まって、ホカホカと熱そうな湯

気を立てている。

「ただっきまーす」

サイドに並べてある銀のフォークを手にとって、上手にパスタを巻きつけていく。

ぱくつと口にすると、絶妙なバランスで甘みと塩気が口の中に広がっていった。

「んん〜っ美味しい〜」

にへらつと満足そうな笑みを浮かべると、次々とパスタが口に運ばれていく。

その表情を確かめて微笑を洩らすと、蓮は厨房へと戻っていった。

「ホント、美味そうに食べるよな。僕にも一口ちょうだい」

「だめっ。悠にはそっちがあるでしょ」

「いいじゃん。減るもんじゃなし。ちよつとくらい寄越せ」

「ああ!」

減るし〜!と必死の抗議も虚しく向かいから伸びてきた悠のフォー

クに奪われてしま

った。

食べ物への恨みは怖いぞ。

『ううーっ』と上目遣いに睨みながらばやく斗真を尻目に、戦利品を口にする。

うん、これは確かに美味しい。

もぐもぐと咀嚼していると、どこからか強い視線を感じた。

何かを感じた方へと視線をやると、蓮が凄い勢いでこちらを見ていた。否、悠を睨んでいた。

（…まじかよ。それくらいで嫉妬なんかするなつての。ふんっ）

チラリと斗真へ目配せをしてから、もう一度蓮を見てふふっとほくそ笑んだ。

そう簡単に友人はあげないよ。

唇でそれだけ紡ぐと、悠は斗真へと向き直した。

「そういえばさ、飯とは言え付き合ってるんだったら、やっぱセックスしたりすんの？」

「ぶふおっ」

突然、際どい質問をされた斗真は派手にお茶を吹き零した。

食後の飲み物を頂いているときにする会話ではない。っというか、どこからその質問に繋がるのかサッパリ分からなかった。

「ななななな…っ」

「汚いなあ〜」

もう、気をつけてよね、と零す悠の神経が信じられない。なんでそ

んなこと平然とした
顔で聞くのか。

斗真はかぁーっと耳まで赤くなってしまい、あまりのことに言葉を
紡げなかった。

「で、実際どうなの」

「どうなのって言われても…」

こんなところで話す会話でもないが、場所を変えれば良いというも
のでもなかった。問
われたものの答えに困ってしまうからだ。

「…何も」

「何も？触ってきたりキスくらいはしてるだろ？キミたちが付き合
い始めてもう2ヶ月
も経つんだよね？」

「………うん」

「…」

「………っ」

「何かの冗談？」

ふう、と盛大なため息を吐いた。信じられないものでも見ているよ
うな視線に、斗真は
いたたまれなくなる。

ため息を吐きたいのは僕のほうだ、と思ったが、自分の中にあるグ
ルグルとした気持ち
が何なのか、よく分からないせいで言えなかった。

あんなに普段から周囲に俺のものだと言わんばかりに独占しようと

するくせに、まった
く手を出していないなんて。

悠にはバカなんじゃないかと思えない。いや、むしろアホだ。
こんなアホ2人に振り回されている自分が馬鹿馬鹿しくなった。

サツサとくつついてしまうものだと思い、またそれを嫌だと思って
いながら期待していた自分がいた。

「はあ……」

「あんまりため息吐かないでよ。別に悠に迷惑掛けてる訳じゃない
のに」

「だって…ねえ」

そうは言っても、結構キミの知らないところで被害が出てるんだけ
ど？

独りごちるが、お子様斗真に言ったところで、蓮の問題だから言っ
ても仕方ない。蓮が
いつまで経っても警戒している原因はここにあった。

つまりは、不安なのだ。

蓮から強引に押し切って始めた関係だった。そのまま押し切って手
を出せば良かったの

に、斗真の気持ちを優先した男はそれをしなかった。

だから、いつまで経っても進展しない。

少なからず、斗真は蓮を気に掛けてはいるが核心を突くまでには至
っていない。

それに気付くためには、やはり切っ掛けが必要なのだ。

「押し倒しちゃうなりなんなりしちゃえばコトは早いのに」

悠はとんでもない爆弾発言をさらっと言っただけだったのだ。

第四話（前書き）

ユニークアクセス数100人突破！
ご拝読いただきありがとうございます。
今回はかなり甘めです。

第四話

『いい？今夜、蓮のバイトが終わったなら——』
悪魔のような甘美な声で、悠が囁いた。

「困ったなあ……」

うーんうーん、と唸りながら斗真はそわそわしながら夜の公園で呻いていた。

蓮のバイトの時間に合わせて、この公園で待ち合わせをする。それは、付き合い始める前からの習慣だった。

ちょうど斗真の自宅と、蓮のバイト先であるレストランとの間にこの公園がある。

蓮はオーナーの家に居候しているので、ここからあまり遠くない。

授業以外では中々時間を合わすことは難しいので、どちらからともなく呼び出していた。

近いから別に面倒ではなかったし、蓮と話すことは楽しかったから。

「ううー、困ったよおー…僕にいったいどうしろと？」

正直ホントに困った。

斗真自身、未だにはつきりと自覚しているわけではなかったから。

（蓮のことは…たぶん、好き…なんだと、思う…けどっ、でもでも）

ココロの中で一人ごちただけなのに、自然と頬が朱に染まる。

元々友人として、一人の人間として好きだったし、それは今でも変わらない。

付き合う前も、付き合い始めてからも、彼はいつだって自分に優しくかったし、しょっちゅう

うからかつてはくるけれど、本気で嫌がることは決してしなかった。

いつも僕が怒る前に自然と違う方へ話を変えてくる。そのタイミングが絶妙すぎて、逆にムカツク時もあるけど。

それ以上に、彼を大切には想っているのは真実だった。その意味はまだ、理解していないけれど。

「はあ…なんだか面倒になってきた」

中途半端な自分の気持ちに。

「こうなったら——やるしかない、よな」

ぐだぐだしているのは性に合わない。

そんなコトしてるくらいなら、何もしない方を選んでのんびり寝てるほうがよっぽど有意

義だと思った。

「斗真。何呆けてんだ？」

「…蓮」

どうやら考え事をしているうちに、約束の時間になっていたようだった。

いつの間にか、自分の目の前に蓮が立っていた。

蓮は一度家に帰って風呂でも入ったのか、昼間とは違う格好をしていた。

漆黒の髪がしっとりと濡れていて、春風に優しく吹かれている。

薄手の黒い長袖TシャツにGパンを履いていて、至って普通の格好だ。

なのに、この無駄に長い足と鍛えられた身体をしている彼が着ていると、どれも高級そうに見えるから不思議だ。

（絶対こいつ日本人じゃないよな）

じとーっと恨みがましくもう一度眺めてみる。

うん、こいつやっぱ日本人じゃない！だって足短いのは日本人の証明！そういう民族なの！

いつ見てもやつぱりムカツク。

斗真だつて170cmと小柄な方ではあるが、至って平均水準だと自分では思っている。

うむうむ、と一人納得していると、蓮は少し呆れたようにこちらを見つめていた。

「で、どうだった？」

「？何が？」

「今日、店に来ただろ」

「うん。すごく、美味しかったよ」

ランチに食べたカルボナーラは本当に美味しかった。あんなに美味しいものなら毎日でも

食べたいくらいだ。

思い出したら思わず笑顔になっていた。

「僕、あれ大好きなんだよねー」

「そうか」

僕が自慢げに美味しさを語ると、蓮は嬉しそうに少し笑ってくれた。やつぱり、自分の働いているお店を褒められると嬉しいのかな？

僕はもつとお店の良さを話そうと思つて口にした。

「オーナーの崎さんも優しくて素敵な人だよねー」

それをいった瞬間、サーツと空気が一気に冷えた気がした。

あれ、僕なんか変なこと言つたっけ？

眼前にいる男は、先ほどの嬉しそうな顔など何もなかったかのように冷たい表情をしてい

た。

「れ…蓮？」

なんだか様子がおかしい。

呼びかけても何も反応がない。

ただ黙って、感情を失くした顔でこちらを静かに見ている。
どうしてそんな顔をしているのか？

そう問おうとして口を開こうとした瞬間、グイッと右腕を掴まれた。

「え…？」

何が起こったの、と思う前に唇を塞がれた。

「んんっ」

蓮の薄い唇が強引に斗真のそれを貪ってくる。

蓮は右手で斗真の顎を捕らえ、逃れられないようにガッチリ押さえ
ている。

斗真の右腕を掴んでいたもう片方の手は腰に回されて、気が付けば
抱きしめられていた。

突然のことに驚きが先行して思考が上手く回らない。
斗真は息苦しさを覚えて呻き声を零した。

「ふ……んう」

呼吸の仕方が分からない。

執拗に続く口づけが苦しくて、斗真は眉根を寄せた。

「はっ…あ」

「斗真…」

優しく自分の名を呼ぶ声。

こんなに強引に唇を奪っているのに。

けれど愛おしげに見つめられると、何も反論出来なくなった。

「好きだ…斗真」

もっと呼んで。その声で、自分の名を呼んで欲しい。

そう唐突に思った斗真は、驚きのあまり下に下がったままの腕をゆつくりと伸ばして彼の胸に縋った。

「れ…ん」

軽く唇を合わせた状態で、なんとか彼の名を口にする。薄く開いた唇からは吐息が零れ、すうっと空気を吸った。

「あ…」

胸の高鳴りが止まらない。熱っぽい眼差しで自分を見ている蓮からは、強烈な大人の色気が溢れていた。

（ドキドキしすぎて…もう意味わかんない…）

抱きしめられたままぼーっと放心状態に陥った。

ファーストキス。

夢の中でも蓮にキスされたけれど、こんなに激しくはなかった。やっぱり、夢は所詮夢でしかないことを身に沁みて感じる。

（キス…しちゃったんだ、蓮と）

蓮の逞しい胸に抱きしめられたまま、ようやくその事に気が付いた。かぁっと耳まで赤くなる。

（は、恥ずかしい…）

しかもこの体勢。

いくら夜の公園とはいえ、公共の場だ。いつ誰が通るかもわからない。

夜。

公園。

男2人。

抱き合っている…。

（変質者以外の何者でもないじゃんーっつ）

今更ながらに己の行為を思い知る。
いろんなことを考えすぎてついつい忘れてしまいが、自分達は男同

士なのだ。

（ってかそんな一番基本的なこと、すっかり忘れてた…）

なんて言うかも、日々焦って慌てて怒って笑って——それだけでいっぱいいいで、

周りの目を気にするってことはあんまりなかった気がする。

（あれ？）

斗真はふいに胸に何かが引つかかるのを感じた。

（それって…女の子と付き合ってるのとなんも変わりないんじゃない？）

先ほどされたキス以外は。

一緒にいることに安らぎを覚えるのなら、それは相手が誰であって
同じ——

そんな、当たり前なことに何を悩んでいたのだろうと逡巡する。

「斗真…こんな状況で考え事とは、余裕だな？」

「…っ！」

顔のすぐ横でずっと斗真の様子を見つめていた蓮は、苛立ったように耳元で囁いた。

その瞳の奥は鋭く熱を持っていることに斗真は気付かない。

「俺という時に他のことを考えるのは許さない」

「え」

そう宣言すると、戸惑う斗真などお構いなしにもう一度唇を奪う。
今度は荒々しく、激情をぶつけるような口付けだった。

「ふ…んっ…あ」

息苦しさに唇を薄く開けると、ぬるりとしたものが滑りこんでくる。
歯列をなぞり、上顎をくすぐって舌を絡めとってキツく吸われた。

「は…あ」

（ばか、お前のことばっか考えてるのに…っ）

抗議をしようにも頭はしっかりとホールドされ、身体は逃がさない
というかの様な力でき
つく抱きしめられている。

（もう無理、酸欠で死ぬ…）

グググッと胸を押して抵抗してみるが、まったく微動だにしない。
抗おうとすればするほど、より強く腕に力が入った。

「斗真…斗真…俺を好きになれ」

低くて甘いトーンの声が、切なげに告げる。
顔の至るところにキスの雨を降らし、逃げようとする力を奪ってい
く。

（な…んで、こいつは僕のこと好きなんだろう?）

惜しみなく囁かれる告白。

こんなに想われたことは未だかつてなかった。

今まで付き合ってきた女の子はみんな控えめで、斗真に告白を乞うものもいなかった。

だからいつも何も言わず、関係も進展しない。

相手がそれに耐え切れず振られることが多かった。斗真自身も特に好きだった訳でもなかった。斗真自身も特につたので、それでも良かった。

だけど今は。

いつもの傲慢な顔は何処にも見当たらず、ただただ斗真の心を欲している。

付き合い始めてから特にそれを望まれることはなかったけれど、本当はずっと願っていたことなのだと今更になって思い知った。

何がキツカケかはわからないけれど、想いが強くなりすぎてこんな行動を取ったのかと思うと嬉しくなった。

「蓮……僕——」

第五話（前書き）

少し暗いです。

苦手な方はご注意ください。

第五話

唇が熱い。

触れている箇所が熱を持って疼いた。

斗真の頬は朱に染まり、激しい熱情に浮かされるように瞳が潤んでいる。

薄く開かれた唇からは艶かしい吐息が零れ、蓮の欲情を煽っていた。

もっと。

もっと。

うつすらと目尻に涙を滲ませているその顔を、自分の手で咽むせび泣かせたい。

その綺麗な肢体を快感で埋め尽くし、自分以外見れなくなるように。

自分だけを見つめて、愛して欲しい。

その身体の奥深くまで。

その瞳に自分以外を映させない。

斗真の全てを自分だけのものにしたい。

蓮は己の中にあるドロドロとした黒い独占欲を感じていた。

何も考えられないように、自分の存在だけを刻み付けて。

その声も、その表情も、その身体も、その心さえも。

全てを奪いつくしてしまいたい。

（待つって…決めていたが、もう限界だ）

いつまでも変わらない距離感を苦しく感じていた。

友人だった頃よりも近づいているのは確かだった。

けれど、それ以上何も変化がなかったのもまた事実。

時折自分を意識してくれているのが分かっていたが、それだけだ。

（くっ…俺も貪欲になったものだ）

始めは知り合って、友人になればそれで良かった。

自分という存在を知って欲しかったただけだったのに。

いつの間にかそれ以上を望んでいる自分に呆れる。

口付けだけでは我慢出来ずにそれ以上のことをしてしまいそうな自分があった。

（まさか、知り合う前からお前のこと好きだった、なんて知ったらお前は気味悪がるだらうか？）

例えそうなったとしても、きっと離してやれない。

斗真がどんなに嫌がっても。

他の人間を好きになつたとしても。

この腕に閉じ込めて、誰の眼にも晒されないようにして。

逃がさない。

（お前は、俺だけのものだ——）

溢れそうな激情を押さえ込む為に、蓮は斗真を抱きしめる腕に力を込めた。

「蓮……僕——」

斗真が何かを告げようとしたその時、近くで人の気配がした。

「……でさあ、——ぎゃはは」

「——それで……」

男女の声が聞こえていた瞬間、斗真は焦って力いっぱい蓮を突き飛ばし、腕の中から逃げ出した。

「……っ」

「あ、ゴメン」

条件反射とはいえ、蓮を突き飛ばしてしまった。

その気まずさを補おうとして斗真は捲くし立てるようにしゃべった。

「えっ…えつと、だいぶ冷えてきちゃったね。やつぱ春とは言えまだ3月だもん。蓮はお

風呂入って来たんだろ？風邪引かないように早く帰ってね！じゃ、僕は帰るからっ」

「ちよっ、斗真!？」

言いたいことだけ一方的に告げると、斗真は脱兎のごとく逃げ出した。

帰り道、他人に見られてしまっていたかも知れないという恥ずかしさに、斗真は泣きそうになりながら走った。

その後ろ姿を、蓮がどんな気持ちで見送っていたかも知らずに。

「それで、逃げてきちゃったの？」

ばつかじゃない？と続ける悠は大変ご立腹であった。

昨夜、蓮を独り置いて帰ってしまったことに罪悪感を感じた斗真は、唯一事情を知っている

悠を捕まえて、奢るからと言いくるめて強引に構内の喫茶ルームへ連行した。

昨日、悠に言われたことを実行する前にあった出来事を包み隠さず話した。

夜の公園で逢瀬を交わしていたのはお互い様で、普通の友人ならなんら疚しいことなど何もない。

けれど、自分達は違うのだ。

そのことに気が付いたら、どうしようもなく恥ずかしくなって逃げてしまった。

相手を想う気持ちは相手は男であろうと女であろうと変わりはないはずなのに。

他人の目を意識した途端に逃げ出したい衝動に駆られて実行してしまった。

「やっぱ、蓮…怒ってるかな」

はあ、とため息と吐きながら悠に問う。今更ながらに自分のしたことは、絶対にしてはいけなかったことのように思える。

「さあ…斗真の考えそうなことなんて、分かってるから大丈夫なんじゃない」

投げやりな態度でお気に入りの紅茶を飲みながら悠が言う。

「むっ…そんな適当なっ。真面目に考えてよ」

「だったら言うけど、僕だったらそんな恋人嫌だね」
「ぐっ」

グサツと悠の言葉が胸に突き刺さる。

いつもの毒舌も、今は何故か酷く痛い。

自分から聞いたくせに、悠に相談しなければ良かったかも…と後悔する。

しゅん、と項垂れる斗真に、さすがに今回は言い過ぎかなと思った悠は、少しだけ優しくしてやることにした。

「それで？僕が昨日言ったことは実行してないわけだ」
「うん」

「じゃあ今から蓮を捕まえてきて、やってきて」
「はあ!？」

昨日の今日で気まずいのに、そんなこと出来る訳ないじゃん…って顔をしている斗真を無視して、悠は無情にも告げる。

「やらないんなら、蓮を失っても仕方ないよね？」
「え？」

蓮を、失う…？

言葉の真意を量りかねている斗真の様子に、悠は呆れたように続けた。

「いつくら飯とは言え、一度付き合った相手と友達に戻るわけないじゃん。もしかして、

別れてもそのまま仲良く出来るとでも思ってたの？」

「……」

図星を指されて、斗真は黙り込む。

何も言い返せない。

ダメなら元に戻れば良い、と軽く考えていたのは事実だったから。今更ながらに短慮な自分の行動を憾^{うら}んだ。

「はあ。そうでなきゃ、あっさり付き合い始めたりしないよね。

僕が甘かったよ。…そうだな、

例えば仮に蓮がそれでも良いと言えば、それもありかもね？ やっぱ無理だったから友達に戻ろう

って斗真が言えはいいだけの話なんだから。

だけど、付き合う前みたいなスキンシップは絶対してこないだろうね。特に、蓮みたいなタイプは」

「…なんでそんなこと言い切れるんだよ」

なんでもわかっていているような悠の口ぶりに腹が立ち、ついきつく言ってしまう。

ほとんど八つ当たりに近いものだったことに自覚しながらも、何も言えない自分が嫌だった。

「じゃあなんでそんな虫の良い話があるの？」

今度は悠が苛立ちを隠さずに言い放つ。
優しくしようと思ったが、今回は無理そうだった。

「自分からは何もしない、言わない。でも相手にはそれを望み、都合の良い時だけ仲良しこよしの
オトモダチ。そんな関係で満足出来る人間なんて、この世に存在する
わけないじゃない」

「僕はそんなこと言ってない！」
「言ってるんだよ！」

普段は冷静な悠が怒鳴った。

場所も考えずに感情をむき出しにしながら斗真に現実を突きつける。
午後の講義が始まっていたが、人氣が皆無というわけではなかった。

険かな雰囲気、周囲からは奇異の目が向けられる。

それでも悠は気にせず続ける。

「僕だって、最初はそれでもいいと思った。とりあえず付き合ってみて、恋人になってから
好きになることだって普通にあるよ。男女の関係だってほとんどが
そうなもの。でも斗真は違う」

相手を好きになろうとしてない。自分の気持ちを探ろうとしてない。
意識はしてみても、そうかもしれないと思ってても、何もしてない。
相手にばかり要求して、相手の気持ちを考えてない。

そんな恋愛ばかりして誰かを傷つけてばかりの自分と重なって、悠は斗真を傷つける言葉しか言えなかった。

そんな自分が嫌いだった。

（結局僕も、人のことは言えないよな…）

くつと諦めにも似た苦笑をする。

努力もしないで手に入れたものは儚く壊れやすい。物理的なものでも、賞賛でも、人間関係でも。

そんなものに、何の価値もない。

今まで苦勞もせずに入れたものは、すぐに色を失ってしまっていた。

何もしなければ、簡単に手の中をすり抜けて零れ落ちてしまう。

それが、どんな大切なものだったか後で気が付いたとしても、失ってしまったからでは遅いのだ。

唯一手にしたものの中で、初めて失いたくないと思ったもの。

（斗真…僕の本気って、結構貴重なんだよ？）

だからこそ。

悠は更に酷い言葉を投げつける。

「斗真がいつまでも蓮の気持ちを弄ぶんなら、代わりに僕が蓮を慰めるから」

「…は？」

何を言っているのかわからない、と斗真は呆然としたまま悠を見つめる。

「もったいぶって何もさせない斗真から蓮を救ってあげる。僕ほど綺麗な相手から好かれたら、いくら堅物の蓮でも少しは気が紛れるでしょう？」

魅惑的な微笑を浮かべた悠は、高らかに宣告した。

「蓮は、僕が貰ってあげるよ」

だからキミは何もなくていいよ、と優しく囁いた。

第五話（後書き）

次回より更新ペースが少し遅くなります。

感想・評価などありましたらどうぞお願いいたします。

第六話

何が悪かったのだろう。

何がいけなかったのだろう。

いくら考えても答えは出ない。

僕が蓮の気持ちに応えないから？

悠が蓮のことを好きだったことに気が付かなかったから？

いつまでも向き合おうとしなかった。

踏み出すのが怖くて、何もしなかった。

今があまりにも楽しくて、心地良くて。

蓮の優しさに甘えてた。

蓮の気持ちを考えたことなんてなかった。

蓮が、微笑ってくれるから。

それでいいのだと、漠然と思い込んでいた。

——満足していたのは、自分だけだったのに。

『都合の良い時だけ仲良しこよしのオトモダチ。
そんな関係で満足出来る人間なんて、この世に存在するわけないじゃない』

悠の言葉が突き刺さる。

何度も何度も繰り返し、嘲笑うように告げる。

都合の良い時だけ

——そうじゃない

仲良しこよしのオトモダチ

——そんなつもりじゃない

そんな関係で満足出来る人間なんて、この世に存在するわけないじゃない

——知らなかったんだ！

知らな…かったんだ、悠がそう思っていたなんて。

蓮が…自分のために合わせてくれていたことなんて。

僕が、蓮を苦しめていたことなんて。

そう考えてから、自分はどれほど愚かな人間なのだろうと思って苦笑する。

全部、他人のせいにして。
楽な道を選んで。

面倒なことはしない。

欲しいものだけ手に入れて、それは永遠にそこにあるものなのだと信じきっていた。

悠との友情も。

蓮との関係も。

「ふふ…ホントに、僕って何にもしてないや」

初めて声を掛けてきてくれたのも悠だった。

その後からもずっと、悠が誘ってくれた。

いつもからかうような口調で、重くならないように心配してくれた。
なあにつて悪戯っぽく微笑んで話を聞いてくれた。

蓮と一緒に、笑ってくれた。

蓮…

蓮のことを考え始めると、胸が苦しくなる。

大きな手のひらで、いつも子供扱いするように僕の頭をぐしゃぐし

や撫で回してた。

僕が笑うと、嬉しそうに一緒に笑ってくれた。

道で危なくなるとすぐに手を引いてくれて。

ちよつと怒った顔をして、心配そうに覗き込んできて。

僕が怒ると、仕方ないなって困ったように笑ってくれて。

僕は、2人に大事にされていたんだ。

ちゃんと態度で示してくれていたんだ。

それなのに。

僕は、大切な人を失おうとしている…。

どうすればいい？

どうすれば失わないで済む？

答えはまだ——見つからない。

蹲^{うすくま}ったままいつの間にか眠ってしまった。
傍らに転がっている目覚まし時計を見ると、午前10時を指していた。

（今日も遅刻だな…）

ぼんやりとそう思うけれど、急ごうという気にはまったくならなかった。

蓮と気まずくなってから1週間。

不思議と毎日見ていた蓮の夢を見なくなった。

夢の中まで見放されてしまったみたいで、なんだか哀しくなった。

悠と喧嘩してから、悠に言われたことが頭から離れなくて蓮とは会っていない。

というよりも、蓮と同じ講義は週3日、朝の1時限だけなのだから、起きられない僕が

蓮と会おうと思ったなら約束しなければ会えないのだ。

メールも、してない。

もちろん電話なんて以ての外だ。

自分から何もしなければ、こんなにも何もないものなのだろうか。
用もなく携帯の着信履歴をスクロールさせると、見事に蓮と悠の名前ばかりが並んでいる。

時折他のクラスメートやサークル仲間の名前はあるけれど、ほとん

どが2人の名前で埋め尽くされている。

けれどもそれは、1週間前の日付でぶつとりと途切れている。

本当に、してもらってばかりだったのだ。

（もういいや）

今日はもう学校へ行くのはやめよう、と決めてぼいっと携帯を放り投げると同時に着メロが鳴った。

「誰…？」

まさか、悠？

いや、それはない。

一度決めたら最後までやり通す男だ。

飄々としているくせに、意外と頑固なところがあるから。

じゃあ誰――

携帯を開くと、それは意外な人物からだった。

「響先輩…？」

何の用だろう、とメールを読む。

『ちやつちやちゃーす！

サボリ魔おこちゃま斗真くん、

至急登校せよ！

でないとその部長サマが小悪魔と一緒に迎えにいくよ？
中庭のサロンで待ってるによーん

b y 響

(…先輩ってこんなキャラだったっけ？)

朝からテンションの高いメールに呆れながら苦笑する。
けれど、気落ちしてばかりの今の自分にはちょうど良かった。

(ん？小悪魔と一緒にって…誰のことだろ)

まあ、後で聞けばいいか…という考えに落ち着いた斗真は、すばやく着替えて
登校することにしたのだった。

響先輩からのメールが来て30分後。

斗真は大学構内のカフェテリアに来ていた。

(響先輩の言ってた場所って、確かここだよな)

彼は大の音楽好き・イベント好きで、斗真が蓮たちと知り合うきっかけになった

ライ部の部長をしている。

おまけにコーヒー・紅茶をこよなく愛している…らしい。

『ロッカーはコーヒーの味を知らなきゃならんっっ』

が彼の持論らしい。

『ロッカーがコーヒーなんか飲むの?』

どうやって?とお決まりのボケを交わしたのは記憶に新しい。

(そついやあの時も、蓮に呆れられたなあ…)

そのロッカーじゃない、と苦笑しながらコーヒーについても詳しく教えてくれたっけ。

座って待っていると、いろんなことを思い出して切なくなる。今は隣に、彼はいないのだから。

(うつゝ…ダメだダメだ、今は悲観に浸っている場合じゃないっ)

さっさと響先輩の用件を終わらせて、これからどうするかをまた考えなければ。

潤む瞳をゴシゴシ拭って、前を見つめる。すると、蓮らしき人物がちらりと見えた。

「……っ!?!」

もつとよく見ようと眼を凝らすと、その先に見えたものは少し疲れた様子蓮と――

その腕に絡む――悠、の姿だった。

第七話

悠――

な…んで、悠と蓮が？

信じられない光景に、頭が真っ白になる。

蓮――

嘘だろ――？

訳の分からない嫌な衝動が湧き上がる。

（蓮――）

（悠――）

嫌だ。

そんなの見たくない……っ

黒い感情が心を蝕んでいく。
冷静に考えられなかった。

「おつ、斗真、偉いじゃん。ちゃんと来てたんだな」

響が斗真に声を掛けたが、もはや聞こえてなどいなかった。

「れ…ん、はるか…っ」

「っておい斗真!？」

響の声を振り切って、斗真は全速力で駆け抜けた。

「蓮！悠！」

斗真は2人に駆け寄ると、必死で2人の名前を呼んだ。
斗真に気が付いた蓮と悠は、驚いた表情をして声の方へと視線をやる。

腕を振り払おうとしている蓮を無視して、悠はすぐに優艶な笑みを浮かべた。

「ああ、おこちゃま斗真くん。僕たちに何か用？」

「悠。やめろ」

侮蔑を含んだ声色で斗真に話しかける悠を蓮が諫めた。

「僕は…」

何を言ったらいいのかわからない。

今朝まで考えていたことなんて全部頭から吹っ飛んでいる。

だけど。

「今更、蓮が惜しくなったの？返せって言われても困るけどね」

「悠」

例えもう遅かったとしても。

「ああ、蓮じゃなくて、この僕？今頃僕の魅力に気付くなんて、遅すぎじゃない？」

「悠！」

僕は。

「もう、あんたウルサイ！ちょっとは黙っ…うわっ」

「っ！？」

斗真はぎゅうつううつと力いっぱい2人に飛びついた。
突然の斗真の行動に、2人は驚愕する。

「やだ。」

ぽつり、と呟いた。

「…こんなのヤダ」

「ヤダって言われても…困るんだけど？」

悠は子供を宿めるような口調で言う。

我侭を言うんじゃないやありません、と叱るように。

「斗真……」

1週間振りに向けられる、漆黒の瞳。

たった1週間なのに、ものすごく久しぶりな感じがした。

懐かしくて——暖かい。

「僕は、蓮が好きだよ。でも、悠も大切なんだ。2人がいなきゃ嫌なんだよ！」

蓮が好きで——悠も大切に。どちらも失いたくない。

「悠が蓮を好きでも。蓮が悠と付き合っても」

それでも2人とも手にしていきたい。

「僕は、2人とも欲しい」

——それが、答えだった。

「蓮がいないとドキドキしないし、悠がいないと毎日楽しくないんだ」

だから。

「蓮も悠も、僕のそばに居て下さい」

もう一度、2人をぎゅっと抱きしめた。

第八話

「ぷくっ…」

何かを耐えるように、けれど思わず洩らしてしまったようなヘンな声がした。

「くっ…くくく」

「は…はるか？」

やっぱりダメなのだろうかと服を掴んだまま不安げに斗真を見上げた。

「あーっはっはっはっ！…ひいっひいっひいゝひっひっひっひっ、げほっこほっ、あ、

お腹イタイっ、ぷっ、くくくくっ、死ぬっ、あはっ、ぶはあっ、あーはっはっはっ！…

くっ苦し…っ、やっぱりダメっ」

「やっぱりダメなの！？」

ガーンと悲しげに悠を見るが、お腹を抱えながら苦しげに笑ったままだ。

同じように蓮を見上げると、蓮は蓮で見たこともないくらい機嫌が悪そうに悠を睨みつけている。

（えっ？えっ！？どうゆうこと？）

何で蓮が怒ってるの？

頭の中が疑問符だらけで混乱した。

「いやっ、だから違うってばっ、ふふふっ、とっ…まのせいじゃなくって…ぷくっ、いやある意味

斗真のせいだけど、でもそうじゃなくって…くくくっ、あっ、ヤバイ、また波が来たっ」

爆笑の嵐が来たのか、苦しそうに笑い続けている。

こんなに馬鹿笑いをしている悠は初めてだ。

「れ…ん」

説明を求めてもう一度、蓮を見上げる。

はっとした顔でこちらを見た蓮は、我慢していたものが一気に噴き出したように斗真を抱きしめた。

「蓮っ？」

「斗真…ごめんな」

もう離さない…そう思わせるほど力強く抱きしめて、腕の中に閉じ込めた。

斗真の首筋に顔を埋めて、小さくキスをすると優しく囁いた。

「斗真…好きだ。悠のバカが何言っただのか知らないけど、そんなの信じるな。

俺は、ずっとお前が好きだ。お前が嫌だと言っても、離してやれない」

大好きな、優しくて心地良い…甘い声が頭に響く。

暖かくて逞しい腕の中で、斗真はほっとするのを感じた。

（男が男の腕の中にいて安心するってどうなんだろ…）

自分で自分に突っ込みを入れながら、それでも受け入れてくれた嬉しさが勝った。

（うつん…きつと、蓮だから）

相手が蓮だから、傍にいて嬉しい。一緒にいて安心するんだ。

たった1週間、会わなかったただけなのに。

荒んでいた心が安らいでいくのを斗真は感じた。

「斗真…」

強烈な大人の色気を放って、熱い吐息が耳元を擦った。

「斗真——」

「ええいつ、いい加減にしろこのエロバカっ！！真っ昼間からいらんフェロモン撒き散らすなっ！！！」

唇が触れそうなくらい蓮の顔が近くなっていたが、笑い地獄から復活した悠がぐわしと

蓮の襟首を掴んで離れた。

ちっ、と忌々しげに悠にガンを飛ばすと、渋々斗真を腕の中から解放した。

もう終わり？という瞳で、名残惜しそうに蓮を見る。

「斗真。続きは帰ってからな」

だからちよつとだけ我慢してくれ、と言った蓮の方が悔しそうだったが、そんな様子は全部

無視して悠が言う。

「あーはいはい、そのバカカップル。分かったからとりあえず……
響ちゃんきょうちゃんのトコでも行こっか」

言われてから斗真は、響を放って来てしまったことを思い出した。

3人揃って久しぶりにカフェテリアへ行く。

日当たりの良いテラス席に、山のようにお菓子を広げてコーヒーを飲んでる響がいた。

「響ちゃんきょうちゃん、お待たせ」

「誰がキョーちゃんやねんっ、俺はヒビキだ！キョーキョーって俺
は不如帰ホトトギスちゃうわっ！！」

それはホーホーの間違いでしょ、と悠のからかう声にクワツと響が
噛み付いた。

いつみても、先輩と後輩、というよりも近所の悪ガキと子犬の図だ。響は明るく大雑把で行動的な性格をしている。好奇心のカタマリで、興味があればどこへでもふらつと行ってしまふのだ。

中学生をまんま大人にしたような男と言うのは響ぐらいなものだろう。

小柄な身体を精一杯大きく見せようとしている様子が可愛い。身長は斗真より少し足りないくらいで、ワインレッドに染めた髪を立てて誤魔化している。

キチンとセットされていると『俺は170cmだっ』らしい。降ろしている時の身長は聞いてはいけない、というのはライ部では暗黙の了解になっている。

ニツと笑うと、八重歯が見えて元来の人懐こさと童顔ゆえの魅力を惹き立て、自然と彼の周りが華やいでいく。
無料チケットが何故か手に入るのも、彼の人望故だろう。

「そっぴゃお前達、ちゃんと仲直りしたんだな」

悠と散々騒ぎまくって逃げたのか飽きたのか、響は蓮と斗真を見て二カッと話しかけた。

「俺と斗真は元から仲良いですよ。だから俺の斗真に手を出さないでくださいね、先輩」

「ちよっ、蓮、お前何言っただよっ」

「あーうん。分かったわ。他のもんにも釘刺しとく」

「ええ、お願いします」

「ええ〜！？先輩まで乗らないでくださいよっ」

「やだね〜、嫉妬深い男なんて。ねえ、斗真。こんな男なんてやめちゃって、僕にしておきなよ。」

「イイコトいっぱいしてあげるよ？」

「え？」

「つておい悠！ドサクサに紛れて俺の斗真に触んじゃねえ！」

「わっ」

「あーやだやだ、斗真はあんたなんかの所有物じゃないってのに。ねえ、斗真、僕の傍に居たいだろう？」

「え？あ、うん。悠といると楽しいよ」

「ほおら見る。好きだ好きだって言うだけならサルでも出来るね。ホントに好きなら、可愛い斗真を少しは楽しませてみたらどう？」

「はっ、斗真は優しいからお前に構ってやってるだけだ。なあ、斗真、俺のこと好きだろう？」

「えっとお……」

「ええーいつ！お前らウルサイっつー！！ちゃんと説明せんかつつ……！！」

斗真を挟んでギヤーギヤー騒ぐ3人（専ら悠と蓮の2人だが）に、いい加減ブチ切れた響が怒鳴った。

「俺の存在を無視してんじゃねえ！」

響は自分が中心でないと嫌だという俺様な性格なのであった。

話を要約すると、斗真が自分の気持ちときちんと向き合えるようにハッパを掛けて、中途半端な状態から抜け出させようと悠が行ったことだった。

「無理やりキスする蓮なんか嫌いだ。しばらく会いたくないって」と嘘の情報を蓮に流し、

斗真に連絡したり、我慢しきれずに会いに行ったりしないようずっと見張っていたとのこと。

先ほど斗真が見たやりとりは、不機嫌な蓮をからかう行為で、嫌がらせ以外の他意はないとのことだ。

斗真があまりにも学校に来なくなってしまったこと、蓮がいい加減、我慢の限界で機嫌が悪く

周りが迷惑しているので、事情を知らない響を使って斗真を呼び出し、偶然を装わせて自分は蓮を連れて行き

2人で話をさせる予定だった。

そして自分は斗真に嫌味を言う意地悪なお邪魔虫という存在で、2人からは退散するつもりだったのだと。

悠は始めから自分を悪者にして、コトが纏まったら関係を断ち切ろうと考えていたのだ。

「それなのに、斗真が僕が欲しいと言ってくれたから。ホントに驚いたよ」

悠が爆笑しまくっていた理由はそこなのだ。

全く考えもしなかったところから大穴が来て、思わず笑ってしまった。
思いもしない直球がいきなり飛んできて、自分が考えていたことなんてとても愚かでちっぽけなものに思えたから。

斗真は自分を嫌いになるところか必要だと言い、蓮のこともちんちんと考えていて、こちらが思っていた以上に子供ではなかったのだ。

でも凄く嬉しかった、と珍しく照れたように含羞^{はにか}む。

「じゃあ…悠は蓮のこと好きなんじゃ…ないの？」

「冗談！やめてよね、気持ち悪い。そんな勘違いするの、斗真くらいだよ。いくらそう思わせ

るようにしたとは言え、普段からあんなに仲悪いのに。ありえない。ううゝ、想像しただけで吐き気がしてきた」

おえゝつと品悪く嫌がる。

そんなに嫌がらなくても…とも思うが、よっぽど嫌そうなので本当のことなのだろうと思う。

「えっとじゃあ…蓮は悠と…付き合っていないの…？」

不安げに蓮を見つめると、こちらもかなり嫌そうな顔をしていた。

「斗真…いくら何でもそれはやめてくれ。こんなヤツ死んでもゴメンだ。こんなに斗真が好きだ

って言ってるのに。

それとも俺の気持ちを試してるのか？」

「ええっ……」

切なそうにこちらを見つめてくる蓮には申し訳ないのだが、その表情は捨てられた子犬のようで

愛しい。

きゅんっと胸が高鳴るのを感じた。

「それじゃ、僕…蓮の傍にいてもいい？」

「…ああ、もちろん。お前に傍に居て欲しい」

それを聞いた蓮は、本当に嬉しそうに笑った。

彼が、自分に笑いかけてくれる。

それだけで、心が温かくなれる。

ずっと、一緒にいたい――

自分の胸に芽生え始めた確かな恋に、ようやく気付いたのだった。

第九話

悠と響先輩はそのままカフェテリアでお茶をすることになり、斗真と蓮は2人でゆっくり話そう、と斗真の家に来ていた。

が。

「……」

「あ。」

鍵を開けてドアを引いた瞬間、しまった…と思うが遅かった。

1週間、何も手をつけられなかったせいで部屋の中はぐちゃぐちゃだったのだ。

「悪い。俺のせいだ」

「蓮は関係ないよ。僕は元々面倒がつてあんまり掃除しないし。いつもとそんなに変わらないって」

あははと笑って誤魔化して手早く片付ける。

幸いにも荒れているのはベッドのある部屋だけで、リビングとキッチン是比较的綺麗なままだ。

「お前、食べてないんじゃないか？少し痩せたぞ」

「え？そっかな」

ぺたぺたと顔を触るが、自分ではそんなに変わったところはない。本人が気付いていなかったのに、良く分かったなと思う。

「蓮は心配性だよ。大丈夫だって」

安心させようと笑いかけるが、蓮の顔は曇ったままだ。

「いや、だめだ。何か作るから、お前はそれまで掃除でもしてろ」
「え〜」

掃除やだ…とは言わせてもらえず、キッチンから追い出された。
仕方なく、寝室のほうへと向かって掃除をすることにした。

斗真の部屋は独り暮らしにしては広い1LDKだ。

心配性な両親が、ワンルームだと面倒がって何もなくなり、部屋が荒れても気にならなくなってしまふのを恐れてこの間取りにした。

広ければ、嫌でも掃除をしなければなくなるだろう、と。

実際、実家暮らしの頃は自分の部屋だけだったので掃除なんてまったくしなかった。

けれど、家を出てからは自然とやるようになり、一つ何か掃除をするならみんなやってしまえ、
と思えるようになった。

やはり両親は自分のことを良くわかっている、と感心したものだ。

（いや、普通に普段からやれよって話なんだけどね）

独り言を言いながら片付けを始める。

脱ぎ散らかした服やパジャマ代わりのジャージ、投げ出されたままの教科書にレポート用紙。

借りっぱなしの図書館の本や飲み物の残骸、その他ゴミゴミゴミ。

ほとんど寝室^{「コ」}にいたのに、見事なまでに汚れている。

斗真は汚れた服やタオルをまとめて洗濯機へ入れて回す。

ついでにバルコニーに続くガラス窓を開けて換気をし、布団を干した。

今はまだお昼を過ぎたくらいなので、1時間もすれば十分に干せるだろう。

ゴミを纏めて捨てて、掃除機でも掛けようかな、と思っているときツチンから蓮の呼ぶ声がした。

「斗真、お前普段からちゃんと食べてるのか？冷蔵庫、空っぽだったぞ。今から買い物に

行ってくるから、もうしばらく待ってる」

「はぁーい」

もう、みんなして過保護だなあと思うけれど、自分のことを心配してくれているだけなので甘んじて聞いておく。

蓮が出かけると、やっぱり掃除機をかけようと物置を開けた。

「…ま、——っ、——斗真」
「ん…？」

優しい声がする。

いつも見る、低くて甘い、心地の良い声。

「疲れたのか？だったらそのまま眠っててもいいよ」

「うん…」

ふふふつと気持ちよさに気分が良くなって笑う。

大きくてあったかい手で頭を撫でる仕種が気持ち良い。

もつと撫でて、と甘えるように頬ずりをした。

「うん？構って欲しいのか？」

「うん…だって、最近ずつと見てなかったんだもん。蓮と会えなかった時、夢の中の蓮にも会えなくて寂しかったから」

「……」

「だから、こうしてまた見れてるってことは、蓮は一緒にいてくれるってことだよな」

眠たい瞳をうつすらと開けて、蓮を見る。

少し困ったような、呆れたようなヘンな顔をして何も言わずに苦笑している。

あれ、なんで？

「毎朝キスして起こしていたのに様子が変わらなかったのは、ずっと夢だと思ってたから」

だったんだな。俺としたことが、斗真は恥ずかしがって知らないフリをしているだけなんだと

思ってたよ」

クスッと蓮が微笑を洩らす。

…んん？

なんか話がおかしいような気が…。

「だったら、このままお前を抱いてもお前は夢だと思って許してくれるかな」

ちゅくつと耳たぶにキスを落とし、頭を撫でていた手のひらを頬に添える。

もう片方の手も寄せて両手で僕の顔を挟むと、ゆっくりと唇にもキスをした。

「斗真…お前を抱いても、いい？」

「え…？抱くつて…」

繰り返し落とされるキスで頭がぼーつとする。

甘く囁いて誘惑してくる様は、いつもとは違うことに気が付いた。

「んう」

「抱きたい…」

舌を絡ませ、深く口付けてくる。

唇の端からは唾液が零れ、斗真はコクリと飲み込んだ。

零れ落ちたものは蓮がぺろりと舐めとり、そのまま首筋を甘く噛む。すると、ちゅくつとする痛みを感じた。

「…っ」

「痛かったか？」

キスで息があがり、まともに声を出せなかったのでふるふると首を振った。

「な…に…？」

何したの、と潤んでしまった目線で訴える。

「キスマーク。俺のものって証」

それを聞いた斗真はかあつと顔が赤くなるのを感じた。

（きっ…きすまーくってっつ。な、なにソレって感じだよっつ）

急に艶かしくなった言葉に、わたわたと慌てる。

ぴちゃり、と卑猥な音を立てて顎のラインを舐め、耳の後ろ、首筋、鎖骨、と徐々に下へと口付けていく。

（え、もしかしてコレ、夢じゃ…ない？）

時折チクリと痛む感覚が、夢ではないことを告げているようだった。征服の跡が熱を持っているような感覚がする。

「んっ」

これ以上キスしていないところなんてない、というくらい執拗にキスの痕跡を残されていく。

それでも熱っぽく見つめられると、蓮の愛情を感じて何も言えなく

なってしまう。

「れ…んっ」

はあっと吐息が零れる。

慣れないキスと情事で呼吸が乱れる。

涙目になって上目遣いで名前を呼ばれると、蓮は自分の欲情が掻き立てられるのを感じた。

「斗真…もう我慢できない」

「え…？」

大切に、愛おしさを込めて斗真を抱きしめ、とびきり甘い声で低く囁いた。

「お前が、欲しい——」

第九話（後書き）

1000PVありがとうございます！

読んでくださっている方がいらっしゃるというだけで活力になります。

蓮のエロさを上手く表現出来たらなあ（苦笑）

第十話（前書き）

性描写アリ！

苦手な方はご注意ください！

第十話

『お前が、欲しい——』

蓮が切なげに僕を見て、懇願するように言った。
でもその瞳には、強い意志が秘められていて、きつと嫌だと言っても止めてくれないような気がする。

もの凄く嫌がって抵抗すれば止めてくれるかもしれないけれど、そうしたらきつと蓮は自分から離れてしまうような気がして嫌だった。

「——いいよ」

そんなこと聞くなよ、と照れを隠すために俯いて答える。
どうすればいいのかわからなかったけど、蓮が自分を欲しがってくれてる。

それだけで、僕は嬉しかった。

蓮が喜んでくれるなら。

そう想いを込めて蓮の首に腕を回して抱きついた。

「斗真…本当にいいのか？今ならまだ止めてやれるが…途中でやダ
って言われても、お前がどんなに嫌がっても止められないぞ」

ぎゅっと僕を抱きしめて囁く。

ばか…我慢してるくせに。

無理してそんなこと言うなよな。

だったら最初からそんなコト言わないで。

僕だって、もっと蓮を感じたいと思ってるんだから…。

「いいよ——蓮の、ものにして」

蓮の首筋に顔を埋めて、そっと囁いた。

もの凄く恥ずかしかったけど、蓮がそれを望むなら。

「斗真…」

本当にいいんだな？と確かめるように見つめてくる。

もう、そんなに心配しなくても、ちゃんと現実だって分かっているの
に。

僕は想いが本当であることを証明するために、初めて自分からキス
をした。

「わっ」

すると突然蓮が僕を抱き上げた。

そのままベッドに運ぶと、ゆっくりと僕を下ろした。

ふかふかの羽毛からはお日様の匂いがする。

僕がうたた寝をしている間に、蓮が取り込んでおいてくれたんだろ
う。

ゆっくりとベッドに膝を乗せて上がってくる。

キシッとスプリングの音がして、これからすることを想像させた。

恥ずかしい…

怖いし、不安だけど…

でも、それ以上に期待の方が大きかった。

「斗真…」

僕の上に被さってくる蓮。

欲情に濡れた瞳が熱くて、視線だけで犯されているような気分になる。

「んっ」

唇を奪いながら、ゆっくりと服の下から手のひらが忍び込む。

ぴくっと身体を震わせると、宥めるように肌を撫でられた。

「あっ」

上から下へと下がってきた口付けが、胸の飾りに触れた。

「やつ」

そんなとこ触らないで欲しい。

思わず胸を反らせて身体を逃がそうとすると、蓮が身体を乗せて押さえてくる。

「んんっ」

ゾクツとする慣れない感触がする。

大きくて長い、綺麗な指先がソレを摘むと、クニクニと捏ね回す。

「それっ…やだ」

「クスツ…音を上げるにはまだ早すぎだ」

ぺろりと舌を舐めて厭らしく胸の突起を口に含む。

ビクンと身体が震えるのを止められない。

蓮は服が邪魔になったのか、一気に上に捲って脱がせた。

「冷たっ…」

「大丈夫、すぐ熱くなるから」

ひんやりするシートにそう洩らすと、蓮は挑発するように囁く。

蓮も片手で器用にＴシャツを脱ぎ捨てると、鍛えられた逞しい身体が目に入った。

うわ…すごい。

自分にはない男らしい肢体に目を奪われる。

綺麗に付いた筋肉が、蓮の動きに合わせて流麗に蠢いた。

生白くて貧弱な自分の身体と比べると、どうしてもコンプレックス

を感じる。

「んっんう」

「お前の身体…綺麗だよ」

首筋や胸だけでは飽き足らず、まったく筋肉の付いていない平らな腹や腰骨の辺りにも愛撫を落としていく。
な、なんかむずむずする…

「ああっ」

カリッと乳首を噛まれて電流が走ったような感覚がした。
なんで…！？

「ん？良くなってきたか？」

「わ…かない、僕、なんか…へんだよう」

ビクンと身体が勝手に反応する。

そのせいか、何処に触れられても感じてしまう。

「あっあっ…蓮っ」

「斗真…好きだよ」

いつの間にか下肢は肌蹴られ、蓮の思うがままになっていた。

僕のそれをやんわりと手の中に収めると、ゆっくりと抜き出した。

「あああっふ…っ」

蓮に触られている…っただけでも恥ずかしいのに、零れる声を抑えられない。

両手で口を塞いで声を押し殺そうとした。

「斗真…もつと、声聞かせろ」

「んう、やつ…だめ、れ…んっ」

「…だめだ」

押さえていた両手首を掴んで、片手で纏めて頭の上で拘束する。逃げようと身体を擦れば、お仕置きだとばかりに強く噛まれた。

「やあっ…んんん、ふうっ…あっあっ」

「いいよ…斗真…もつと………もつと啼け」

拘束していない空いた手で容赦なく僕を責立ててくる。

強弱を付けて擦り、敏感な先端の部分をグリグリと捏ね回す。

もう…だめ…イキそう…

「れ…ん、も…だめ…っ」

僕は快感で涙目になりながら懇願した。

「…そうだな。一回イツといたほうが、後がラクか」

蓮は独り言のように呟くと、愛撫をする手がいつそう強くなった。

「あっあっあああ」

瞬間、頭の中が真っ白になって達した。

蓮の手には僕の放ったものがべっとりとついている。

「はあっ…あ…蓮…ゴメ…!？」

手を汚してしまったことを謝ろうしたら、なんと蓮がそれを口に含んでいた。

美味しそうに啜る恍惚とした表情が、物凄く色っぽかった。

「蓮っ、そんなの…穢いよっ」

「穢くなんかないさ。お前は全部綺麗だよ。お前の身体も、心も…もちろん、コレもな」

ニヤリと笑いながら指先を舐める。

「それに…これからもっとお前を穢すんだから、むしろ謝るのは俺のほうかな」

そう宣言したあと、蓮は濡れた指先をさらにその奥へと這わせる。斗真の放ったものを後ろの蕾に塗りつけた。

「うん、やつ、そ…んなとこっ」

快感の余韻が残る身体は酷く敏感だった。

蕾を撫でる違和感と、拘束を解いたもう片方の手でもう一度愛撫を施されると、快感に誤魔化されて分からなくなってくる。

「いつ…たあ」

「ゴメン、もう少し我慢してくれ」

撫でていた指がグツと中へと入ってきた。

生理現象とは逆の違和感と圧迫感が、斗真を苦しめる。

「やだあ…蓮…ゆび、抜いて…っ」

耐え切れなくて泣き出した斗真は蓮にお願いをしたが、キスと愛撫で誤魔化されて聞いてはくれない。

ぐちゅ…ぐちゅ…と卑猥な水音が羞恥心を煽る。

気持ち悪いのと、気持ち良いのと恥ずかしいのとで、逃げ出したくなつた。

「あっ！」

斗真の中を探っていた指先が、ある一点を掠めた。

「ココか？」

「んんんっ、ああっ…や…だ、そこ、なに…っ？」

「見つけた」

蓮は執拗に感じるそこだけを押し上げる。

感じたことのない激しい快感に、斗真はおかしくなりそうだった。気が付くと指は2本に増やされて蕾は柔らかく解けてきていた。

「あああああっっ」

「斗真…斗真…好きだ」

惜しみなく降り続けるキスの雨。

抜き差しを繰り返される後ろと、前からの刺激が強すぎて、もう一度絶頂を迎えようとしていた。

「もっ…我慢の限界だ」

「え？…んっ」

キツク唇を奪われると、蓮は自分の欲望を取り出し腰に押し付けた。熱く脈打つそれは、もうすでに高まっており、限界が近いことを斗真に告げていた。

「…っ」

「斗真… ゆっくり息を吐いて、力を抜くんだ」

これから、自分は蓮に抱かれるのだ――

それが分かって、斗真はゆっくりと頷いた。

斗真の表情を確認した蓮は、ずるりと指先を抜き取り代わりにもつと太くて硬いものを押し入れた。

「あああああああ――っっ」

「…っく」

指などとは比べ物にならないほどの圧迫感が斗真を襲う。

内臓を押し上げる重圧と、本来受け入れるべき器官ではないところが悲鳴を上げる。

裂けてしまいそうなほど押し切られたところに痛みが走った。

「いっつつ… はあっ、はっ…」

小さく呼吸を繰り返し、激痛を逃がそうと思うが上手くいかない。先ほどまで誤魔化されていた快感は何処かへ消え失せ、痛みのあまり斗真は気を失ってしまいそうだった。

「斗真… 斗真… 俺を見る」

「ふっ…れ…ん…う」

斗真の顔を優しく包み込み、宥めるようにキスをしてこちらに意識を向かせた。

けれどゆつくりと、確実に少しずつ押し進める。

一番太い先端の部分が入りきると、少しだけラクになった。

「斗真…斗真…愛してる。お前は全部、俺のものだ」

繰り返し何度も愛を囁かれ、身体の強張りが解れていく。

自分の中に感じる彼の存在が、愛しくてたまらなくなった。

「れ…ん、僕…ちゃんと、出来てる？」

「ああ。お前の中…最高だよ」

蓮はぎゅっと抱きしめて零れ落ちた涙を吸い取った。

すぐにでも動き出したい衝動をなんとか堪え、馴染むのをじっと待った。

その間は少しでも斗真が気持ちよくなれるように前をいじる。

軽い口付けをして痛みで萎えてしまったそれをゆるゆると扱き、ぴちぴちやと音を立てて耳の後ろをキツク吸った。

「んっ…れ…んの、熱…い」

身体を引き裂くそれは中で徐々に膨張し、熱を伝えてくる。

ああ、僕…蓮と繋がってるんだ…

熱く脈打つそれは、蓮と自分が一つになった証なのだと思うと嬉し

くなつた。

「蓮…動いて、いいよ」

「だが」

「大丈夫…蓮が…好き、だか…あああつつ」

最後まで言う前に残りの部分を一気に穿った。

ギリギリのところで理性を保っていた蓮だったが、今の一言で溢れ出した。

「あつあつ蓮つつ」

「つく…好きだ、斗真。誰にもお前を渡さない」

欲望に濡れた瞳で激しく抱かれた。

感じる部分を余すことなく犯され、強弱を付けて抽挿を繰り返す。腰を痛いくらいに掴まれて、全身で蓮を感じた。

「やあああああつつ」

「お前は俺のものだ。俺だけを見る。俺だけを感じる。誰にもお前を触れさせるな」

先端をギリギリまで引き抜かれ、ふっと思った瞬間に一気に押し込まれる。

「ああああつ」

「一緒にイこう」

頭に白い靄が掛かって2度目の絶頂を迎えた。

それと同時に中に熱いものが注ぎ込まれるのを感じ、蓮もまた達したことを身体で受け止めた。

「蓮…好き、だよ——」

意識を失う瞬間、斗真はそれだけは伝えようと力を振り絞って口にした。

一つになれた幸福感と、激しい行為による疲労で斗真はコトリと意識を手放した。

「——愛してる、斗真」

やっと想い人を手に入れた蓮は、計り知れない幸せを感じていた。

「おやすみ」

腕の中で眠る愛しい恋人へ、優しく口付けた。

第十一話

ずくんとした鈍い痛みを感じて目が覚めた。

「…いたい」

意識した途端にズキズキと痛みが主張してきて、斗真は泣きそうになった。

目の前には遅しく鍛えられた蓮の胸。

優しく包むように抱きしめられていた。

「あつ…僕…蓮と…」

しちゃったんだ…

そのことに気が付くと急に訳の分からない恥ずかしさを感じて腕の中から抜け出そうとするけれど、

抱きしめる腕に力が入って阻まれてしまった。

「うう…っつ」

お願いだから出して…と依然逃亡を図ろうとするけれど、蓮の腕はぴくりともしない。

それどころかもっとぎゅっと抱きしめられて、蓮の胸にぴったりとくっつく体勢になってしまった。

「蓮のばか…」

「それは聞き捨てならないな」

上から声が降ってきてびっくりした。

なにっと顔を上げると、くくくつと蓮が笑っている。

こいつ、最初から起きてたなっ？

むうーと睨むと、啄ばむようにキスをしてくる。

キスに気をとられて腰を撫でる手に気付くのが遅れた。

「やつ…」

びくんと肩を竦めて腰を引く。

すると、下腹に重量感のあるものを感じた。

もう無理だつて…

訴えるように見つめる。

「ココ、痛くはないか？」

「つくく」

やわやわとお尻を撫でる仕種が厭らしい。

なんか絶対わざとやっているようにしか思えない。

「いた…いから、だめっ」

眠っている間に着せたのだろうパジャマのボタンを外そうとする手を必死で止める。

「も…無理だつてば」

「うん？大丈夫だつて。今度は優しくする」

さつきはちよつと早過ぎたからな、と艶かしく笑う。

え…

そういう問題ではないんですけど…と続く声は、唇で塞がれた。

「とーまっ」

「いっつつ」

久しぶりに大学へ行くと、後ろから悠がバシンと背中を叩いた。その振動が腰に響いて、思わず斗真は顔を顰めた。

「あらら。ゴメン、斗真。もしかして、アレ？」

悠が申し訳なさそうに腰を擦ってくる。

分かってるなら…触らないで欲しい。

「もう…だいぶいいから、気にしないで」

無理やり笑顔を作ってなんとか答える。

本当は、今日も危うく休まされるところだったのだが、これ以上欠席すると単位がヤバイ。

引き止めようとする蓮を押しつけて、ようやくココまで来たのに保

健室に行ってしまったら

ここまで来た努力が水の泡になってしまう。

それに。

「あー…北条のヤツ、手加減しなかったのかな」

「…聞かないで」

疲労感たつぷりにげんなりと斗真が答えた。

そんな話をナチュラルにして来ないで欲しい。

何故か普通に受け止められている現状もそうだが、まるで見てきたかのような悠の様子に困惑した。

（もしかして、蓮から聞いているんだろうか…？）

うう、本気で勘弁して…と恥ずかしそうに俯いた。

これは悠の予想だが、おそらく何度もおかわりされてしまったのだろう。

でなければ、あの日からまた1週間も休んだりするような状態にはならない。

「まあ、その辺は僕に任せておいて。斗真がゆっくり眠れるように手を打っておくからさ」

「…？」

「とりあえず、授業行こっか」

「う、うん…」

っていうかなんで僕、悠にソツチの心配までされてるんだろう…
なんだか生優しげな視線を微妙に受け止めながら、斗真は久しぶり

の講義を受けることにした。

「おつ、斗真と悠やないか。俺もまぜてーなっ」

「響^{きょう}ちゃん」

「響先輩」

全然分らないまま終わってしまった授業のあと、学食で悠と昼食を摂っていると響先輩が乱入してきた。

斗真は席を一つ空けて響に譲る。

すると響はハンバーグ定食をテーブルにおいて、パクパクと豪快に食べ始めた。

「そついやお前達、明日ヒマか？」

「なんでまた急に…まあ、たぶん平気ですけど」

「僕と悠は明日は朝の講義だけだから…」

響の様子にあっけに取られてる斗真は適当に返事をした。

というか、食べるの早っ。

斗真の食器にはほとんど残ったままで、悠の方もまだ半分ほど残っているのに対して、

響の食器の中はもうほとんど空だ。

なんでこの人はいつも欠食児童みたいなんだ…

この間も山のように積まれたお菓子を一人でぺろりと食べていた。

カフェテリアで響と2人残っていた時、一つ摘もうとしたらもの凄
い勢いで怒られたし。

なのに全然成長しないよね…

という悠の視線を丸無視して、響は話しを続ける。

「あんな、急な話で悪いんやけど、無料チケット手に入ったから行
かへんか？」

「それはまた急だね。自分で行かないなんて珍しい。何か曰く付き
なの？」

「いや…それが、な。いつもタダチケを回してくれるヤツがおんね
んけど、明日はそいつに会いに行かんとあかんねん」

「それは行かないとヤバイね。しっかり媚売ってバンバンもらって
来てね」

「はあ、憂鬱やわ…。ってかお前面白がつてんやる！」

「もっちろん。どんなコトされちゃったのか、こっそり教えてね」

ふふふつと楽しそうに笑う悠に響が噛み付く。

正確には悠の食べていたオムライスを奪って食べてしまっていた。
いつもの光景に、斗真は懐かしさを感じて心が温かくなった。

（良かった…）

あんなコトがあつた後だったから、嫌われてしまうのではと思って
いたけれどいつもと変わらない様子にほっと息を吐く。

すると、オムライスを食べ終えた響がニカツと笑っていた。

「斗真、お前具合大丈夫なんか？ 顔色良くねえみたいやけど」

「えっ？」

「明日のライ部のミーティングには顔出さないで、ゆっくり休め。
それで夜は悠と楽しんで来^きいや」

部長命令や、とぼんぽん斗真の頭を叩くと、怒った悠から脱兎の如く逃亡を図っていた。

「チケットは部屋に置いてくからな」

ブンブンと手を振って走って行ってしまった。

相変わらず台風みたいな人だ、と思いながら斗真は自分の食器を悠に勧めていた。

「そういえば先輩、なんのチケットか言ってなかったね」

「んー、あつさり僕たちに譲るってことは、オケとかそっち系じゃないかな。」

アップテンポなヤツだったら何がなんでも自分で行きたがるだろうし。今月は響ちゃんと隼人先輩はやとの担当だったから余計にね」

「そっかあ。オーケストラだったらいいなあ。僕、コンサートとか久しぶりだし」

嬉しそうに斗真が笑う。

もともとライ部に入部したのも、音楽の話が気軽に出来るというのが良かったからだ。

悠もどちらかと言うとロックやJPOPなどの歌謡曲よりは、ヴァイオリンやピアノの音色を好んで聞いている。

響は何でもアリの人だが、ロックのライブだけは臨時で手に入ると自分で行ってしまふのだ。

蓮は…下心のみで入部しているので、パス。

「あれ、でも隼人先輩に聞かなくて良かったのかな」

律儀にも担当者に伺いを立てようとする斗真。
部長直々に貰ったものだから気にしなくても誰も咎めたりしないの
に。

（今時いないよね、こういう子）

悠はふふつと笑って頭を撫でた。

「大丈夫。隼人先輩って、響ちゃんと一緒じゃないと絶対に行かない人なんだ」

「そうなの？」

「そ。隼人先輩って響ちゃんのコト好きじゃない？」

「えっ……」

嘘だろ……と思考が止まった。

どうみても仲の良い相棒同士にしか見えないのに。

「そーなの。でもあの2人、付き合ってないって話だよ。隼人先輩
がずつと片思いしてるらしい。」

っていうか、この話ってライ部のメンバーならみんな知ってるよ？」

「全然知らなかった……」

「まあ、斗真は北条のことで頭がいっぱいだもんね」

「悠っ」

むうーと怒る仕種はいつ見ても可愛い。

はいはい、からかってごめんね、ともう一度頭を撫でた。

「それじゃ、何のチケットか確かめに部室に行こっか」

悠は斗真のご機嫌を取ろうと足を進めたのだった。

第十二話

「失礼しまーすっ」

2人で部屋に入ると、隼人がソファでまったりと本を読んでいた。長い足を邪魔そうにソファの袖に投げ出していて、ゴロンと寛いでいるだけなのに様になっている。

「ん…？来たな、子猫コンビ」

「なんすか、それ。センスない呼び方止めてくれませんか？」

「そんなお前たちにはコレを贈呈してやろう」

悠の抗議など全く持つてスルーして、隼人はスッと起き上がるとサイドテーブルに置いてあった袋からあるモノを取り出してスポツと悠の頭に乗せた。

「はっ…はるかっ」

ぶるぶると震えながら斗真が叫ぶ。

悠は乗せられたモノをブンツと取って、ソレを見た。

「……ぶっ殺す」

「もう取っちまうのか？似合ってるのに」

斗真にもやるよ、と乗せようとしてくるが、必死で逃げる。

あんなモノ、とてもじゃないが自分から付けようなんて思えない。

問答無用で乗せられてしまった悠は、拳をブルブルと震わせて怒り心頭中だった。

「じゃあ、お前は持って帰ってくれよ？」

「いつ、嫌ですよっ」

「だめー。蓮には言っておくからな」

「やつ…それだけはダメですよーっ」

止めてくださいーと抵抗するも力技で負けて、バックに入れられてしまった。

あとでこっそり捨てよう、と思うも、あとで蓮に確認するからなとダメ押しをされてしまった。

佐久間隼人という男は、あの悠が絶対に勝てないほど二枚も三枚も上手の喰えない先輩なのだ。

蓮と同じ高校の先輩で、185cmとかかなりの長身だ。蓮が183cmなので、2人が並ぶとかなりの威圧感がある。

ちなみに悠は175cm、斗真は170cm、響も（自称）170cmだ。

なのでこの3人は隼人の格好の餌食になっているのだ。

飄々とした掴めないけれど憎めない性格をしていて、兄貴っぽい氣質があるのだと思う。

体育会系の知り合いは皆そう呼んでいるし、ライ部内でも隼人のことを「兄貴」と呼ぶものもいるくらいだ。

男気があって、爽やかな二枚目な男なので、男女共にとてもよくモテているらしい。

ただ、悠以上に「変わった」悪戯を考えるので、その餌食にされている斗真たちは大変困っていた。

彼の唯一の欠点とも言える。

「この僕が…ネコだと？」

悠は我慢しきれず持っていたソレをバキツと折ってそのままゴミ箱へブン投げた。

「あゝあ、せっかくお前のために用意してきたのに」

「入りません！いい加減、僕たちで遊ぶのは止めてください」

視線だけで射殺さんばかりに睨みつけている。

けれどそんなものはまったく痛くも痒くもないとばかりに楽しそうにニヤニヤと笑っていた。

「ほらよ。コレを取りに来たんだろう？」

ポケットからチケットを出すと、斗真へと差し出した。

「ありがとうございます。でも先輩、僕たちが貰って良かったんですか？」

「ああ。俺はこーゆーの、興味ねえんだ。一緒に行く相手もいねえしな」

だから気にすんな、とガシガシ頭を撫でられた。

う…ちよつと痛い。

というか僕、なんで皆に頭撫でられてるんだろ…

そんなことを考えていると、ふいに手が止まった。

どうしたんだろう？と隼人の顔を見上げると、笑うのに失敗したというか、どうしようもない切ない眼差しをしていた。

「せんぱい…？」

「うん？痛かったか？」

「いえ、大丈夫ですけど…」

ごめんな、と言って今度は優しく毛並みを整えるように撫でてくる。
なんか、この言い方って…？

「そっいえば斗真、お前蓮と付き合ってるんだってな」

「はあっ…！？」

なんでそんなコト知ってるの！？

驚きのあまり口をぱくぱくしていると、面白そうに隼人が笑う。

「いや、昨日、あいつに会ったんだけどよ、なんかこー…スッキリしました！って顔してやがったから。それで、その顔がム力ついたから白状させた」

ム力ついたからって…そんなことしちゃうんですか、先輩…

ガツクリと項垂れる斗真を尻目に豪快に笑う。

蓮が吐かせられるってことは、相当いろんなことして脅したのだからということとは容易に想像出来る。

知られてしまったことに憤りを感じる前に、蓮がちょっと可哀想になった。

「まあ、あいつの長年の願いが叶って良かったなってコトで」

「…？」

隼人の言っている意味がわからなくて、不思議そうに見るけれど結局教えてはくれなかった。

「蓮を、よろしくな」

とそれだけ言うと、隼人は部屋を出て行ってしまった。
未だに怒り狂っている悠を宥めて、斗真たちも次の講義へと向かった。

「と、言う訳なんだけど…隼人先輩に何か弱みでも握られてるの？」
「あー…まあ、そんなところだ」

斗真の部屋に遊びにきた蓮を問い詰めると、珍しく言葉を濁した。
そんな蓮の様子に斗真は不思議に思った。

「隼人さんにバレちゃったの、黙ってて悪かった」

ごめん、と呟いてぎゅうつと抱きしめてくる。

もうこういう状態になってしまうと、斗真は何も言えなくなる。

大きな子犬みたいで（ちよっとおかしいけど、そんな感じ…）可愛く思えてしまうのだ。

もう、しょうがないな、と斗真も抱きしめ返した。

蓮の身体から微かに香るコロンの匂いが、たまらなく斗真を安心させた。

ふと、隼人に対して不思議に感じたことを蓮なら知っているかもと尋ねてみた。

「ああ…隼人さん、お前にあの人を重ねて見てたんだろ」

「あの…人…？」

「隼人さんの想い人。悠から聞いてないのか？」

「えつと…響先輩って言うってたと思うけど」

「あの人、大学に入ってすぐに響先輩に惚れたんだよ」

「えつ、そんなに前から？」

隼人と響は3年生。この春で4年になるから、丸3年間も片思いをしているということになる。

斗真たち2年生が見ているだけでも、この2人が特別進展している様子はまったくくない。

むしろ、斗真は相棒という親友にも似た関係なのだと信じて疑わなかったくらいだ。

けれどそれは、他人にはあまり興味がないという斗真のズボラな性格故というものもあるが。

「でも僕、響先輩と全然似てないよ？」

むしろ似ているところを探すほうが大変なんじゃ？

きょんととして蓮を見つめると、困ったようにクスリと笑われた。むう、何でだ。

「そういう自覚のないところ。まあ、それは俺だけが分かっていればいいことだ」

ちゅつと掠め取るようなキスをして、ソファへ押し倒してきた。ちよつと…ここリビングなんですからどっ…

いやいや、そういう問題ではない。

危うく流されそうになるところを寸でのところで抵抗してみる。

「蓮っ…僕明日、悠と出かけるからっ、だめだつてばっ」

「無理。あんな可愛い顔して誘ってきたのはお前だろう？」

「あっ…そ、んなの、知らないっ」

「好きだよ、斗真」
「んんう」

貪るような口付けをされて、結局蓮のなすがままになってしまった。

「れ…んっ、コレ、やだぁ…」
「可愛いよ、斗真。似合ってる。今度首に鈴でも付けようか？」
「ふっ…やぁ」
「もつと…俺のために啼け」

蓮はいつの間にか持つて来たのか、隼人に無理やり持たされてしまったモノを斗真の頭の上に乗せた。

そう…それはなんとネコミミの力チューシャだったのだ。

ご丁寧にも付属の尻尾付き。

こんなの、恥ずかしくて付けていられないよっ。
いやだと足搔いてみても、力負けしてしまった。

「ばかつ…蓮なんか嫌いだ…ぁ」
「そんなのは許さない」

絶対にだめだ…と吐息も何もかも奪うようにキスをして、愛撫する手が激しさを増す。

律動を送り込む腰は、斗真が泣き出してしまっても繰り返し貪り尽くしてくる。

「もっ…無理い…れ…んっ」
「好きだ…斗真」

「あああああっつ」

「——愛してる」

耳元で甘く囁かれると、斗真はついに理性を手放した。

第十三話

「悠っつ、ごめん、待った？」

待ち合わせ場所のコンサート会場前に走っていくと、悠が不機嫌そうに立っていた。

淡い色のコットンシャツに黒いカットパンツ。

それに革靴を合わせ、ハニーブロンドの髪を軽く流している。
長い手足を強調させるスタイルはいつみてもお洒落だ。

「遅いつ」

むすうとした顔で斗真のほつぺたをみょーんとひっぱる。

「いひゃいよあゝ」

「斗真のせいくだらない連中に声掛けられまくったんだからね」

「ごめんっ…てばっ」

摘んだ指を離すと、ううゝと斗真が頬を擦っていた。

斗真は黒いハイネックのTシャツの上に薄手のカットシャツを重ねて着て、オールドジーンズを穿いている。

悠はシャツの襟首を引っ張って中を覗き見た。

「なーるほどねえ。毎晩愛されちゃってるわけだ」

「ぎゃーっつっ！！何すんだよっ」

「あらら。こんなトコにも付いてる」

面白そうに首筋や鎖骨の辺りをぺたぺたと触ってくる。

「はーるかあああつ」

ぜいはあゝと何とか魔手から逃れようとする。

なんだか最近、スキンシップが激しいような気がするんですけどお
おおっつ

「さて、早く行くよ。遅れちゃうじゃない」

「にゃ…にゃにおう」

ひとしきりからかうのに満足したのか、あっさりと手を離れた。
まったく、悠のヤツっつ。

斗真は乱された服を整えると、急いで先に行く悠を追いかけた。

響から譲ってもらったのはクラシックコンサートのチケットだった。
会場に入ると、黒いスーツ姿や華やかに着飾ったドレスを着ている
人がたくさんいた。

「やつぱ…今日のコンサートって結構敷居高かったの！？僕、こ
なカジュアルで来ちゃったんだけど…」

「大丈夫じゃない？僕だって、こんなだし」

「悠はいいよ…顔でだいぶカバーしてるもん」

はあ…と居心地の悪さから憂鬱になってしまった。

クラシックは元々王侯貴族の娯楽であったこともあり、フォーマル
な格好で聴くスタイルが一般的であった。

最近ではカジュアル志向になりつつあり、よほど格式の高いもので
なければ今の斗真の格好でも十分である。

が、今日は平日の夜というのもあり、会社帰りのひとが多いせいか
正装している人がほとんどだ。

「それにしても、ちょっとフォーマルの人多過ぎじゃない？誰かゲストが来るのかな」

「さあ？」

「今夜はウィーンフィルの元コンマスの方が特別出演するんですよ」
「え？」

突然後ろから答えが返って来たので驚いて振り向くと、格好良くスーツを着こなした崎が立っていた。

「オーナー！？何でココにつ」

「げ。」

「こんにちは。今日の演奏者に知り合いがいるもので、招待に与^{あずか}つたのですよ」

につこりと優しく微笑むが、その視線の先にいる悠はもの凄く嫌そうな顔をした。

そんなにあからさまにしくなくても…と窺めるが、まったくもって聞いてなどくれない。

「斗真さんと悠くんはお2人で来られたのですか？」

「はい。大学の先輩から譲ってもらったんです。そんなに凄い方がゲストで来るって知ってたら、僕ももう少しキチンとした格好をしてきたんですけど…」

「大丈夫ですよ、とても可愛らしくて。それに、音楽を楽しむことが大切なのでから、格好などは本来は何だって構わないんですよ」

崎はそういつて斗真の髪を撫でようとしたが、悠が急に斗真の腕を引っ張って彼から離れさせた。

「斗真に気安く触るなっ」

そんな悠の態度に気を悪くすることなく、崎は穏やかに笑ったままだ。

「すみません。どうやら悠くんのご機嫌を損ねてしまったようだ。私はこれで失礼いたしますね」

「あのっ、こちらこそすみません。いつもはこんなヤツじゃないんですけど…」

「僕の名前を勝手に呼ぶなっ」

何とか取り繕うとする斗真の気持ちなどお構いなしに悠が怒る。本当に、どうしちゃったんだよっ。

わたわたと焦る斗真に、気にしていませんよ、と崎は優しく言う。

「それでは良いひと時を」

「ありがとうございます。オーナーも」

それだけ言うと、崎は会場へと入っていった。その後ろ姿を囁付かんばかりに睨み付けている。

「悠あ…どうしちゃったの？」

「僕、あいつ嫌い」

「嫌いって…それでもいくら何でも失礼でしょっ。いつもは嫌いでも取り繕うのに」

「無理。笑顔が胡散臭い。生理的にイヤ。死ぬ。むしろ消えて欲しい」

そんな全否定しないでよ…と言ったところで聞くような悠ではない。仕方がないので、今度から悠とは崎のいるレストランには行かない

ようにしようと心に決めたのだった。

コンサートが終わると、外はもう真っ暗だった。

斗真と悠は地下鉄を使って帰ろうと人波に乗る。

街はイルミネーションで着飾られ、咲き始めた桜や梅がとても綺麗だ。

「あれ…？」

夜桜を楽しんでいると、一際人が集まっている場所があった。

よくよく見ると、どうやら桜の木の街道に沿って夜店が並んでいるようだ。

「ねえねえ悠っ、ちょっと寄って行こうよ。僕、お好み焼きが食べたいっ」

「ええ…人混み嫌いなんだけど」

「ちょっとくらい良いじゃんっ。桜を見ながらビール飲むのも美味しいよ？」

僕は飲まないけど、と続けて悠を引っ張る。

斗真は食べ物に関しては絶対に挺子でも動かないので、仕方なく付き合っことにした。

「あっ、ソースせんべいもあるっ。あと焼き鳥も食べたいっ」

「あーはいはい、そんなに食べてお腹壊しても知らないよ」

「うつさいつ。子供じゃないからだいじょーぶだもん」

…どこが？と突っ込みそうになったが、言っても仕方がないので視線だけ投げた。

無邪気に走り出そうとする斗真を何とか捕まえる。

（僕は斗真の保護者じゃないんだけどなー…）

まあいつものことなので諦めることにした。

屋台は結構長く続いており、半ばお祭りのようになってい

この時期は景観が良いのでデートスポットとして雑誌にも特集されているくらいだ。

（まあたまには良いか）

そう思って紙コップのビールを飲みながら人の流れに乗って景色を楽しむ。

途中、いちゃついているカップルが邪魔で腹が立つが、今日くらいは許してやろうと意味不明なことを言ってみる。

すると、頭一つ分飛びぬけているカップルが目についた。

女性は平均より背が高く、派手な顔立ちをしている。

短い紺のスカートを穿いて惜しげもなく生足を晒していた。

長い黒髪を後ろに流して、傍らの男に寄り添い、胸元を強調する力ッターシャツを着ていてあからさまに男の腕に押し付けていた。

（あゝあゝあーいうオンナって好きじゃないな）

自分がそんなことされたら喜ぶどころか怒りまくって帰るだろう。男であれ女であれ、性を武器にする人間は基本的に嫌いなのだ。

逆に男であろうと女であろうとその人の人間性を見るので、外見や性癖・職業や趣味はどうだって構わないと思っている。

自分自身は至ってノーマルなので、出来れば清楚な女性タイプだ。そんなことはどうでもよくて、自分から見れば可哀想、一般的にはラッキーな男の方とは目をやると…

（ばっ…ちよっ…ありえないだろ）

悠は斗真の目に触れないよう、急いで斗真を探す。少し前方に美味しそうに綿菓子を頬張っていた。

（よし、まだ気付いてないな）

それだけ確認すると、悠は急いで斗真を捕まえた。

「斗真、もう帰るよ！帰りの電車なくなっちゃうでしょ」

「えゝ、まだじゃがバタ食べてないよ？」

「だめっ。今度、僕が作ってあげるから」

「やだよ。悠、料理出来ないじゃん」

ちよっと買ってくるねゝと呑気に進んでいく。

あ、バカっ！そっちはダメなのに！！

次の瞬間、斗真は呆然とした表情で固まっていた。

「——蓮？」

なんで…と続く声は、悠には届かなかった。

第十三話（後書き）

読んでくださっている方、いつも本当にありがとうございます！！
読者様が一人でもいらつしゃるということが本当に嬉しく思います。
申し訳なくも、都合により毎日更新が難しくなります。
なるべく早く更新出来る様頑張りますので、どうか見捨てないで待
っていてくださるととても嬉しいです。

第十四話

腕を絡ませ、寄り添いあう姿はまるで恋人同士のように親密に見えた。

美男美女が大きな桜の木の下で映画のワンシーンのように存在していて、そこだけが違う世界のように思えた。

どうしてココにいるのかとか、その人は誰だとか、そんなことよりも、ただ…

なぜ——？

それだけが、頭の中を駆け巡っていた。

それ以外のことはどうでもいい。

誰か答えを僕に教えて欲しい。

僕は怒ればいいのか、悲しめばいいのかすらわからなかった。

ただただ疑問だけがグルグルと無限ループを繰り返す。

呆然と立ち尽くすことしか出来ない僕の腕を悠が引き寄せた。

「斗真…どうする。確かめに行く？ただの知り合いかも知れないし。それともまだ向こうには気付かれていないから、見なかったことにしてこのまま帰る？」

「確かめるって…何をだよ？」

ははっ…と喝いた笑いが零れる。

確かめる？

何を？

一緒にいる人？

ココにいる理由？

それとも——オンナノヒトトノカンケイ？

その疑問にぶち当たった時、僕はたまらず逃げ出さなくなっ
て人の流れに逆らって走り出していた。

「…っはあ……はっ……くっ…」

街道を抜け、人通りの少ない道まで来るとさすがに息が切れて立ち止まった。

呼吸が苦しい。

それに、何故か胸が物凄く痛んだ。

僕、どうかしちゃったのかな…

道端に立ち尽くしたまま息を整える。

「ふっ…くっ…」

深呼吸をしようとするのに上手くいかない。

窒息しそうな息苦しさだけが襲ってきて、どうすることも出来なかった。

苦しい。

痛いよ…

誰か、助けて――

「おい、大丈夫か？」

ふいに頭上から声が降ってきた。

病人と間違えられたのかもしれない。

僕は何でもないと言を振って立ち去ろうとしたけれど、足が動かずバカみたいに突っ立ったままだ。

（僕…何してんだろ？）

さっきまで走ってたのに。

このままずっとココにいたら、不審者にしか見えないよなあと他人事のように思った。

「っ、お前斗真か！？こんなとこで何してんだよ！」

声を掛けてきた男が何かを言っていたけれど、僕の思考には全く入

ってこなかった。

ただ、早くどこかへ行かなきゃという思いだけが先走る。

でもどこへ？

——誰もいないところに。

どうして？

——行かなきゃならないと本能がそういつから。

それはなぜ？

——わからない……ただ……

自分が何を感じているのかすらも、わからなかった。

誰か答えを——僕に教えて。

「斗真っ、おい斗真っ！！しっかりしろっ！！！！」

男が僕の肩を痛いくらいに掴んで揺らす。

ぼんやりとする重い頭をあげて、その男を見た。

「は……やと、せんぱい……？」

「俺がわかるな！？どこか痛いのか！？」

「いえ……だい……じょうぶ、です」

具合は悪くはないし怪我もしていなかったけれど、酷く痛む胸をど

うにかして欲しかった。

心臓を鷺掴みにされたような激痛に、僕は胸元のＴシャツをぎゅつと掴んだ。

「どこが大丈夫なんだよ！！こんなに泣いて…いったい何があったんだ？」

泣いて…？

何を言ってるんだろう、と見上げると隼人先輩の大きな手が優しく僕の顔を包み込んだ。

「自覚がないほど悲しかったんだな。可哀想に…」

指先で頬に流れる雫を丁寧に拭くと、隼人先輩が僕を抱きしめた。

え…？

戸惑っている僕の気持ちなどお構いなしに痛いくらいに腕に力が入ってくる。

隼人先輩の身体からは微かに爽やかな柑橘系とムスクの香りが混じった男っぽい匂いがした。

「気が済むまで泣け。溜めるのが一番良くないからな」

それだけ言っと、隼人先輩は黙ってしまった。

泣く…？

どうして、と考える前に一滴^{ひとしずく}流れた。

それを合図に止め処なく溢れ出し、ぱたぱたと頬を伝う。

込み上げてくる嗚咽を止められず、僕は子供の様に先輩の胸に縋っ

て泣いた。

「んぐっ…くしゅんっ」

「ん…？寒いかな？」

どれくらいそうしていたのか、涙が治まるころには身体がだいぶ冷えてしまっていた。

春先とは言え、夜はまだ肌寒い。

くしゃみをしてしまった僕に、隼人先輩は着ていた黒いトレンチコートを脱いで肩に掛けてくれた。

「よし、だいぶ治まったな。スッキリしたかな？」

「えっと…すみません、せんぱい。寒く、ないですか？」

着せてもらったコートは隼人先輩の温もりが移っていてとても暖かい。

けれどそれだと先輩に申し訳なくて僕は返そうとするけれど、逆に怒られてしまった。

「お前抱いてて暖かいから心配すんな。それよりもう電車もねえし、俺んち泊まっていけ」

な、とあやすように笑って頭をガシガシ撫でられ有無を言わず連れて行かれた。

「お邪魔します…」

靴を揃えて中に入ると、意外にも綺麗に掃除されていた部屋だった。8畳ほどの広さにキッチンがついている。

隼人先輩って結構ガサツっぽいイメージがあつたからサバイバルな部屋なのかなと思っていたけれど、それを言うと言われた。

お前ほど面倒臭がりじゃねえよ、って…ちょっと酷い。

「そついえば先輩ってずっと独り暮らしなんですか？」

「おう。もう慣れたもんだぜ。自炊だつてするしな。腹空いてないか？なんかあつたかいもんでも作つてやるよ。ま、蓮ほど美味くはないかもしれないが、俺の料理だつて捨てたもんじゃないぜ」

「…っ」

ありがとうございます、と続けようと思ったけれど、言葉が上手く出てこない。

『蓮』って言葉を聞いただけなのに。

それだけのことに過剰に反応してしまう自分に驚いた。

「…？どうした」

「あつ、いえ、なんでも、ない…です」

固まりそうな表情を何とか無理やり笑顔にして返事をする。

勘の良い先輩なら僕の様子に気が付いたかもしれないけれど、聞かれなかったことにほっとする。

「すぐ作るから、そこらへん座って待つてろ」

「はい…」

大人しくベッドの下に座って待っていると、お尻に何か硬いものを感じた。

そつえば携帯の電源を切りっぱなしだったことに気が付いて、携帯を開く。

電源を入れると、けたたましい数の着信履歴とメールが届いていた。それらはすべて悠からで、今更になって彼を置いてきてしまったことに気が付いた。

メールを全部読んでから改めて電話を掛けた。

「もしもし、はる……」

「斗真！？お前どこいんだよっ！！」

呼び出し音が何回も鳴らないうちに悠が出て、物凄い勢いで怒鳴ってくる。

その声を聞いて、自分がどれだけ悠に心配を掛けてしまったのかが分かった。

「心配掛けてごめん……いま、隼人先輩んち。今夜は泊めてもらうことにしたんだ。明日はちゃんと帰るから、心配しないで」

「今夜だけとは言わず、いつまでもいてくれて良いぜ」

「ってあれ？」

お腕を片手に持った先輩が、ひょいと僕の携帯を取り上げ悠と話出す。

「先輩っ！？返してくださいよっ」

手を伸ばして奪い返そうとするも、如何せん圧倒的な身長差で全然届かない。

それでも食って待つてるとお椀を僕に押し付け、携帯を持ったままベランダへ出てしまった。

むう、僕の携帯なのにっ。

抗議したところで勝てないのは目に見えているので、大人しく待つことにした。

渡されたお椀の中にはリゾットが入っていた。

随分戻ってくるのが早かったなと思ったけれど、これならすぐに作れる。

チーズの香りとミルクの匂い。それに、彩りよくバジルも散らされている。

湯気がほかほかと立っていて、とても美味しそうだ。

途中で投げ出してしまったが、散々夜店で食べたのでそんなにお腹は空いてはいなかった。

けれどせっかく先輩が作ってくれたものなので一口食べてみる。

「おいしい…」

温かくて美味しいものを食べるとほわっと幸せな気分になれる。

蓮もよく、何かあると僕の好きなものを作ってくれた。

夜中にお腹が空いたとねだれば仕方ないなと苦笑して作ってくれたし、僕の機嫌が悪いと甘いデザートを出してくれた。

いつの間にか僕の好き嫌いを全部把握していて、苦手なものが出されたことがない。

そこまで思って、自分が彼のことを何も知らないことに気が付く。

僕はいつもしてもらってばかりで、彼に何かをした覚えが全く無か

った。

日々の日常も、2人っきりの時も…。

「僕…何にも変わってないじゃん…」

彼と仮で付き合っていた頃に悠に言われたこと。

『何もしていない』のに何かを望むことは罪なのだと。
関係を維持したいのなら、努力をしなくてはいけないのだと。
だから、自分は進む道を選んだはずなのに。

僕は結局、与えられるだけの子供のままだった。

「これじゃ蓮に嫌われても、何も言えないよ…」

お椀を置いて、滲む涙を静かに拭う。

膝を抱えてこれ以上零れないようにじっと蹲った。

まだ何を言われたわけでも聞いたわけでもないのに、絶望的な未来しか想像出来なかった。

ただ、今分かっていることは――

蓮が他の誰かという…その事実だけで不安になるくらい、自分がどうしようもなく彼のことが好きだということだった。

第十五話（前書き）

投票してくださった方、本当にありがとうございます。
とても励みになります。

第十五話

やっと気が済んだのか、隼人先輩がベランダから戻ってくる。
僕に携帯を渡すとそのままベッドの上に座った。

携帯はまだ繋がっていて、ようやく僕と代わってくれた。

電話に出ると僕をとて心配してくれていたこと、自分はタクシーでもう家に帰ったこと、隼人先輩にはあまり甘えるなとよく分らないことを言われた。

確かに人にあまり迷惑を掛けるのはよくないので、分かったとだけ伝えた。

「とりあえず、今夜はゆっくり休んで頭を冷やしなよ？あの男が何考えてんのか知らないけど、北条がお前のこと…大切に思ってるのは、僕にだって分かるんだからね」

「うん…ありがと、悠。迷惑掛けてごめんね」

「ばーか。斗真に迷惑掛けられるのなんて、慣れっこだよ。いい加減、僕の有り難味が分かった？」

「ふふ…いつも感謝してるよ。悠が僕の友達で、ホント良かった」

「ちよつと元気出たな。いい？深く考えたりしちゃダメだからね。」

あれくらい、恋人の特権で余裕ぶっこいて高笑いしてりゃいいんだから」

「…それは悠にしか出来ないよ」

「何だよーっ、僕はそんな嫌なヤツじゃないし」

「ってちよつとそれっ、僕に嫌なヤツになれっていつてるようなもんじゃんっ」

「今頃気付いたの？やだね」

あはは〜と笑っていつものように僕をからかう。

暗くならないように笑わせてくれる悠の優しさが、嬉しかった。

「でもいい！？絶っつつつ対に隼人先輩にくつついたり寝惚けて抱き枕にしちゃったり甘えたりしちゃダメだからね！？あの人は優しそうに見えて超鬼畜・意地悪・冷血漢・ズルイ男なんだから！！」

「えっ…はあっ…う、うん！？」

随分な言いようだが、反論する余地が全くないのでとりあえずコクコクと頷いた。

「ああゝもう、ホント心配だよ…なんでよりもよって隼人先輩なんだよう」

「いや、あのゝ…悠さん??」

はあ…と電話越しに盛大なため息が聞こえてくる。

何でそんなに隼人先輩を警戒するのか僕にはさっぱりだった。

そういえば、オーナーに対しても凄い剣幕だったし、何か直感的に苦手なのかな？と思うことにした。

だって僕にはわからないし。

考えてもしょーがないことは、考えるだけ無駄というものだ。

「明日の講義は休むんでしょ？」

「ううん、明日は3限だけだから、一旦帰ってから行くよ」

「そうだったけ。じゃあ終わったらカフェで待ってて。美味しい紅茶で良いよ」

「あはは…了解しました。それぐらい奢らせていただきます」

「よろしい。んじゃ、また明日」

「うん、おやすみ」

ちゃっかりねだってくるのはさすが悠と言ったところか。

けれど、今回は結構迷惑を掛けてしまったのでそれぐらいはご愛嬌だろう。

でも、悠の明るさのおかげで少し元気が出たのでお礼としては安いものだ。

「電話、終わったのか？」

「はい。先輩にもご迷惑をお掛けしてすみません」

「バカ、気にすんな。俺がしたくてしていることだ。お前が気に病む必要なんか何処にもねえよ」

わかつたら素直に甘えておけ、と傲慢に笑ってガシガシ撫でる。だからあ…ちよっぴり痛いんですけど…

じとと上目遣いに睨んでも、全然聞いちゃくれない。むしろ、なんか喜んでるっぽいんですけど…なんで？

「お前って、可愛いよなあ」

「はい？」

何を急に言ってるだろう？

きょとした表情で隼人先輩を見る。

「瞳なんかクリクリしてるし、肌は白くてぷにぷにしてお供みてえだし」

「先輩…それ、褒めてませんから…」

言われたこっちはガツクリと肩を落とす。

二十歳過ぎた男が可愛いとか言われても、ねえ…。むしろ、男としては悲しい限りだ。

なんかバカにされてるような気がするんですけど！

「むうっ、先輩は良いですねっ。男らしくて背も高くてカッコイイから。どーせ僕なんか背は普通だし運動なんか全くしないから遅くないしっ。顔なんか童顔のせいで身分証明書ナシで飲みに行けないんですからねっ」

持っても疑われるし！

ぷりぷりと怒って先輩から離れる。

と言っても、さほど広い部屋ではないので座ったままベッドの下から玄關に向かってズレただけだ。

「こらこら、逃げんな。バカになんかしてねえよ。可愛いと思ったから言っただけだ」

ズリ下がるうとする僕の腕を取って、自分のほうへと引き寄せる。先輩はベッドの上に座ったままなので必然的に腰が上がってしまった。

「男の僕に可愛いと言わないで下さいよっ」

必死の抵抗も虚しく隼人先輩の腕の中に囚われてしまった。

なんかいろんな意味でヤバイんですけどっっ

「せ、先輩っ、僕作ってもらったリゾットが食べたいんで離してくださいっ」

なんとか解放してもらいたい一心でお願いしてみる。

まだ一口しか食べてなかったけれど、凄く美味しかった。

やっぱり美味しいものは温かいうちに食べたほうがいいね。

「うん？食べさせてやるよ」

「はぁ！？」

隼人先輩はそういうとテーブルに置いたままのお椀を片手でひょいと取って、僕を腕に抱いたまま食べさせようとする。

いやいやいやいや、何かオカシイだろっつ

ってかこの人絶対面白がつてるし〜っつ

何度も脱出を試みるが見事失敗に終わってしまった。

まあ、試すまでもなく体格差から絶対無理なのは分かってたけど。けれどこのまま先輩の思惑通りにコトが運ぶのは面白くない。

どうにか一矢報いてやりたい一心で何かないと頭をフル回転させた。

お風呂に入りたい↓俺も一緒に入ると喜びそう…

あえて早く食べさせると偉そうに言ってみる↓偉いでちゅねえ〜大きくなるんでちゅよ〜とか言ってバカにして笑いそう…

突然哀しんで甘えてみる↓なんか別の意味で危ない気がする…

……全然ダメじゃん！

どうやっても逃れられないような気がしてならない。

何を言ってもやっても結局は隼人先輩を喜ばすだけになりそうなので、大人しく寄せられたスプーンをパクリと口にした。

うん、やっぱり美味しい。

もくもくと咀嚼そしゃくしていると拘束する力が弱まった。

（やったっ、ラッキー）

何良かったのかは分からないけれど、チャンス逃すまいとそのまま腕から抜け出す。

悪戯好きの人は反応を返すから面白がってやるのかもしれない。

無反応なら特に面白くもなんともないのかも…と一人納得していると、カタンとお椀を置く音が聞こえた。

どうしたのかと少し離れてから先輩に視線を向ける。

「どうして…」

そう言っただけで黙ってしまった先輩は、何かを言いたいのに言えないよ
うな…いつか見た、切なそうな表情をしていた。

見ているこっちが苦しくなるくらい、痛そうな表情。

「せんぱい…？」

僕は隼人先輩が心配になって、離れてしまった分だけ近寄る。

不安げに見上げると、困ったように笑ってくれた。

「何でもねえよ。間抜けツラがさらにアホなツラになってるぜ」

ぺしつと軽くでこピンを喰らわせて今度はニヤリと意地悪く微笑む。

…なんか騙された気分だ。

心配してソンしたっ。

もういいや、と先輩の存在を丸無視してリゾットを頬張った。

ご馳走様をしてシンクに運ぶ。

水にだけ浸けておいて、わざと洗わなかった。
ふーんだっ。

思いつきりぷいっとしてやった。

「ぷっ」

「何笑ってんですかつ！」

「いいや、別に」

何でもねえと言いつつ笑い声が漏れている。

というか隼人先輩は隠す気がまったくない。

むしろダダ漏れ。

なんかムカツクけど、これ以上対抗しようがないのでシカトだシカト！

無反応、それが一番っ。

せめてもの仕返しにベッドの上に座ったままの先輩を押しつけて毛布を剥ぎ取り枕を奪った。

それを床に置いて、机を退けて勝手に寝床を作る。

部屋の中はさほど寒くはないので、重ね着していたシャツと靴下を脱いで畳み端のほうへと置いた。

よしっ、準備完了！

じゃ、おやすみなさい…と先輩の存在を丸無視にして寝ようとしたが、毛布を被ろうとする手を抑えられた。

「風呂は入らないのか？」

「いえ…そこまでは迷惑掛けられません」

「アホか。んなことくらい気にすんなって言ってんだろ。先輩命令とっとうって来い」

えー…そんな強引な…という声が今度は黙殺される。
容赦なくお風呂場へ連行され、タオルとパジャマ代わりのジャージを渡されてしまった。

新品とはいえパンツまで渡そうとしてきたが、頑張ってお断りした。だってボクサーパンツなんだもん。
ってそういう問題じゃないか。

とにかく隼人先輩が喜びそうなことは極力しないように気を張ってみる。

悠からも念入りに注意されちゃったし。

そんなことを考えながら素早く頭と身体を洗って湯船に入る。
ちやぶん、と肩まで浸かるとお湯の温かさが気持ち良かった。

蓮…どうしてるのかな…

一人静かな空間にいと、考えるのはいつだって彼のこと。
悠や隼人先輩の賑やかさのお蔭でだいぶ前向きになったが、どうしたってあの光景が頭をチラつかせる。

今にもキスしそうなくらい密着した2人。

自分にはない、ふくよかな胸を彼の腕に押し付け、妖艶に微笑んで

（蓮の…表情は、どうだったっけ…？）

そこだけ霞が掛かったように思い出せない。

最近、よく見せてくれているような優しく笑った表情…だったっけ？

…わからない。

嫌なことから逃げ出すように、思考が中断する。

知りたいのに、知りたくない。

考えたいのに、考えたくない。

矛盾した気持ちがあるぐるぐる駆け巡って、前へ進めない。

「れ、ん……」

名前を口にしたただけなのに、酷く心が締め付けられるような感覚がした。

今は会いたくないのに——会いたい。

ぎゅっと強く抱きしめて、キスして欲しかった。

第十六話（前書き）

ユニークアクセス1000人突破！
本当にいつもありがとうございます。
感謝の気持ちでいっぱいです。

第十六話

お風呂から上がると、奪った毛布や枕が元の位置に戻されていた。さすがに何もしないで寝るのはやだなーと思っていると、隼人先輩が何か企んでいるようなニヤニヤ顔をしていた。

「あのう…先輩？」

「なんだ、後輩」

「僕の寝る場所が無いんですけど…」

「うん？ベッドがあるじゃねえか」

隼人先輩は座っているセミダブルのベッドをポンポンと叩いた。

長身でガタイも良い先輩は普通のシングルでは狭いし足が余るらしいので（ムカツク…）、ゆったり眠れるこのサイズにしたらしい。

「いや、でも僕は飛び入りなので床でいいです。先輩だってベッドで寝たいでしょう？」

「おう。だから一緒に寝ようぜ」

「…はあ？」

何言っただよコイツ、と失礼ながらも思いつきり呆れる。

まるでおっしゃっている意味がワカリマセン。

「お前くらいならちっちゃいから大丈夫だろ。湯たんぽ代わりになれ」

「えっ、ちよっ、まっ…、うわっ」

ちっちゃい余計、湯たんぽって何？っていう苦情を言う前に腕を捕られて引っ張り込まれる。

胸元に頭を抱きしめられて抜け出せなくなってしまった。

「やっぱ小動物は体温高いな。暖房無しでも温けえ」

「僕は人間ホツカイロじゃないんですけど」

「だから湯たんぽ代わりになれって言ってんじゃねえか」

「だから湯たんぽって何って言ってんじゃないですか」

半ば逆ギレ状態で抵抗しベッドの端へ逃げようとするが、ぐるりと方向を回転させられて先輩と壁に挟まれた状態になってしまった。若干狭い感じがするのは否めないが、寝れなくもない。

どこにも逃げ場が無くなってしまったので、しょーがないと諦めて寝ることにした。

「くくく」

先輩に背中を向けて寝ようとするのに、背後からは楽しそうに笑う声がする。

しかも油断するとすぐに腕を乗つけてこようとするので、その度に振り払っていた。

すると今度はズシツとした重さを感じた。

横向きで寝ているので、圧迫されて苦しい。

なんでこの人は大人しく寝させてくれないんだよつ。

「もうつ、先輩重いですってばっ…!？」

左腕を押し上げて振り返ると、いつもの意地悪な顔はどこにもなく…見たこともない真剣な眼差しをした先輩の視線とぶつかった。

「なあ、斗真…」

右肘をついて頭を乗せている先輩は、こちらを向いて見つめてくる。するりと左手で僕の頬を優しく撫でた。いつもと違う空気、少し低くなった声。

どうしてかは分からないけれど、なんだか危ないような気がした。

「せんぱい？」

「どうして…お前は——」

また、だ…。

何かを言いたそうにしているのに、絶対に先を言わない隼人先輩。

どうして？

それは僕なの？

僕は、知らない間に隼人先輩を苦しめるような何かをしてしまったのだろうか？

「先輩…ごめんなさい」

「…っ、どうしてお前が謝る？」

先輩の辛そうな表情を見て申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまった僕は、理由もわからず謝罪の言葉を口にしていった。けれどそんな僕を戸惑ったようにポンポンと優しく頭を撫でてくれる。

隼人先輩独特のガシガシ強くかき混ぜる撫で方じゃなくて、逆に不安になってしまった。

やっぱり、何かしてしまったのだろうか…。

「だって…」

「お前は何も悪いことなんかしてねえんだから、謝る必要なんかどこにもねえよ。お前はアホみたいになんかいつも笑ってりゃそれでいい」

むにと僕の頬つぺたをつまんだ先輩は、泣き笑いみたいに無理してるのが分かったけれど何も言わなかった。

先輩が、そういうのなら。

僕は少しだけ無理をして微笑って、先輩と向き合って眠ることにした。

翌朝。

泊めてもらったお礼を言って、早々に自宅へと帰った。

たった一晩のことなのに酷く長かったように感じられて、ベッドに腰を落ち着けると斗真はそのままゴロリの寝転がった。

（っ、疲れた…）

いくら仲が良いといっても、やはり先輩とずっと一緒というのは気を使うものだ。

相手が隼人であつたからまだ大丈夫だつたものの、これが全然遊んだりしない先輩だつたと思うとゾツとする。

上下関係で考えると…先輩ではないけれど目上の人という意味で、これが崎だつたらおそらく一睡も出来なかつただろう。

ウトウトとこのまま寝てしまいたいが、もう少ししたら授業に出るべく大学に行かねばならない。

それに、講義が終わつたら悠と会う約束をしているのだ。

疲れのせいなのか、隼人が散々からかつたり騒いだりしたせいで悩む時間があまりなかつたお蔭なのか、昨夜ほど混乱はしていなかった。

ただ…

「蓮と会つて…僕、ちゃんと笑えるのかな」

彼に会いたい気持ちと同時に湧き上がる黒い気持ち。

やっぱりあの女の人と付き合うからお前とは付き合えないとか、蓮のことだから何も言わずに『別れてほしい』と言われてしまつたりするんじゃないかとか――

「やばい、暗くなってきた」

もしそう言われた時のことを勝手に想像してどよんと気分が沈みこむ。

（まだ何も言われてない、まだ何も確かめてない、まだ何も行動してないだろっ）

必死に自分に言い聞かせてみるが、どうしても不安が拭えない。
足元から崩れ去ってしまいそうな未知数の恐怖が襲い掛かってくる。

こんなにも彼と別れることが怖いなんて。

「あーもうっ、こんなんヤダッ！」

うだうだしてるだけなんて自分らしくない。

悩んでいたって、何も解決なんてしないのに。

怖くても、その先がどんなに悲しくても、そうじゃないかもしれない。
い。

何もしないからずっと怖いままなのだ。

一晩だけでもこんなに苦しいのに、これをずっと続けるのか？

彼から何も言われないことを祈りながら、不安と恐怖に苛さいまれながら一緒にいるの？

そんなのは耐えられない。

そう思っただけでベッドから跳ね起きて服を着替えて出かける準備をする。

こうなったら学校で蓮を捕まえて、直接聞くしかない。

もし本当に最悪なことを言われたら…その時は自分の想いを伝えるしかない。

それでもダメなら、その時また考えよう。

何もしないよりは何倍も良い。

もつ与えられるだけの子供は卒業するのだ。

自分の想いを確認すると、矢継ぎ早に斗真は家を出た。

第十七話

北条 蓮。

大学2年生。

身長183cm、体重72kg。

クールで大人びた雰囲気を持つ勤労学生。

精悍な顔立ちと漆黒の髪を持ち、大学内でも学部を超えて評判の男。男女共によくモテて、冷たく振られた人数は星の数だとか。

だけど、本当は笑い上戸で、意地悪で、料理が大好きで——物凄く優しい人。

ぶっちゃけ噂なんてまったく興味がない斗真は、紹介されるまで彼の存在を知らなかった。

広い大学構内では、知ろうと思わなければ入ってくる情報なんてほんの少しだけ。

同じ年頃の連中が興味を持つ色恋沙汰に、ついていけなかった。

彼女が出来ても望まれるだけの気力がなく、気がつけば別れを繰り返していた。

だけどそれは、本当の恋を知らなかったただけなんだ。

自分の態度によって相手をどれだけ傷つけていたのか、今ならわかる。

少しでも多くの時間を共に過ごしたい。

いろんな話を聞いて欲しい。

自分の知らない誰かといったら、気になってしまつて仕方がない。

相手を好きであればあるほど、その想いは強くなつていく。
それが、恋人であれば尚更だ。

そのことに、どうして今まで気がつかなかつたんだろう。
煩わしいと思つていた感情が、今度は自分の中を駆け巡る。

今すぐ蓮に会いたい。

会つて——確かめたい。

（蓮、蓮っ）

今どこにいるんだろう？

斗真は蓮を探して、構内で彼が居そうな場所を走っていた。

（今すぐ会いたいよ）

同じ授業以外で彼と会つのは学食、カフェテリア、部室。それと、
いつもの公園だけだ。

クラスも学科も違うので、広い大学の中で一人の人間を探すことは
難しい。

「ここも違う…」

蓮のクラスを覗いてみるが見知った顔はなかった。

次は食堂。

まだ昼食を食べるに時間には早いし、学食の味があまり好きでない蓮はやっぱいいなかった。

そのままカフェテリアへ向かうと、見慣れた赤いツンツン頭が見えた。

「響先輩っ、蓮っ…見ませんでしたか!？」

「どおわあっ!？な、なんやて!？」

山盛りのお菓子をつまんでいた響は怒涛の勢いで向かってくる斗真の姿に驚いた。

思わずお気に入りのチョコを取り落としてしまった。

あゝあ、これ最後の一個だったのに。

響は怒ることもなく焦った様子の斗真を見やる。

いつもぽや～としているイメージなのに、いったいどうしたというのだろうか。

「れっ、蓮ですっ。あいつ見かけませんでしたか!？」

「蓮? ああ、あいつならさっき部室の方に行くのを見たけど…」

「わかりましたありがとうございます!」

それがどないしたん、と続く声も聞かずに鉄砲玉のように走っていつてしまった。

「ほんまにあいつ、どうしたんや?」

青春しとるな〜と意外とじじむさいことを考えながら、遠ざかる斗

真を見送った。

「そついや斗真って可愛い顔しとるけど、ちゃんと男なんやな」

むしろ、一番男らしい部分があると響は思う。

「外見に騙されて甘くみとると、痛い目みるで？」

なあ、と誰ともなく問いかける。

ニヤリと悪戯っぽく笑うと、幼い顔立ちを嘲笑うような白い八重歯が現れていた。

「蓮っつ、どこだよ」

斗真は職員棟から教育棟に向けて駆けていた。

大学構内の造りは目的毎に分けられていて、職員や講師向けの食堂や売店は職員棟、学食や生徒ホール、各クラスの教室は学生棟、一般学科の講義や科目毎の特別教室のある教育棟などがある。

各棟の間には中庭や大通りが広がり、景観はとても良い。

先ほど響と会ったカフェテリアは職員棟の外れにある。

学生棟にある喫茶ルームよりも少々高いが、教員向けに出されているので味が良いカフェテリアを斗真たちは利用していた。

部室があるのは教育棟の一角。

使われることのなくなった教室を、響があの手この手で獲得したのだ。

ただのお気楽サークルだと侮っていると痛い目を見る。

イベントが持つ力とは、不思議なほどに強かったりするものだから。現に、学生獲得に苦心している学校側は学祭などを取り仕切る響の力を欲しがっている。

相手が何を要求しているのかさえ分かっってしまうばこちらのものだ。あとは、良い様に扱えばこちらの希望などあっさり通る。

そんな裏事情など知らない斗真は、自分の欲するがままに行動をする。

彼に会いたい。

ただそれだけの気持ちを持って、部室へと向かっていた。

部室のある通路まで来ると、見知った男の後ろ姿があった。

漆黒の髪、広い肩幅に長い足。

憎らしくなるほど鍛えられた体躯をどれほど羨んだかしれない。

そのうえ綺麗に整った顔立ち。

涼しげな切れ長の瞳、スツと通った鼻筋、形の良い薄い唇。

どこを取っても非は見当たらず、絶対性格に欠陥があるに違いな

いと僻んだことなど数知れず。
それなのに、いつの間にかそいつが自分の一番大切な存在になっていたんだ。

「蓮っ」

部室の前で立ち止まったままの彼の名を口にする。
やっと見つけた。

蓮の傍へ駆け寄って行くと、昨夜見た、あの女性も一緒にいた。

なんでまたあの女…^{ひと}っ

我が物顔で蓮の隣にいる彼女にムカついて、深く考えるまでもなく蓮の腕をぐいっと引つ張った。

「斗真…!？」

驚いた様子の蓮のことなどお構いなく、斗真は彼女に向かって言い放っていた。

「蓮は、僕のなんだから気安く触んなっ!!」

彼の腕をしっかりと抱きしめて、睨み付けるように彼女を見る。
女性はびっくりはしていたけれど、すぐに妖艶に微笑み、斗真の頭を撫でた。

「あらっ、あなた可愛いわね。そんな無骨でかわいくない男なんてあなたにあげるから、あなたがわたくしのものになってくれる?」

うふふつと可愛らしく笑って、今度は艶かしく頬を撫でた。

（はっ…？）

何を言われているのかさっぱりわからず、かちんと固まっている斗真をよそに女性は斗真に抱きついた。

「まあっ、ぱやんとしているところも可愛いわあ。んもう、わたくし絶対にこの子を持って帰るわ！」

いやーんっと言いながらぎゅうぎゅう斗真を抱きしめる。

（くっ…苦しい…）

どこからどう見ても可憐で細い腕をしているのに、斗真を拘束する力は意外に強かった。

女性は斗真と同じくらいの背をしていて、女性にしては結構高い。おまけにヒールの高い靴を履いているせいか、若干彼女のほうが視線が高いように感じられた。

なんだかよく分からないけれど、とりあえず誰か助けて…

うっかり意識が飛びそうになっていると、傍らにいた蓮が彼女の肩を思いっきり掴んで引き剥がした。

（えっ、いくら何でも女性にそんなことするなよ…っ）

なんて、さっき自分のしたことなんて棚の上でそんなことを思う。苦しさからは解放されたが、そこまでしなくても…。

「いい加減、おふざけはやめてくださいっ、美空さん！」

珍しくブチ切れた剣幕で蓮が彼女に怒鳴りつける。

人前でそんなに怒ったことなんてないのに、どうしたのだろう？

1日振りに見る彼は、眉間に皺を寄せて憔悴したような表情だった。たった1日だけのことなのに、蓮がこんなに疲れた顔をするなんて

彼女——美空さんと言ったか、この人っていったいナニモノ。

少なくとも、今さっきまで自分が思っていたような関係ではなさそうに思えてほっとする。

肩を強く掴まれた美空は、何てこともないように邪険に振り払って残念そうな顔をした。

「やあねえ…これだから無粋な男は嫌いよ。ねえ、あなたお名前は？こんな男なんかよりずっといい思いをさせてあげるから、わたくしに乗り換えない？」

ちよんと斗真の唇と突くと、ふふふっと面白そうに微笑んだ。

（な…なんか女版・悠がいるよおっ）

ひいっと心の中で叫んで、ずざざーっと彼女から離れた。

なんかヤバイ、悠よりも彼女の方がたぶんずっと上手だ。油断したら本気でお持ち帰りされかねない。

虎に狙われた子羊のように、身に迫る危険な空気を本能的に感じていた。

さっきの怒りはどこへやら。

出来れば今すぐ逃げ出したい衝動に駆られていた。

そんな斗真の心境を知ってか知らずか、蓮が美空の前に立ちほだかり斗真を庇うように自分の背中に隠す。

「なあに、蓮…邪魔しないでくれるかしら？」

「いくら貴女でも、こいつはダメです」

後ろ手で優しく斗真を閉じ込める。

蓮の背中から感じる彼の体温と、微かにする甘い香り。

いつも感じていたことなのに、酷く懐かしい感じがした。

（蓮…）

頭をコツンと彼の背に預けてぎゅっと服を掴むと、閉じ込めてくる腕の力が強まった。

その力強さがとても心地良かった。

もっと、ずっと…こうしていて欲しい――

一度は失うかもしれないと思っていたものがこうして手の中にあると、前よりも愛しさが増してくる。

もっとたくさん、蓮に甘えたくなった。

「何も隠さなくてもいいじゃない。蓮が大事にする子なら、わたくしだってもっと可愛がりたいわ」

「ダメです。斗真はもう俺のものなんですから、もったいなくて貴女に見せられません」

「トーマくんて言うのね？ああんもう、可愛すぎだわあ。ねっねっ、お姉さんと一緒に遊びましょう？」

蓮の言葉などまるで無視し、情報だけを上手く利用して自分の思うようにコトを進めようとしている。

彼女は蓮の後ろに隠されている斗真を覗き見て、楽しそうに笑いかけてきた。

それを必死で防ごうとしている蓮が、子供のように見えて不謹慎にも可愛く思えた。

「ねえ、蓮…この綺麗なひとは誰？」

ちよつと怒ったように言ってみる。

どうせもう、美空には2人の関係がバレてしまっているのだから、この際それを利用して昨夜散々悩んだことを聞いてみることにした。

「…！？斗真…、怒っているのか？」

むうーっと顔を顰^{しか}めて上目遣いに睨む。

付き合っているようでもないし、浮気していたようでもない。

だけど、自分の知らない…しかも女性と仲良くしていたら、やっぱり気になるものだ。

「うふふつ…トーマくんってばわたくしに嫉妬してるのかしら？いやんつ、もおちょー可愛いじゃないっ」

斗真を包む腕をバシバシ叩いて、キヤーっつと黄色い声を上げる。

（しつと…？なんかちよつと違うんですけど…ってかなんで僕、この人に頼つぺた突かれてんデス力…？）

ますます美空に対して不思議に思う。

蓮の服を掴む手が無意識に強くなった。

テンションの高い彼女に振り回され、斗真はだんだん面倒になってきた。

（ああっ、もう、蓮っては何してんだよっ）

はつきりしろーっと言ってやりたい。

自分だってくだくだなのに。

蓮はもう一度美空から斗真を守るべく、今度はくるりと回って正面で斗真を抱きしめる。

確かにこれなら、美空は斗真の顔を見ることが出来ないのだけれど…

「ああもう、いい加減離れてくださいっ、母さん！」

「いやーよっ、しかもそんな無粋な呼び方しないでくれるかしら？名前で呼びなさいっっていうのも言っているでしょう」

「知らないですよっ、そんなこと！今の俺には貴女のプライドなんかよりも斗真のほうが断然大事なんですからね！！」

「ふーんだっ、蓮くんがつれなくって可愛くないわぁ」

「いい歳して拗ねても可愛くないですよ」

ふんっ、と馬鹿にしたように蓮が言い放つ。

（えっ？っていつかこの人蓮のお母さん…！？）

どうみても見えない。

似ているところと言えば、綺麗な漆黒の髪と背が高いことくらい。

美空も綺麗な顔立ちをしているが、蓮とは違ってフランス人形みたいに目がぱっちりしていて派手な印象だった。

蓮も十分派手なんだけど…なんかジャンルが違うような気がする…

けれど親子だと言われると似ているように見えてくるのだから不思議だ。

でもいったい、幾つの時なんだろうか？

美空はそのまま見れば20歳半ばくらいにしか見えない。

蓮より少し年上かな、というのが分かるくらいだ。

（つていうか僕っ、蓮のお母さんにとんでもないコト言っちゃったよ！？）

イタイ…自分の行動がかなり痛すぎる…

蓮の腕の中で、今なら死ねる…なんて意味不明なことを真剣に思った。

とりあえず…気絶したい。

恥ずかしすぎて、こんなに現実逃避したいと思ったのは初めてだった。

蓮と美空の親子喧嘩を聞きながら、どうすれば気絶出来るかを真面目に悩む斗真だった。

第十八話

結局、斗真はその日の授業をサボって美空と昼食を摂ることになった。

悠には呆れられながらも、後日またゆつくりと話すと約束をした。美空さんが悠に似てるって言ったら、『冗談じゃない』って怒られてしまったのだが。

そんなに嫌なものなのだろうか？

うーん、友人の好みは良くわからない。

悠は自分大好きっばいところがあるから、気が合うと思ったのに。

美空さんの要望で、昼食は「Fontana di Trevi」を訪れた。

蓮も今日は仕事でなくてお客さんとしてなので、ゆつくりと話すことが出来る。

店の中に入ると、オーナーの崎さんが優しく微笑んでくれて——
急に笑顔が引き攣った。

え？

こんなオーナー初めて見るんですけどっ。

「申し訳ございませんが、斗真くんの席しか生憎とご用意出来ません。お引取りください」

「あーら龍一、わたくしに刃向かおうっていうのかしら？」

「蓮、斗真くんを連れて上がってなさい。私はこの女を始末しておきます」

「だめよーっ。斗真くんはわたくしのなんだからっ」

持ってつちやダツと斗真の腕を掴む美空。
すかさず阻もうとする蓮。

突然黒いオーラを放って美空を睨む龍一。

なんなんだよう、この空気。

しかも3人とも背が高く美人さんなのだ。

はつきり言って針のムシロ。

しかもこんな他の人の目のあるとこで言い争いすんなつ。

我慢していたが、お腹も空いていたこともあってイライラしてくる。
いい大人がこんなとこで喧嘩すんな！

龍一が美空に向かって塩を撒き始めた瞬間、ぶちつと切れた。

「いい加減にしろつ、僕はゴハンを食べに来たのっ！」

うがーつと怒ると、3人ともが固まった。

すぐに復活したのは美空で、ちょっぴり恥じたように微笑む。

「あら、ごめんなさい。久しぶりに愚弟にあつたものだから、つい
興奮しちゃったわ」

「ぐてい…？」

「私とこの女は、信じられないことに姉弟なのですよ」

ええ、まったく腹立たしいことに、と続く龍一の様子はいつもと違
って感情に溢れている。

おそらくこつちが素なんだろうなあと龍一の新しい一面を見た。

優しい紳士的な姿も素敵だけれど、こちらもちらでワイルドな感
じがして斗真は結構好きなタイプだと思った。

男らしいひとつで、いいよね。

うんうん、と一人納得していると、上から不信な視線が突き刺さってきた。

「蓮？」

「…あんまり崎さんを見るな」

不機嫌そうにちよつと怒っている。

何でか分からないけれど、拗ねてるようにも見えて可愛い。

斗真は蓮の機嫌を直そうと彼の手を取った。

「大丈夫、僕には蓮が傍にいてくれればそれだけでいいから」

「…斗真」

ねっ、と蓮に向かって微笑むと、しょうがないなっというもののよう
に笑ってくれた。

（本当に、僕には蓮さえ居てくれればそれだけでいいから…）

繋いだ手を離したくない。

ずっとずっと、傍に居て欲しいと思うのは蓮だけなんだから。

まだ言葉には出来なかったけれど、想いを込めて蓮の手を握り締め
た。

ようやく2人が落ち着いたので、美空の希望でテラス席へと座る。
左から蓮、斗真、美空の順に時計周りに席に着く。

すると、さっきの不機嫌な顔はどこへやら、完璧な支配人の顔でオーダーを取りにきた。

「えっと…美空さんは何にするか決めました？」

「もちろんっ、支配人が選ぶこの店ー美味しい料理に決まっているわっ！」

「…そんなのあつたつけ、蓮？」

「さあな」

つーんとそっぽを向いて、我関せずの態度を表明する。

言われた支配人^{オーナー}は感情を表に出すことなく綺麗に笑って了承していた。

（…なんか、すつごく冷たい笑顔に見えるんですけど。あれ本当にオーナー？）

いつか悠が言っていた『裏がありそう』って…もしかしたらこのことなのかも知れなかった。

「どんだけ勘が良いんですか、悠サン…」

表面上だけの彼しか見ていなかった斗真にとって、瞬間的に見分ける悠の観察眼には脱帽した。

（でもそうなると…）

悠が注意しろと言ったのは3人。

龍一、隼人、そして美空だ。

因みに悠は蓮とも仲が悪い。

「…単に自分より上手っぽい人が苦手なだけなんじゃ？」

蓮は別だが、隼人先輩にはいつも悪戯されまくっている。

もしかして、自分に被害が来そうな人間にだけすぐ気がつくとか…？

まあ、いつか。

とりあえず今は深く考えることを止めて、斗真は蓮に我俣を言ってみた。

「ね、蓮。僕は蓮のおすすめがいいな」

「…は？」

美空が弟に無理難題を押し付けるのなら、斗真は蓮に言ってみたいと思ったのだ。

食べ物に関しては自己主張が強い斗真からそんなことを言われたことのない蓮は、お願いの意味を瞬時に理解することが出来なかった。

「…だめかな？蓮が好きなものを、僕も知りたいなって思ったんだけど」

上目遣いに蓮を見つめながら可愛くねだる。

そんな可愛い表情で、自分のことを知りたいなんて言われたら…

「斗真、俺の理性を試してんのか？」

「えっ？」

きょとんと大きな瞳を瞬かせ、不思議そうな表情をする斗真はいつにも増して幼く見え、蓮は今すぐ押し倒したい衝動に駆られていた。

なんだか最近、特に斗真が自分に向けてくれる感情が嬉し過ぎて怖い。

前は絶対に無かったのに、時折自分を好きだと言っようになった。恥ずかしそうに頬を染めて、自分の存在を求めてくれる。

今もそうだ。

他人に興味なんか全く無かったのに、知ろうとしてくれている。

我侬を言ったり、甘えてくれる。

そのことが、蓮にとってどんなに嬉しいことなのか。

もうずっと斗真を求めてきた蓮にとって、『自分』という存在が相手の中に根付いてきているという

事実が何よりも嬉しかった。

もっと、もっと、自分だけを見て欲しい。

斗真のすべてを自分だけで埋め尽くしたい。

自分がずっと、斗真に囚われてしまっているように。

そんな気持ちを微塵も零さぬように、蓮は愛おしげに斗真の頭を撫でた。

いつか——自分の気持ちと同じくらい、斗真が自分を想ってくれるようにと願って。

「蓮…以前よりずっと良い表情かおをするようになったのね」

斗真と蓮のやり取りを眺めていた美空は、少し寂しさを感じるような声で龍一に零す。

前は、あんなに感情が無い子だったのに。

「姉さんと離れてから、あいつはあいつなりに頑張ってきたんだよ。特に…あの子と出会ってからな」

「そう…」

蓮が優しい表情で愛おしげに見つめる先には、いつも斗真の姿があった。

それをもう…ずっと見守ってきた龍一は、斗真の存在に感謝していたくらいだ。

親に捨てられた蓮にとって、世界は真っ黒に塗り潰された音の無い世界だった。

すべてが虚無で、悲しいほどに色のない世界。

そこに彩りを与えたのは幼い子供だった。

無邪気に笑うその表情は、見るものすべてを幸せにする。

穢れを知らない、真っ白な存在。

それなのに、輝いて見えるのは暖かい光を放っているからだろうか。

その希望の光に魅せられた彼は、いつしか自身をも光輝かせる存在になった。

だからこそ、今の蓮がある。

「突然帰ってきて、一緒に連れて行こうなんてムシの良い話なんて早々ねえんだよ。自分のしたことに、今更後悔したってもう遅いんだよ」

核心を突く龍一の言葉に、美空はハツとする。

どうして自分のしようとしたことが、この弟にはいつも分かってしまふのだろうか。

「蓮の今の保護者は俺だ。それに、あいつはもう二十歳を超えた大人なんだ。今さら母親ぶったって意味なんかねえし、あいつはそれを必要としていない」

だからサツサとオーストリアに帰るんだな、と続く龍一の声は冷たい。

けれど、それだけのことを自分はして来たし、自覚もある。

今回は運が良ければ連れて行こうと思っただけだったのだ。

大切な人がいたら、すぐに諦めるつもりだったのに。

会ってしまったら、酷く名残惜しくなってしまったのだ。

あんな風に笑う蓮を見たことが無かった。

奪ってしまったのは、自分だったのに。

自責の念と、喜びが交わって複雑な気分になる。

けれど、これだけは。

「わたくし、一度だって蓮を忘れたことなんてなかったわ」

贖罪のように、小さく囁いた。

母と呼ばせないのは罪の意識の現われ。

蓮が自分に敬語を使うのは、警戒心の象徴。

それでも黙って付き合ってくれたのは――優しさだった。

本当は自分が彼に与えなければならなかったものののに。

気がつけば自分が与えられてしまっていた。

だからこそ。

どんなことがあっても、自分だけは彼らの味方でいようと心に誓った。

「美空さんっ、料理きましたよーっ。めっちゃ美味しそうっ」

嬉しそうにニパツと笑う斗真の顔をみて、ほっと和む。

テーブルに並べられた料理はどれも美味しそうで、龍一は本当に腕を掛けて作ったのだろっということが分かった。

「ええ、本当に、美味しそうね」

「はいっ、ここのお料理はどれも一番美味しいんですよ」

えへへっと自分のことのように話す斗真。

よくこの店に来るのだろう。

龍一の所作や蓮の料理に対する気持ちなどが彼の中に身に付いている。

丁寧にお皿を並べてナイフとフォークを渡してくれた。

「ばーか、どれも一番だったら、一番がないだろう？」

「ちっがつよ、出される料理に順番なんか付けられないよっ」

「…？どうゆうことだ？」

斗真の言う一番の意味が分からなくて、蓮は問う。

美空もその意味が知りたくて、斗真のほうを見つめた。

「一番つてのはね、その人にとっての一番なんだよ。食べる人が好きな料理が、その人にとっての一番の料理なんだよ！！」

「……っ」

「だから僕は、蓮の作ってくれるものなら何でも一番好きだよっ」

零れんばかりの笑顔で蓮に向ける。

その表情が眩しくて、美空は泣きたくなった。

食べる人が好きな料理が一番の料理——

美空はもう一度テーブルに並べられた料理を見る。

彩りよく盛られたモツツアレチーズとトマトのサラダ、ムール貝とほうれん草のムニエル、メインにズワイガニの Pasta・オニオンソース仕立てと春野菜のソテー添えが出されていた。

そしてこのメニューには不自然な組み合わせの、わかめと大根の味噌汁。

どれもこれも、美空が好きなものだった。

「龍——」

いつも自分の我侭で苦勞ばかりかけてきた。たった二人きりの姉弟だから、仕方なしに構ってくれていたんだと思っていたけれど。

「何ですか。貴女のような我侭なお客様にとって、当店で一番美味しい料理を出したと自負しておりますが？」

言葉は丁寧だけれど、どこかぶっきらぼうに言う。

美空は溢れる涙を抑えようとせず、ぽろぽろと零しながら微笑んだ。

「ええ、最高のお料理ね——」

ありがとう……と言った彼女は、妖艶さはどこにもなく、ただ、幼い子供のように純粹に笑っていた。

「斗真、今日はありがとな」

「…んー？何が？」

蓮の部屋のベッドでごろんと寝転がっていると、シャワーを浴びてきた蓮がこつんと額をあててきた。

濡れたままの前髪が冷たくて、ぴくりと反応する。

「崎さんと美空さん…あの2人、昔から上手くいつてなかったんだ。それに俺自身もずっと会っていなかったから、あの人とどう接していいか分からなかったしな」

「…そうなの？」

逆さの状態でおでこにちゅっとキスをされる。

蓮のさらさらの髪からは、シャンプーの良い匂いがした。

「そう…お前が、みんなの蟠わたかまりを失くしたんだ」
「んっ」

囁きながら唇にキス。

熱い吐息と、甘くとろけそうなほど優しい声。

「俺がお前無しでは生きられないように…お前も俺無しでいられないようにしてやりたい」

「あっ」

頬を包み込む大きな手。

間近で見る彼の整った顔。

漆黒の瞳からは、自分を望む熱を帯びていた。

もっと触って——

斗真は両手を伸ばして蓮の輪郭をなぞり、今度は自分からキスをした。

もっと…触りたい。

蓮の熱に中^あてられて、斗真は浮かされるように呟いた。

「蓮——もっと、して」

第十九話（前書き）

性描写アリです！

苦手な方はご注意ください！！

第十九話

肌を伝う手の感触が、熱くてもどかしくて、愛おしい。

全身を見られてすべてを暴かれる恥ずかしさ。

身体は彼を求めてやまないのに、羞恥心がそれを阻む。

もっと、もっと、彼を感じたい。

不安な気持ちも、どうにもならない恋心も、全部を飲み込んで――

「れ……んっ……ふぁ……あっ！あぁっ、んんっ……そこ……だめえっ」

「どうしてだ？……斗真のココ、俺のを美味しそうに食べてるぜ……？」

「やぁっ……あ！……そ……んなことっ、言わないで……っ」

「ほら………もっと……俺を味わえ」

隙間無く埋め尽くされた斗真の中を、これでもかというほど押し寄せてくる。

浅く……深く……強弱をつけて繰り返される快感の波。

決して頂には上らせてくれない、残酷なほど優しい愛撫。

蓮とひとつになる時、いつも斗真は泣きたくなるほど苦しく彼を想う。

二人で生まれたままの姿になって、自分の一番恥ずかしいところを晒して。

（こんなこと……蓮じゃなきゃ、出来ないよ…っ）

繋がっている部分が熱い。

灼熱の杭を穿たれている痛みと、喜び。

イキたいのにイケナイもどかしさ。

蓮は、斗真が乱れきって懇願するまで攻める指先を休めてはくれない。

一定のリズムで繰り返される律動と快感。

それを煽るように、厭らしく先走りを零す斗真のそれを律動に合わせて扱う。

「ああっ…ん、んく…、やつ…も……めっ…」

「可愛い…斗真……」

どこを触れられても気持ち良くて、身体全部が性感帯になってしまったみたいに感じてしまう。

耳元に吹きかけられる吐息さえも、斗真の身体を甘く震わせた。

ぴちゃ……くちゅ……と厭らしい水音が聞こえてくる。

恥ずかしさに瞳を背けるけれど、顎を掴まれて強引に顔を向かせられ許してはくれない。

わざとその音を聞かせるように、蓮はぐちゅ…ぐちゅ…と音を立たせた。

「斗真……っ、イイ？」

ふっ…と熱い吐息を零して、欲情に濡れた瞳で誘うように囁く。耳たぶを甘く咬まれて、首筋に所有の印を残す。

「ひゃっ……あっ……んふっ……」

「言わないと……ずっとこのままだぜ？」

「んう……はっ……」

キツク唇を重ねて、口腔を犯してくる。

舌が侵入し、斗真のそれを蹂躪する。

痺れるくらいに激しく舌を吸われて、口の端から唾液が零れた。

呼吸も、甘い嬌声も、何もかも奪う尽くすような口付けだった。

ジン…と濡れた唇が甘い疼きを覚え、胸の高鳴りが増した。

「…っ、今……斗真のナカ……キュッて締まったぜ…」

「やつ…し、らない……もんっ……ああっ!」

「こんなに物欲しそうにして…」

ぐるりと腰をグラインドさせてさらに斗真を攻め立てる。

頭が真っ白になりそうなほど強い快感が身体中を駆け巡り、蓮の背中に回した腕に力が入った。

「俺を…甘く誘ってくる…」

「んやぁ…、れ…んっ」

ぎゅっと蓮を抱き寄せて、与えられる快感に酔わせられる。

高みへと上り詰められない苦しさをどうにかして欲しい。

焦らされすぎた身体は、小さな刺激にも酷く敏感に反応した。

あられもない嬌声を止めることなど出来なかった。

「…もう、イキたい?」

「ふっ……んんっ…」

コクコクと頷き返して早くして…と視線で訴えたが、蓮は漆黒の瞳を少し細めてニヤリと笑う。

「じゃあ…『俺にイカせて欲しい』って…言って?」

「…っ!」

「斗真の可愛い声で…俺を…誘ってくれ……」

低く…甘い声が、誘うように囁く。

斗真は砂糖菓子のような媚薬を飲まれたみたいに、意識が朦朧としてくる。

もう、理性などほとんど残ってなどいなかった。

熱に浮かされたようなとろんとした瞳で、ねだるように小さく呟く。

「蓮…ので、今すぐ……イカせて……っ…ああっ!」

「好きだよ……斗真」

さっきまでの意地悪な様子はまったくなく、荒々しいほどに斗真の身体を貪ってくる。

送り込まれる律動は激しさを増し、一気に高みへと駆け上がった。

「あっ、ああっ……んっ…はっ……あああ!」

「斗真……とう…ま…、俺だけを見てろ。お前は…俺だけを……愛せばいい」

「ふああっ…れ、んっ…蓮…き…だよっ、あ！ああっ…んくっ」

「…っ！」

「やああああっっ」

全身に強い快感の電流が駆け巡り、中に熱い奔流が注ぎ込まれるのを感じ、共に達したことを知った。

「れ、ん…すき…」

斗真はそれだけ言うと、激しい行為から強い疲労が押し寄せてパタリと意識を失った。

「斗真………！」

自分に身を委ねて気を失う斗真を強く抱きしめて、抑えきれない愛おしさが蓮を蝕む。

汗に濡れた髪を優しく掬うと、額に軽く口付ける。

「お前が大事過ぎて……どうにかなりそうだ………」

確かに手に入れたはずなのに…押し寄せる不安と焦燥感を誤魔化しなくて、もう一度キスをした。

第十九話（後書き）

第二十話（前書き）

若干性描写アリです！

苦手な方はご注意ください！！

第二十話

こんなにも、傍にいるのに。

俺の腕の中で眠る斗真の頭を優しく撫で、繋がったままの身体を抱きしめて口付けを落とした。

誰よりも大切にしたいのに、酷く滅茶苦茶にしてやりたい衝動に駆られる。

心を蝕むようにどす黒い感情が蠢うごめいていた。

口付けた髪から香る、いっいつもとは違う匂い。

斗真がいつも使っている絞りたてのレモンのような爽やかな香りではなく……男っぽいムスクの香りがした。

いっいつたい、何処で。

抱いている間もずっとそれが気になって、いつもより酷く苛めてしまった。

もっと優しくしてやりたいのに、嫉妬するあまり欲望の赴くままに攻め立てた。

俺じゃない他の誰かと一緒にいたんじゃないか。

それも、髪に匂いに移るほど近くに。

そう考えただけで腸はらわたが煮えくり返えそうになった。

どうして。
誰といたんだ。

問い詰めてやりたい気持ちと、知りたくない気持ちがせめぎ合う。

「こんな気持ち……お前には知られたくない……」

斗真を愛するあまり、見境なく抱いてしまいそうだった。

いつそのこと、俺以外を知る前に壊してしまおうか……

誰の目にも触れないようにして。

自分以外、何も考えさせないように閉じ込めて――

それを実行してしまいそうな己に苦笑する。

そんなことをしてしまったら、斗真の笑顔を失ってしまうかもしれないのに。

好きで、愛しくて、どうしてもないほど欲してやまない。

自分でも持て余してしまうこの感情。

ドクリと湧き上がる欲望の渦に、今にも飲み込まれてしまいそうだった。

暴れだしそんな感情を押さえ込むように、抱きしめた腕に力を込めた。

「ん……」

苦しそうに声を洩らして、ぼんやりと斗真が目覚めます。
朱に染まったままの素肌と、無垢な表情が俺の欲情を誘った。

「れ……ん……?」

薄っすらと瞳を開けて、眠たそうに瞼を擦る。

俺の顔を確認すると、甘えるように腕を首に巻きつけてきた。
顔をすり寄せて抱きしめてくる様子があまりにも可愛くて、俺の欲望がもう一度熱を持つ。

「斗真……もう一回」

「ふえ……っ!？」

寝ぼけたままの斗真の唇を奪って、埋め込まれたままの欲望を揺り動かす。

一度達した身体は酷く敏感で、僅かな刺激にもすぐに反応を返した。

「あ……っ、れ……んっ……」

ビクンと震える身体を抱きしめて、今度は乞われるままに愛撫を重ねる。

「斗真……好きだ……お前だけを……」

「あっ……んんっ……れ、んっ……」

甘い媚薬のような斗真の嬌声が、俺の心を縛り付けてやまない。
もっともっと聞いていたくて、斗真が気絶するまで啼かせ続けた。

「俺以外を見るのは…許さない」

「ふっ…んくっ…」

「俺だけを見て…俺だけを感じて…俺だけに、愛されている」

「蓮っ…れん…っ、…きっ……やぁっ……あぁっ」

熱く上昇していく体温とねだるような甘い声が、黒く澱んだ心を癒
していった。

抱いても抱いても満たされない。

餓えた獣のように、幾度肌を重ねても渴きを潤せないでいた。

あいつを抱けば抱くほど、その甘美な至福に溺れていく。

逃れられない楔くさびのように、甘く…優しく…身体中を浸蝕されている。

心はとうに奪われていて、どうしようもない。

もっと…もっと…

終わりを知らない黒い感情が、俺を蝕んでいた。

人は、欲深い生き物だとはよく言ったものだ。

あいつをもつと知りたかった。
あいつに知って欲しいと思った。

あいつの傍にいたいと思った。
あいつに触れてみたいと思った。

そして。

あいつの――すべてが欲しいと、願った。

「斗真――」

どれだけ手に入れても、どれだけ奪っても満たされない。
一分一秒たりとも離れているのが狂おしい。

斗真を知れば知るほど好きになっていく。
時を重ねれば重ねるほど、愛しさが増していく。

どこまで好きになれば、終わりはくるのか。

どれだけ愛せば、満たされるのだろうか。

「くっ……きつと、死ぬまでないだろうな」

俺は自嘲気味に零した。

あいつの傍にいられる限り、ずっとあいつを愛していく。

もし離れることになったら——この手に掛けてでもあいつの傍に
いるだろう。

もう…斗真の存在無しで生きられるほど、俺は強くはなかった。
絶望に打ちひしがれて暗闇で生きるくらいなら、俺は死を選ぶ。

ドロドロに身体中を這いずり回る醜^{みにく}い感情は、最早止めようもな
かった。

こんな穢れた俺に愛されてしまった斗真は、可哀相なほど不幸な
だと思う。

何も知らない無垢なあいつは、まるで悪魔に差し出される生贄の
う。

穢されてもお真っ白なままの斗真が、俺には酷く眩しかった。

「どうしたら……お前を手に入れられるのかな——」

心も身体も、その存在すべてを。

愛しているから。

だからこそ、己の気持ちを封じ込めるように拳を強く握り締めた。

第二十一話

最近、蓮の様子がおかしい。

いつも鈍感だ、ニブチンだと悠に言われてまくっている僕でさえ明らかにおかしいと思えるほど、彼の態度がどこか余所余所しいのだ。表面上はいつもどおりに優しくて、僕を気遣ってばかりいる。講義の途中で当たりそうになると居眠りしている僕を起こしてくれるし、たまにお昼のお弁当を作ってきてくれたりおやつをくれたりする。

だけどそれは…何かを誤魔化そうとしているように思えるのだ。

僕が何かあったの？って聞いても、『何でもない』と困ったように笑って教えてくれないし、何だか少し疲れたような表情をしていることが多くなった。

それに…あの日から僕にまったく触れようとしてこない。

少しでも僕に触れそうになると、拒絶するように離れていくのだ。その時の蓮がもの凄く辛そうな顔をして『ごめん』と呟くので、僕は何も言えなかった。

2人きりでいるのもあの夜の公園での僅かな時間だけ。

蓮が部屋に来ることも、蓮の部屋へ行こうとすることもやんわりと断られる。

ただ、誰^は憚ることなく蓮と一緒にいたただけなのに。

いつも優しく撫でてくれる大きな手も…熱く抱きしめてくれる体温

も、今はとても遠い。

触れられそうなほど近くににいるのに、触れられない。

傍ににいるのに……

心が、見えなかった。

蓮……

どうしてあの時、嘘をついてしまったんだろう？

僕が正直に答えていたら、こんなことにはなっていなかったのだろうか。

こんな……

普通の友人みたいな関係、に。

あの日……

今から2週間ほど前、蓮のお母さんの美空さんが日本へ来たときのことだ。

美空さんは世界的なヴァイオリニストで、いつも世界中を飛び回っている。

その多忙さ故に、幼い蓮を弟の龍一さん…オーナーの崎さんに預けて出て行ってしまったと言っていた。

今はオーストリアに住んでいて、仕事がだいぶ落ち着いたので蓮に会いにきたんだと笑っていた。

あとから聞いた話だと、そのまま蓮を連れて行くつもりだったらしい。

だけど蓮はそれを断り、僕の傍にいてくれた。

そしてその晩は、我を忘れるほど激しく抱き合った。

何度も何度も求められて最後のほうはよく覚えてはいなかったけれど、それだけ僕を必要としているんだと思えて嬉しくなった。

蓮を失わずに済んで良かったと、心の底から思えた夜だった。

そう。

僕はあるうことか、蓮のお母さん…美空さんと、何か特別な関係なんじゃないかと不安になっていたんだ。

それは強^{あなが}ち間違っ^{あなが}てはいなかったけれど、酷く恥ずかしい思いをしたのを覚えている。

『一昨日の夜…どこかに出かけたのか?』

お互いに求め合った次の日、蓮がどこか落ちつかない様子で僕に問うた。

後から知ったことだけど、そのコンサートには美空さんが出演していたんだ。

だからオーナーもいたのかと今更になってから納得していた。

『悠と…コンサートに、行ったよ』

『その後は…?』

『そのあと……?』

『どこか、寄り道しなかったのか?』

蓮は何かを探るように聞いてくる。

けれど、その時の僕はそれどころじゃなかった。

その後は……

夜桜がとても綺麗で、イルミネーションと夜店を楽しんでいた。

そして…

蓮と…美空さんを見て勘違いして、混乱して…逃げ出した。

そこを隼人先輩に保護されてそのまま泊まってしまったけれど、それを蓮に言う勇氣はなかった。

言ってしまうば、僕が蓮のことを疑っていたんだと思われるのが怖かったから。

『どこか…あ、コンサート会場の近くにあった夜店で夕飯を食べてから帰ったよ？それくらい、かな』

『…そうか』

僕はぎこちなく誤魔化してしまった。

それを蓮は………不審に思ったのかも知れなかった。

『変なこと聞いて悪かったな。何か甘いものでも作ってやるよ』

どこか苦しい表情を一瞬だけしてそれだけ言うと…もう、今のような状態だった。

「こんなの…どうすればいいんだよ…っ」

知れず嗚咽が零れる。

朝。

部屋の中で蹲^{ひづくま}ったままでも、彼は来ない。

以前は優しくキスをして起こしてくれたのに。

低くて甘い…心地の良い声を聞くのが好きだった。

柔らかく頭を撫でてくる大きな手が気持ちよくて、僕は何度もその手に甘えていた。

ずっと夢なんだと思っていたのに、本当は朝早くから僕の部屋に来

てくれていて。

悪いと思っただけ。『お前の寝顔が可愛いから、勝手に見に行っただけだ』って照れたように笑ってくれたから。

その顔を見て…ぎゅっと心臓を掴まれたみたいに胸が高鳴った。

気が付いたら、もうどうしようもなく蓮が好きになっていた。

「蓮…っ」

傍にいて。

いつもみたいに笑って。

そんな無理した顔をしないで。

僕が悪かったのなら、謝るから。

全部——無かったことにしないで。

もう、友達になんて……戻れるはずがなかった。

「よーしっ、お前らっつ、気合入れて暴れまくれやっつっ!!」

「おおっっっ!!」

四月。

ライ部は新たな部員とともに新しい年度を迎えていた。

斗真は後期の終わり頃、休みが重なってしまったがために単位が危うかったのだが、教授や各講師にお願いしまくってレポートを仕上げることでなんとか留年を免れた。

その課題に追われていて、気が付いたら春休みなんてなくなっていたのだ。

学生の本分は勉強なのだとしみじみ実感する。
いったいなんの為に大学に進んだのやら。

斗真は実家が事業をやっていることもあって、何となく経済学部へと進んだ。

悠は家業を継ぐのだとかで同じく経済学部。

同じ家絡みでも、悠のほうがよっぽどしっかりしている。

蓮はオーナーのお店を手伝う為に経営学部在籍で、しかも首席だ。

バイトもして勉強も出来るなんて、どっとう頭してるのかと常々不思議に思う。

隼人先輩は法学部、響先輩は芸術学部だ。

響先輩は音楽好きだから芸術学部っていうのはわかるのだが、いかつい隼人先輩が法学部…それも、司法試験を受けるというのだから驚きだ。

弁護士ってイメージじゃないんだもん。

どっちかっていうと…体育の先生とかやってそう。

それで、悪ガキとかにワラワラ好かれちゃって『アニキー』とか呼ばれたりして。

あ、今でもそうか。

「なあにニヤニヤしてるの？ 気持ち悪いなあ。春だからって、頭ん中まで常春とこはるになっちゃったんじゃない？」

うりゃつと悠に頭を突かれる。

「むう、違うよつ、ちよつと考え事してただけだよ」

この春でもう3年。今年の冬には就職活動が始まって、もうのんびりしている時間は残り少ないのだ。

中庭の壇上で盛り上がっている響先輩と、その隣で見守っている隼人先輩はもうすでに内定を取っていた。

響先輩は大手音楽会社へ、隼人先輩は大御所や大手企業を相手にする有名法律事務所に入社が決まっている。

「なんだかちょっと、周りに置いてかれていくような気がしてさ」
「ああ、あの2人？もう今年で卒業だもんね」

「先輩たちもそうだけど、それだけじゃなくってさ。進級して、焦っているのかもしれない」

周りはどうどん変わっていくのに、独りだけ取り残されてしまったような感覚。

いつまでも心地よいぬるま湯に浸っていたいと思っていたら、周囲には誰も居なかった。

そんな…感覚。

毎日のように顔を合わすけれど、もうあの頃の顔はどこにも無かった。

いつの間にかそれが日常化していて、周囲はその違和感に気が付かない。

それは、当事者にしかわからない…微妙な距離感。

悠でさえ、そのことに気が付くことはなかった。

「何で斗真が焦るのさ？無事に進級出来たじゃん」

えらいえらい、と頭を撫でてくるけれど、一番欲しいそれではなかった。

斗真は苦笑して、何度目か知れない…気が付くのが遅すぎる自分の過ちを後悔していた。

「それも、そうだね」

そう悠に頷いて、誰にも気づかれないように無理やり笑顔を作って笑った。

「斗真。ちよつといいか？」
「はい？」

壇上の響とその他の部員が盛り上がっている中、いつの間に降りてきたのか隼人に声を掛けられた。
斗真は不思議に思って首を傾げるが、悠と他愛も無い話しかしていなかったたので首肯する。

「ええ、大丈夫ですよ。悠…ちよつとごめんね」
「うん、わかった…けど」
「けど？」

ちよいちよいと手を拱こまねいて、顔を寄せる。
なあに？と訊ねると、いつしか言われたことのある言葉が飛んできた。

「いーい？隼人先輩には…」
「甘えない、抱きつかない、寝ばけない…でしょ？」
「わかってんじゃん。あと、くつつかない！」
「はいはい、りょーかいしましたっ」

んじゃ、また後でね…とそれだけ言うと、隼人のほうへと駆け寄っていった。

「先輩、お待たせしました。何か用ですか？」

「ああ。ちよつとな。ただ…ココで話すのも何だから、向こうまで付き合ってくれないか？」

「はい。別に構わないですけど…」

確かに中庭は煩く騒いでいて、話するには相応しくなかったので同意する。

てくてくと隼人に付いて行くと、普段から人気の少ない学生棟の裏まで連れてこられた。

今日は始業式だけなので、人通りはなくとても静かだった。

斗真自身もあまり通ったことがないので、物珍しそうにキョロキョロと周辺を見渡す。

「わぷっ」

「おっと、大丈夫か？」

隼人が立ち止まったことに気が付かなかった斗真は、そのまま隼人に抱きとめられる形でぶつかってしまった。

「すみません…」

「まったく…どうしてお前は——」

あ、このセリフ。

何度か聞いたことがあるけれど、続きを一度も聞いたことがなかった。

困ったように笑っている隼人先輩。

自分の間抜けぶりに、呆れてしまったのだろうか。

申し訳な気な顔を見ると、隼人はくしゃりと斗真の頭を撫でた。

「——そういえば、お前に一度も言ったことが無かったな」
「…？」

隼人は撫でた手のひらを斗真の頬に添えると、屈むようにして顔を覗き込んできた。

「どうしてお前は——そんなに、可愛いんだ？」

吐息が唇に掛かりそうなほど近くで囁かれる。

斗真は言われたことの意味が理解出来なくて、大きく瞳を開かせるばかりだった。

切なげな瞳で見つめられて、硬直したように目を離せなかった。

熱い——…熱い、視線。

どこかで見たことのある、熱。

何度も隼人に対して抱いていた、既視感。デジャヴ

そう……確かに見たことが、あったんだ。

（蓮——…！！）

自分に向けられる眼差しが、ほんのひと月前の蓮のそれとまったく同じだったのだから。

隼人は両手で斗真の顔を優しく包むと、ゆっくりと顔を近づけて呟いた。

「お前が——好きだよ……もうずっと、前から……」

愛おしげに頬を撫でると、唇を塞がれていた——……

第二十二話

何が起こっているのかわからない。

呆然としたまま瞳を大きく開かせることしか出来なかった。

「んくっ……やつ、やだ…っ」

自分がキスされているんだということをようやく頭が認識すると、隼人の胸を押しつけて逃れようとした。

こんなのやだっ…

特に拘束されていたわけではなかったのに、金縛りにでもあったように身体の自由が利かない。

隼人はただ、そっと斗真に触れていた手を離れた。

「なっ…なんで…」

何かなんだか分らない。

いや…分かりたく、なかった。

「俺は…お前が好きだ。だから、キスした」

唇をなぞるように親指の腹で斗真のそれを撫でる。

触れた先からピリツとした痛みが走った。

「や…やだな、先輩。僕は男だし、可愛くもなければ悠みたいに綺麗でもないし、先輩みたいに頭が良いわけでもないし、響先輩みたいに特にこれといった才能もないし。そんなわけ…あるわけないじ

やないですか」

ははは…と乾いた笑いが零れる。
今すぐこの場から逃げ出したい。
こんなこと…信じたくない。

「また僕をからかおうって言っんですか？もうやめてくださいよ、
心臓に悪いです」

隼人の瞳は、じっと斗真を見つめたまま。
何もかも、力ずくで奪われてしまいそうなほど…
…^{じつぱん}寧猛で、熱い視線。

見返してしまつたら、何かが壊れてしまいそうな予感がした。

「あーびっくりした。は…悠…が待ってるし、僕はもう行きますね」

必死に何でもないような素振りをして、俯いたまま隼人の顔を見ずに中庭へと戻ろうとしたけれど、力強く腕を掴まれてしまった。

「…っ！」

「行かせない」

隼人は低く唸ると、そのまま腕の中に閉じ込めた。

絡めとるように斗真の身体を抱き寄せ、苦しくはないけれど決して許してはくれない束縛。

耳元に唇を寄せられると、低い声と…ムスクの香りがした。

「やだっ……せんぱいつ、離して…っ！」

抗^{あらが}うけれど、隼人は力を緩めてはくれない。
むしろ逃すまいとグツと抱きすくめられた。

（こんなのやだっ……れんっ…蓮っ）

斗真は涙目になりながら愛しい人の名を必死で呼ぶ。

激しい嫌悪感。

相手が蓮でないというだけで、どうしてこれほどまでに嫌なのだろうか。

蓮が好き。

抱きしめて欲しいのは蓮にだけ。

キスして欲しいと思うのも、ずっと傍にいて欲しいと願うのも。

抱き合う痛みも恥ずかしさも——蓮だから、耐えられるのに。

「そんなにあいつのほうがいいのか…？お前を放っているような、
甲斐性の無いやつなのに」

「そんなことない…っ、蓮はいつも…」

優しくしてくれてるもん…っ

最近のは疲れた顔をして、なかなか甘えられないけれど…それでも彼

が自分に優しいことに変わりは無かった。

隼人の腕の中でもがき、抜け出そうとするが逃げ出せない。
抵抗すればするほど…隼人の弑逆心しいぎやくしんを誘っていることに、斗真は気が付かなかった。

涙で大きな瞳が潤み、頬を紅潮させて暴れるけれど、隼人にとっては弱弱しく嫌がっている程度にしか見えなかった。

むしろ、そのあどけない表情が隼人のココロを煽ってくる。

ひどく甘えさせて可愛がってやりたい気持ちと……泣き出すまで奇め抜いてやりたい衝動が隼人を襲った。

「先輩は響先輩が好きなんじゃないんですかっ！？なんでっ……どうして僕なんかを…っ」

お願いだから離して…っ

ホントにほんとに嫌なのに…っ

斗真に上目遣いに睨まれて、隼人は目尻から零れ落ちそうな雫を指で拭った。

濡れた指先をぺろりと舐めると、もう片方の目元に口付けを落とす。拘束する腕の力は容赦が無いのに、触れてくる仕種はとても優しいかった。

「響…？ああ、周りが勝手に言っているだけだ。俺はなんとも思っちゃいねえよ。あいつには他に恋人がいるしな。……けど、そんなことはどうだっていい。それよりも」

長い指先で頬を撫でる。

仕種は優しいのに、痛みを感じそうなほど鋭い視線で射抜かれた。

「お前……ずっと、無理して笑ってるだろ」

「……っ」

「それも……お前が俺の家に泊まった、あの日から」

しまった——…と心底思った。

隼人は……その後のことを、知らない。

「なあ……俺を選べよ」

「え？」

唐突に、隼人が選択肢を突きつける。

言い方はどこか存在ぞんざいなのに、拒否権など最初から無い様な声色だった。

「あいつなんかよりも、ずっと大切にしてやる。お前が寂しいときは傍にいてやるし、不安なときは一晩中抱きしめてやるよ」

「……っ」

覗き込むように見つめられて首筋を撫でられると、ぴくりと肩を震わせた。

斗真は魅入られたように抵抗するのも忘れて、穴が開きそうなほど隼人を見つめる。

鋭い眼差しを持った、涼しげな紅茶色の瞳。

スツと伸びた鼻梁。

男らしい凛々しい眉。

低く響く声。

蓮とは違う…男らしさを持った隼人は、とても整った顔立ちをしていた。

「斗真——…」

耳朶に唇を寄せられ、熱い吐息が掛かる。

ぞくりとするほどセクシーな声で、甘く……斗真を誘惑してくる。

「俺のためだけに……笑ってくれ」

「あ…っ」

首筋から頂^{うね}にかけてゆるゆると口付けを這わし、回された腕に熱^{あつ}が籠^{こも}った。

震える身体を叱咤して逃れようとするけれど、余計に隼人の胸にぴたりと寄り添う体勢になってしまった。

「…も…やだあ…っ、せんぱい…っ離して……っ！」

それでも腕^{うで}の中から出して欲しかった。

蓮以外の誰にも触れて欲しくない。

身体^{からだ}のどこも、ココロも…全部。

自分の心も、身体も——すべては、疾^とうに彼のものなのだから。

「…んっ、蓮…っ！」

蓮じゃなきゃ嫌だ。

彼じゃなくちゃ、何の意味も無い。

蓮だから、安心出来る。

蓮だから、不安にもなる。

蓮だから——自分はここまで来れたんだ。

「せ…んぱいじゃ、ダメなんです…っ。僕は蓮が傍にいないと…
笑えない…っ」

だから離してください……そういつと、ようやく隼人は斗真を解放した。

それからすぐに隼人との距離を取って、呼吸を落ち着かせる。
零れ落ちそうな嗚咽を何とか噛み締めて平常心を取り戻そうとしたけれど、上手くはいかなかった。

（心臓が、バクバク言ってる……………）

煩いくらいに騒がしい鼓動を宥めようとするけれど、恐怖心と緊張感に包まれたままのココロは言うことを聞いてはくれない。

（恐怖……？僕は…、隼人先輩が…こわ、い？）

掴まれた腕がジンジンして少し痛かった。

力強く回された腕はびくともしなくて、全然歯が立たなかった。

同じ男なのに、まったく違う。

完成された——大人のオトコ、だった。

「そんな表情^{かお}をさせたかったわけじゃねえ…」

独白するようにポツリと呟く。

隼人は小さく苦笑すると、手のひらを上に向けてぶらぶらさせて腕を開いた。

「もう……何もしねえから、そんな顔すんなよ」

な…、と哀しげに言う隼人は、いつものそれとは違って弱々しかった。

「あいつが…お前を好きだと知った時から諦めたつもりだった。けど、お前がそんなにも無理した顔ばつかするから…つい、箍^{たが}が外れちまったんだ」

一瞬だけ悔しそうに顔を歪めると、すぐにいつもの表情に戻った。

斗真は零れ落ちた涙を拭って、隼人を見つめる。

「悪かったな」

さつきまでの『オトコ』の顔は何処にも無くて、見慣れた先輩の顔をした隼人にほっとした。

けれどすぐにもう一度、鋭い視線で見つめ返される。

「けど、いつまでもそんな顔してると…次は本気で奪いに行くからな？」

「…っ！」

大きく瞳を瞬かせ、背中^{まはた}にゾクリとしたものが走る。

隼人はじゃあな、と意地悪気に笑うと中庭のほうへと戻っていった。

「も……何なんだよお…っ」

プツンと糸が切れたみたいにその場にしゃがみ込む。

隼人がいなくなっただけでほっとしたのか、堤が崩壊したみたいに止め処なく涙が零れた。

突然の告白。

力強い抱擁。

そして――

「キス……蓮としか、したことなかったのに…っ」

奪われてしまったことを悔いても仕方ないが、それでも易々とされてしまった己の愚かさを呪う。

（蓮とだって…ずっとしてないのに…っ）

ゴシゴシと唇を何度も擦るけれど、触れた感触までは拭えなかった。

「蓮のばか…っ」

元はと言えば、蓮が悪いのだ。

ここのことろずっと忙しそうにしているし、ちっとも触れてくれない。

キスだって…… 1ヶ月近くしていない。

だから不安になって、寂しくなって…隼人に、気づかれた。

「隼人先輩のばか…っ、全然そんな素振りなんかしてなかったくせに…っ」

いつだって悠とセットで意地悪ばっかしてたのに、突然好きだなんて言われても困る。

斗真が蓮と付き合ってたって知った時だって、面白がって蓮をからかってたくらいなのだ。

「蓮……」

傍にいて。

今すぐ抱きしめて。

たくさんキスをして——この感触を忘れさせて欲しい。

蓮じゃなくちゃ、何の意味もないんだから……

「僕を自分のものにしたんなら、それくらいしろよ……っ」

膝を抱えて蹲^{うすくま}った斗真は、この場にはいない恋人に毒づいていた——

第二十二話（後書き）

いつも読んでくださっている方、本当にありがとうございます！！
一言でも構いませんので、評価・感想がありましたらお願いいたします！！

第二十三話

好きって気持ちだけなのに、どうしてこんなに上手くないんだ
ろう——

互いの気持ちを確認め合って、結ばれたら…それでハッピーエンド
なんだと思っていた。

恋人同士には平穩と幸せだけが存在して、ずっと笑っているものな
のだと頑^{かたく}なに信じてた。

相手が好きになってくれて、自分も心から好きになれたら…それだ
けで、奇跡みたいなものだから。

1億人の中からたくさんの人と出逢って…誰かを好きになる。
でもそれは、必ずしも実るわけじゃない。

むしろ、散っていくことのほうが多いのかもしれない。

自分が今まで、出逢ってきた人たちの手を離してきたように…

けれど互いに手を取り合ったのに離れてしまいかもしれないことな
るんて——考えてもみなかったんだ。

好きだと、言ってくれた。

愛していると…囁いてくれた。

そのことだけは真実で、疑いようもないと信じているのに。

どうして――

こんなにも、苦しいのだろう……？

最初の1歩を踏み出したら…知らなかった世界を知った。
努力することの難しさを身に沁みて感じた。

それでも進みたいと…願ったんだ。

傍にいただけじゃ満足出来ない。

もっと一番近くで感じていたい。

僅かな隙間さえも、狂おしかった。

自分の中に湧き起こる…黒い気持ち。

生まれて初めて、独占欲という感情を知ったのだった。

手を伸ばせば届きそうなほど、すぐ近くに彼の顔があった。
ふわりと風に撫でられるように柔らかく斗真の髪を梳すいている。
薄く瞼を開けて見上げると、そつとその手が離れていった。

行かないで。

ほんの少しの体温さえも、離れて欲しくなかった。

「やだ…」

小さく呟くと、ぴくりと震えてその手が止まった。
彼の瞳を見つめて斗真は両腕を伸ばす。

「そばに…いて」

甘えるように彼の首に腕を巻きつけると、肩口に顔を埋めた。

懐かしい—— …甘い、彼の匂い。

（あったかい…）

久しぶりに感じる彼の体温。

ずっとココロに穴が開いていた部分が、ゆっくりと埋まっていくような安心感が感じられた。

「寂しかった」

零れるような吐息に混せて、そつと囁いた。
ずっとずっと、彼に直接言いたかった。

言いたくても言えなかった、自分の気持ち。

「自分のものにしたくせに離すなんて…ひどいよ」

こんなに好きにさせておいてから、友達に戻ろうなんて都合が良すぎだよ。

もう…これ以上彼がいない生活になんて耐えられない。

優しく触れてくる指先も、甘く囁いてくれる低い声も——熱い
…体温も。

こうやって手を伸ばせば届くところにあつたのに、許されなかった
ひと月。

けれど今は、自分の腕の中にある。

ようやくあるべき場所にあるべきものを手に入れて、斗真はほっと
息を吐いた。

気が緩んだのか、ぼろりと一滴^{ひとしずく}頬を伝っていくものを感じた。

「ばかつ……んのバカっ」

零れ落ちていくものと一緒に、心の内に溜まっていたものも流れ出
す。

もやもやとした感情も、物足りない寂しさも、ひどく嫌な気持ちに
なつた感触のことも。

吐き出すように止め処なく流れる涙と一緒に喋^{しゃべ}り出した。

「自分だけ見てろって言つたくせに……っ。好きだって……何度も言
つたくせに……っ！」

自然と抱きついた腕に力が入る。

それでも彼は抱きしめてはくれなくて、八つ当たりするように言葉を
を吐く。

「僕は蓮が好きなのに……っ、隼人先輩じゃ、嫌なのに……っ」

ぼろぼろ溢れる雫を止められない。

ぐしゃぐしゃに歪む自分の顔はひどくみつともなかったけれど、そんなことに構っていられる余裕なんてない。

このままなんて嫌だ。

たとえ僕をもう好きじゃなくても……僕は、ずっと――

「蓮がもう好きじゃなくなっただって言われても……蓮じゃなきゃ、意味がな……っ！」

唐突に、力強く抱きしめられてぶつかる様に口付けられる。痛いくらいに腰に腕を回されて荒々しく唇を貪ってくる。

僅かな呼吸すらも許さない激しい口付けに、斗真は頭がクラクラした。

「ごめん」

ぎゅっと強く抱きしめると、絞り出すような声で告げられた。

「謝るから……泣くな」

大きな手のひらで宥めるように優しく頬を撫でた。

目元にキスを落としてそつと雫を吸い取る。

「……ばか」

「ああ……そつだな」

つんと責めるように言うと、自嘲するような声が返ってきた。

蓮は斗真の額に自分のそれをこつんと当てると、贖罪するように呟く。

「お前をこんなに泣かせて……不安にさせた。それなのに——」

くすりと小さく零すと、困ったように笑う。

「こんなにも、嬉しい。お前が俺を求めてくれて……俺のことで泣いてくれて。お前を悲しませるなんて酷いことをしているのに喜ぶなんて——最低だろう？」

愛おしそうに瞳を細めて見つめてくる。

向けられる熱い視線。

ずっと……欲しかったモノ。

つう——つと指の腹で唇をなぞる。

柔らかく触れてくる指先から、チリツとした痛みが走った。

「隼人さんに……奪られるかと思った。お前の髪から——あの人の薫りがした時から」

「……………っ！」

あの時のことだとすぐに分かった。

とっさに嘘を吐いてしまった、あの日のことを。

けれど、髪に香りがついていたなんてことにまるで気がついていなかった。

おそらくお風呂を借りた時に使った、シャンプーの匂いだろう。

「俺はあの人にはどうやっても勝てない。だから驚いたよ、あの人がお前のコトを……。お前に先輩を重ねていたんじゃないくて、お前自身を見ていたなんて思いもしなかったからな。だけどそれでも俺は、

お前を諦めるなんてこと……出来なかった」

ぎゅうつと抱きしめる腕に力が入る。

その腕が微かに震えていることに気がついて、斗真は切なくなつた。

（蓮……蓮も、不安……だったの……？）

自分のことだけで精一杯だったけれど、蓮が疲れた様子だったのは不安からくるものだったのかもしれないことに今更になって気がつく。

恋人が違ふ人間とずっと一緒にいたかもしれないのに、隠されたのだから。

自分が美空のことですうであつたように、蓮もまた……隼人のことで悩まされていたのだ。

「お前に少しでも触れたら……身勝手な独占欲で見境なくお前を抱いて、無理やり問いただしてしまうかもしれないかった。

お前が本当に隼人さんが好きなら離してやるべきなのに……出来そうもなかった。

お前がどんなに嫌がっても、俺を嫌いになつたとしても——お前を離すくらいなら、殺してやりたいとすら思つた」

「……」

ごめんな……と囁く声は普段の蓮からは想像も出来ないほど弱弱しかった。

斗真は蓮を見つめなおすと……今にも泣き出しそうな、瞳をしていた。

（離れるくらいなら、息の根を止めてまで自分のモノにしたいなんて——）

どうしよう。

いろんなものが込み上げてきて、胸がときどきする。

（それって……死ぬまで離さないってことだよな……？）

綺麗な漆黒の瞳。

そこから向けられる——熱い……視線。

自分だけに抱いてくれる、我がままな独占欲。

離さない。

——離せない。

蓮の気持ちが嬉しすぎて、斗真は泣きなくなった。

「元々俺が強引に始めた関係だったんだ。お前が他の誰かを好きになったとしても仕方がないのは最初から分かっていたことなのに……それでも俺は——」

蓮の言葉を遮って、自分から唇を塞いだ。

優しく慰めるような……キス。

「……っ」

「ごめんね、蓮……。全然、気づいてあげられなくて」

さつきとは逆だ。

蓮を苦しめてしまっていたのに——こんなにも、嬉しい。

「隼人先輩とは、何もないよ。あの夜……蓮と美空さんが桜の木の下

で抱き合っているのを見かけて、勘違いして飛び出しちゃったんだ。取り乱した僕を、近くに住んでる先輩がたまたま保護してくれてそのまま泊まっただけ。美空さんがまさか蓮のお母さんだなんて…思いもしなかったから」

僕のほうこそごめんね、ときゅつと抱きつく。

こんなに誰かを好きになるなんて——思いもなかった。

じつと蓮の瞳を見つめて、宣言するように言葉を繋いだ。
自分の想いが…伝わるように。

「僕は蓮が好きだよ。ずっと——ずっと、蓮だけを。」

両手で蓮の頬を包み込むと、神聖な誓いをするように囁く。

「生涯、蓮だけを…愛し続けるって誓うよ」

だから、お願い。

「離れ離れになってしまふことがあったら——ちゃんと、僕を殺してね…蓮」

「斗真——」

自分は今も……こんなにも、奪われてしまったんだ。

気がついたら彼がいなくては生きられなくなってた。

失うくらいなら、その生命を絶たせて欲しい……

互いに誓い合うように、もう一度……口付けを交わした――

第二十四話（前書き）

性描写アリ！

苦手な方はご注意ください！

第二十四話

触れられた箇所が熱く疼く。

服越しに感じる体温がもどかしかった。

激しい飢餓感に苛まれるように、今すぐ素肌を感じたい。
肌を隔^{へだ}たる布1枚が、酷く邪魔なものに思える。

口付けだけじゃ全然足りない。

すれ違った期間を埋め尽くすように……抱き合いたかった。

「俺の部屋……来るか？」

誘うように甘く耳元で囁かれる。

その低い声だけで、ぞくつと身体が震えた。

本当は場所なんて関係なくすぐにでもして欲しかったけれど…

きつと、何度も求めてしまっただろうから——

「うん…僕も——蓮が、欲しい」

斗真は蓮の首筋に顔を埋めて、恥ずかしそうに呟く。

その言葉を聞いた蓮は、激しい衝動に堪えるように抱きしめた腕に力を込めた。

「あ…っ」

「斗真——」

ろくな愛撫もないままに、急かすように二人は身体を繋げた。

引き攣るような痛みが全身に走ったけれど、それでももう…待つことなど出来るはずがなかった。

「は…あっ…ふ…れ…ん…蓮…っ」

「…くっ…斗真…」

後ろから身体を蹂躪してくる熱は荒々しいのに、肌を伝う腕は思いのほか優しい。

下腹部を攻め立てる長い指先はゆるく絡められ、弄ぶように爪の先で軽く引つ搔かれるとビクンと身体が震えた。

「んっ…んあっ…あっ」

背中にきつく口付けられる。

背骨から肩甲骨の辺りを攻められると、くすぐったいような…それでいてむず痒いような感覚が走った。

「ふあ…っ！」

「クス…お前…ココも弱いよな」

ぺろりと耳の後ろを舐められて、舌で中をくすぐられた。

ぴちゃりと濡れた音が直に響いて脳内まで犯されてる気分になってくる。

「あっ…はあ…っ、んんっ…それ…だめ…っ」

「ん…何がだめなんだ？ココか…？それとも…」

意地悪くあちこちに悪戯を仕掛けてくる。

フェイントみたいにグツと激しく腰を打ち付けられて、斗真はただただシーツを握り締めて喘ぐことしか出来なかった。

「ココ…?」

「ひゃ…あつ」

感じる部分を内側からも刺激されて、もう蓮の思うがままだった。どこを触れられても敏感に反応を返してしまう。

餓えた身体は貪欲に彼を求めてもつと奥へと導こうとし、吸い付くように蓮のそれを締め付ける。

「可愛い…斗真」

「んく…っ」

「こんな表情…誰にも見せるな。その瞳も、その声も…このカラダも、全部…俺だけのものだ」

「れ…んっ。蓮…っ」

「コレも…あの人にも触れさせるな」

「え…? いたっ」

ツキンと針で刺されたみたいな痛みが首の付け根の部分に走った。首を捻って窺うと、蓮が執拗にそこばかりに痕跡を残していく。丁寧に舐めとって時折吐息を吹きかけてくる声がヤラしい。

「あの人のモノなんて…お前のどこにも残させてなんかやらない」

首筋に残る、赤いアト。

斗真自身は決して自分で見ることに叶わない場所に、それはあったのだ。

蓮はその場所に唇を重ねて強く口付けていた。

「好きだよ、斗真……」

「ん…っ」

ぴくりと震えるのを止められない。

肩越しに唇を求められて身体を擦ると、熱っぽい瞳にぶつかった。

身体を抱く腕が顎を掴んで離さない。

そのまま舌を差し込まれて口腔に侵入してくる。

「あ…」

歯列をなぞり上顎をくすぐられて蹂躪される。

斗真のそれを慣れた様子で絡めとり、痺れるくらいにきつく吸われた。

ぴりつとした小さな電流が身体を駆け抜け、快感を冗長させる。

唇を離すと端から零れる唾液が糸を引いて、厭らしさをさらに強調させられた。

かあゝつと恥ずかしさを感じて顔を逸らすけれど、掴まれたままの腕がそれを許してはくれない。

「恥ずかしい…?」

くくつと楽しそうな顔で問われるけれど、蓮の顔を直視するほうが恥ずかしかった。

「…やあっ」

黒真珠のような透き通った瞳は、熱をもってこちらを見つめてくる。薄く形の良い唇はキスの余韻で濡れていて、ちゅくつと水音を聞か

せるように耳朵を甘咬みされた。

全身からは強烈な色気を発していて、今にもその雰囲気^{きふき}に流されてしまいうだった。

「もつと…乱れたお前が見たい」

「え……ひゃうっ」

上体を抱き起こされてぐると反転させられる。

繋がった部分がギリギリまで引き抜かれ、前をいじっていた手を一旦離して足を抱えられた。

何がなんだか分からないうちに向かい合うような形に身体を変えられる。

蓮はベッドヘッドの方へ枕をクッションに凭^{もた}れ掛かる体勢になり、そのまま斗真の腰を引き下ろした。

「やあああああっ」

「……ふっ」

入り口付近から一気に最奥へと穿たれて激しい快感の波が斗真を襲う。

自分の身体の重さがその場所へと負荷が掛かり、より繋がりを深くした。

「あっあっ…れ、ん…っ、だめ…っ…こんな…ムリだよあっ」

「…もつと…感じるよ…乱れまくって…俺を煽^{もよほ}ってみろ」

キツイ中を抉^{えぐ}るように探ってくる熱いそれが、速度を増して攻め立てる。

斗真は少しでもラクな体勢を取ろうと蓮の首に腕を巻きつけ、寄り

かかるように抱き寄せた。

さらさらな黒髪が指に触れると、撫でられたような滑らかさで気持ち良かった。

くつきりと浮き出た鎖骨が目飛び込んできて、ふと思いついたように斗真はそこに唇を押し付けてみる。

「ん…っ」

「…っ、斗真…？」

きゅつと軽く吸うと、その部分が薄つすらと色を付けていった。

いつも自分の身体のおちこちに残される、所有の証。

その痕跡を、自分も残してみたかった。

「ふ…可愛いことしてくれる」

蓮は妖艶に微笑うと勢いよく下から突き上げてきた。

グツとさらに体積を増したそれは、隙間なく斗真を攻め立てる。

「うん…っ、も…だめ…っ…れ、ん…んあっ」

「今のはかなりキタぜ…」

互いに限界に近いことを知ると大きく抽挿を繰り返し、深々と最奥を探ってくる。

同時に斗真の欲望を煽る指に力が入り、先走りの蜜が二人の間に零れ落ちていく。

激しい快感に身体中に電流が走ったような感覚がした。

「やあっ、あ、ああ…っ」

「好きだ…斗真」

斗真是我慢しきれず蓮の手の中で達すると、ずっとこれまで以上に強く穿たがれ熱い迸りが叩きつけられるのを感じ取った。

「は…っ、あ…」

蓮の肩に凭れ掛かり呼吸と整えていると、埋め込まれたままの欲望が再び熱を持つのを感じる。

徐々に膨張していくそれを、斗真は思わず締め付けてしまった。

「んあ…まだ…だめ…っ」

妖しく腰を撫でる手。

達したばかりの敏感な身体に触れると、自分の意思とは関係なく身体が震える。

まだ乱れたままの息が苦しくて、斗真は蠢く手を止めようとするが全身が甘く痺れて動けなかった。

「んんっ…蓮…」

「今日は…手加減してやれない」

快感で濡れた瞳をそっと唇で拭くと、低く呻いて斗真の身体を押し倒した。

「…っ!？」

視界が一転して驚く。

目の前には情欲を隠そうともしない蓮の顔。

濡れた唇を舐める仕種がヤラしい。

壮絶なフェロモンに中てられて、斗真自身も身体の奥が熱くなるのを感じていた。

(苦しいけど…でも)

ベッドに押し倒されて、さっきよりは随分体勢がラクになった。
繋がった部分をそのままに両足を抱えられ、軽く腰を揺すられる。
しかし一度達したせいなのかすぐに奪うような様子はなく、先ほどは余裕が無くしているヒマもなかった愛撫を楽しんでいた。

「んうつ…」

執拗に深く舌を差し込まれ、口腔をくすぐられる。
指先で胸の突起を掴まされると、じわじわとその部分が甘く痺れていく。

「…つと——」

「ん…？」

何だ？と赤くなつた飾りを口に含んだまま蓮が問う。

その吐息が肌に掛かつて小さく震えた。

優しい愛撫であるがゆえに、快感に吞まれた身体を苛んでいく。
僅かな刺激すらも…斗真にとっては拷問のようだった。

斗真は蓮の頭をぎゅっと抱きしめると、誘うように囁いた。

「もつと——…して」

今すぐ滅茶苦茶にして欲しい。

もつと激しく奪って欲しい。

恥ずかしさを含んだその声は、蓮の欲望を一気に煽った。

「人が必死でセーブしてやってるのに…」

「ふ…あぁっ」

「もう無理。我慢出来ない…寝かせてなんてやれないからな」

蓮はそう宣言すると、再度荒々しく腰を打ち付けてくる。

その行為は幾度となく繰り返され、斗真は甘い嬌声を啼き続けた。

（蓮が——…好き）

かつてないほど求め続け、本能に従うまま抱き合った。

強制的な意識の限界が訪れるまで——…斗真は蓮をねだっていた。

空も白み、長い夜が終えようとしていたその時。
視界が薄れるギリギリのところでそっと零した。

「れ…んは……ぼ…くのものの、なんだから…ね…——」

忘れちゃだめだよ——と啼かされ続けて掠れた声で斗真は満足そうに囁き、そのまま眠りについたのだった——

最終話

「っということだから。」

「はあっ！？ちよつと最近、僕の扱いヒドくない斗真！？」

昼下がりの午後。

絶好のティータイムに、斗真と悠はいつものカフェテリアでお茶をしていた。

随分前に約束したまま、何だかいろんなことが立て続けに起こって延び延びになってしまったお茶会もとい報告会。

斗真はどこから話すべきか考えるのが面倒になり、とりあえずざっとだけ説明すると、案の定悠に怒られてしまった。

「むう。だってどう言ったらいいのか分かんないんだもん」

「そんな可愛くいつてもダメ。この僕にこんな心配掛けるなんて、そんなこと出来るの、斗真だけなんだからね？」

「…それは悪かったと思ってるよ。ちゃんとしようと思ってるけど、うまく言えないんだもん」

「じゃあ質問を変えよう。とりあえず、北条のことは大丈夫だったんだろう？」

「…うん」

うつかりその後のことを思い出し、斗真は薄っすらと頬を染めてしまった。

隼人と別れた後、蓮が偶然(?)斗真を見つけて二人はそのまま求め合った。

なので何も言わずにいなくなったことになり、結果的にまたも悠に心配を掛けることになってしまったのだ。

「ああ…ご馳走様。」

「ん？もついらないの？」

悠、ココの紅茶好きなのに…と続けるが、はあ〜と盛大なため息を吐かれてしまった。

薫り高く立ち昇る、ルイボスティーの甘酸っぱい匂い。

さらにマリーゴールドがブレンドされていて、薫りの割りに甘くないのが特徴的だ。

悠はティーカップをゆっくりと持ち上げ、その薫りを堪能する。

「やつぱり甘い…」

いつもは癒してくれるひと時なのに、今はなんだか憂鬱だった。

（甘すぎなんだよなあ…この紅茶も、北条も…僕自身もね）

目の前で不思議そうにぼやっとしている顔。

この可愛さにやられて、ついつい甘やかしてしまうのだ。

本人は自分には何もないと言うけれど、人を和ます雰囲気、癒す笑顔は、本当に選ばれたものしか持ち得ない天性のものだ。

斗真のためにも甘やかしてはいけないと思いつつも、ふいにいなくなったたり困ったような顔をされると心配でしようがない。

ずずず…と行儀悪く紅茶をすすする。

斗真は未だ、何か恥ずかしいことでも思い出したのかわたわたしていた。

3段の皿に盛られたティースタンドの2段目にあるスコーンに手を伸ばし、口の中へぱいっと放り込む。

「ああ…なんか平和だ…」

ぽかぽかと暖かい陽射し。

日向ぼっこをしながら美味しい紅茶とお菓子を楽しんでいると、とりあえず斗真が幸せそうならそれでいいかと思った。

「なんか…僕も斗真に感化されてきちゃったのかな」

ま、いいか…と細かいことは気にしないことにする。

何気なくテラスの先に視線をやると、見たくない人物の姿が視界の端に入った。

「げ。」

見なかったフリ、見なかったフリ…と心で念じながら視線を泳がす。店内は人が少なく、穏やかな空気に包まれていた。ゆっくりとお茶を楽しむには持つて来いの雰囲気。

そこに、ただ存在するだけなのに人の目を惹くオーラを持った人物が現れた。

キツチリと着こなされたスーツがとても良く似合う。

本場のイギリスにでも居そうな^{たまたま}佇まいの紳士。

男は悠の姿を見止めると、ゆっくりと微笑んでこちらへとやってきた。

「悠くん。ここにいたのですか」

「…なんでアンタがここにいんだよ」

悠はもの凄く嫌そうな顔をして、そつけなく対応する。
せつかくの和やかな雰囲気^{ふんき}が台無しだ。

しかし男はそんな様子はまったく気にせず、恭しく悠の腕を取った。

「ちよっ…何すんだよっ」

「お店の中では静かにしましょうね、悠くん」

「はっ…！？そういう問題じゃないってば…！」

離せっ、と暴れるけれど微動だにしない。

見た目には優しく腕を取っているようにしか見えないのだが、実際にはかなり強引に掴まれていたのだった。

斗真ほどひ弱ではないと自負している悠は、囚われた腕を奪還すべく抵抗するもまったく敵わず。

きよとんとしたままの斗真に優しく微笑みかけると、男は慇懃^{いんぎん}に言った。

「すみませんが、彼に少し用があるので借りていきますね、斗真くん」

「…？あ、ハイ。わかりましたー」

どうして彼が悠に用があるのか分からなかったけれど、珍しく悠が照れているような表情をしていたので何も言わなかった。

「やめろよっ、崎！」

「今日は約束していただろう？俺との約束を反故^{ほこ}にしようなんて、許さない」

斗真には聞こえないように耳元で優しく言い放つ。

龍一は、そのまま固まってしまった悠をずるずると強引に連れて行った。

「いつてらっしゃーい」

何も知らない斗真は、とりあえず笑顔で手を振って見送った。

「おつ、美味そうなもん食つとるやないかつ」

「響先輩」

悠が龍一に連れられて行ってしまったので、斗真は一人が残ったアフタヌーンティーをのんびりと楽しんでいると、今度は響がやってきた。

いつも持っている大量のお菓子はどこにも見当たらず、物欲しそうにティースタンドを見つめている。

「良かったら食べます？先輩には量が少ないと思いますけど…」

「ええんか！」

ぱあつと嬉しそうに笑うと、ティースタンドの一番下の段のサンドイッチに手を伸ばす。

あつという間にそれはなくなり、2段目へ突入。

いつ見ても欠食児童のようにガツガツ食べる響の姿は、微笑ましく思えた。

「先輩つて…なんかつい餌付けしたくなるタイプですよ」

「はあ！？そりやお前やないか。俺は斗真ほど他力本願じゃないわ」

「ほづ…お前がそれを言うのか」

「げ。御堂^{みどう}…」

響は食べていたスコーンをポロリと手の中から零れ落としてしまった。

御堂と呼ばれた男は黒髪を後ろに軽く流し、品良くスーツを着こなしている。

崎とは違って、どこか近寄り難い…何者にも君臨するような傲慢さが垣間見えた。

長身で細身だが、その下にはしっかりと鍛えられているだろう胸板が窺える。

鋭い眼差しで響を見やると、上に立つ者の口調で冷ややかに言い放った。

「これからは、お前には何も提供する必要はないと思っていいんだな」

「ぎゃーっ、マジそれは勘弁！！ライブにタダで行けないなんて俺の人生終わったも同じや！！」

「なら、予定通りついて来い」

御堂は偉そうに言うと、そのままどこかへ行ってしまう。

響は大急ぎでスコーンを食べ終えて、申し訳なさそうな顔をした。

「すまん…。あいつはライ部にいつもタダチケくれるヤツで、音楽会社の社長とかやつとんねん。悪いヤツじゃないんやけど、ちよつと取っ付き難くてな…。ご機嫌取ってこなあかんから、俺はもう行くわ。バタバタしてほんまごめんな。おおきに！」

「ははは…頑張ってくださいね」

全速力で先に行ってしまった彼を追いかける響が必死で、斗真はちよつと笑ってしまった。

相変わらず台風みたいな人だ。

（もしかして、前に隼人先輩が言ってた響先輩の恋人って…あの人のことかな？）

なんて珍しく的当たりなことを考えてみる。

けれど、まあ所詮は他人事だし…と深く考えるのを止めた。

再び一人になった斗真は、三段目のケーキに手を付ける。

もうそろそろ終わりであろう生の苺。

てっぺんに飾られたそれを摘まんで、ヘタを取ってぱくりと口にする。

甘酸っぱい香りが口の中に広がって美味しい。

もくもくと堪能していると、今度は頭をガシガシ撫でられた。

うう…相変わらずちよつとイタイ…

っていうか、何でもみな音もなく近づけるんだよう。

「もうっ、何ですかっ隼人先輩っっ」

「いや、可愛い頭が見えたらつい弄^{いじ}りたくなるもんだろ」

「知らんですよっ、そんなコトっっ」

うがーっ抵抗するも、隼人は痛くも痒くもない。

まったくもって攻撃が通用しないので、斗真はシカトを決め込んだ。つーんとあからさまにそっぱを向いてケーキをつつく。

「おい、無視すんなよ」

「……」

無視、無視。

ちよつとでも反応しようものなら、隼人を喜ばせるだけだ。

「先輩は哀しいなあ…可愛がってた後輩に連れなくされるなんて。ああ、俺って可哀相」

「……………」

ニヤニヤ笑いながら流し目でこちらを見てくる。

あ、なんか絶対企んでる顔だ。

…いやいや、ここでウツカリ動揺しようものならそれこそ隼人の思うツボだ。

ちゃっかりケーキを狙ってくる手をフォークで応戦し、苺を死守する。

「ダンマリしてると、またキスするぜ」

「…っ!？」

不吉なセリフに驚いて、ビクリと反応してしまった。

隼人は楽しそうに笑って、ケーキの上に乗っていた一番大きな苺をひょいと摘まんで口へ放り投げてしまった。

「ああ！僕のいちご…っ」

「今日はコレで我慢しておいてやるよ」

隼人は苺を飲み込むと、もう一度斗真の頭を撫でて去っていった。

（もう…いったい何なんだよ、あの人は…。）

みんなが居なくなり、また一人になった斗真は急に寂しくなった。

（会いたいな…）

ティースタンドの上にはもう何も乗っていない。
空いたカップやお皿は順々に下げられてしまい、残ったのは冷めてしまった一客のティーカップ。

それさえも持っていかれてしまい、もうテーブルの上には何も無い。

「斗真」

まるで待ち合わせでもしていたみたいなタイミングで、声を掛けられる。

見上げると、大好きな漆黒の瞳が優しく微笑んでくれていた。
斗真は自然と笑みが零れ、待ち焦がれたように表情が緩んだ。

「どうしたんだ、寂しそうな顔をして」

甘く響く、彼の声。

その心地の良い音を聞いているだけで、斗真は心の中がほわっと温かくなるのを感じた。

「おいで…」

掬い上げるように手を差し伸べられて、斗真は胸が高鳴った。
向けられる甘い視線。

自分だけに聞かせてくれる、優しい声。

どうして自分はこんなにも彼に惹かれるんだろう。

ずっと傍にいたいと、思える唯一人のひと。

自分の存在を求めてくれる、大切なひと。

そう思える人と出会えた。

彼と…生きていこうと決めた。

きっと、これからも何度もすれ違ったり、問題が起こったりするの
だろう。

だけど、それでも自分は…

「蓮……」

あいしてる。

やっと言えたその言葉と共に、差し伸べられたその手を取ったのだ
った——……

最終話（後書き）

最後までお付き合い下さり、本当に本当にありがとうございました！！

また、携帯またはPCもしくは両方から投票して下さいました読者様、本当にありがとうございました！！

途中から都合により毎日更新が出来なくなった時、思うように執筆が進まなかった時など、ピンチの時には読者様がいて下さるということがとても励みになりました。

人生で初めて書いた作品ということもあり、表現力不足で十分に伝えられない部分も多々あったかと思いますが、無事に終えることが出来ました。

本当に本当にありがとうございました！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4343g/>

chronos

2010年10月9日13時48分発行